

ORIGAMI

TANTEIDAN

折紙探偵団

M A G A Z I N E

定価 635円
(本体605円)

吉澤 章 追悼特集

An Issue in Memory of Yoshizawa Akira

折り図 Diagrams

トリケラトプス 西川誠司

Triceratops

Nishikawa Seiji

イベント情報 Event Information

第1回 折紙探偵団 名古屋コンベンション情報

Information about 1st Origami Tanteidan
Nagoya Convention



通巻 92 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内、外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
3. The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

●折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING

谷折り線
Line indicating
valley fold

山折り線
Line indicating
mountain fold

手前に折る
Fold paper
forwards

後ろへ折る
Fold paper
backwards

折り筋を
つける
Making a crease line

段折り
Pleat fold

裏返す
Turn paper over

引き出す
Pull out

図の見る
位置が変わる
Rotation

図が大きくなる
A magnified view

見えない
ところ
A hidden line

押す、
押しつぶす
Push paper in

切る
Cut

表紙解説

吉澤 章像

写真提供:有隣堂

Yoshizawa Akira

Photo by Yurindo

■決して誰にも真似のできない曲面構成を駆使し、生命感を凝縮した作品を数多く生み出した吉澤氏。ご逝去から早四か月ですが、今も世界中から追悼のメッセージが続々と寄せられ続けています。今後も折紙をする人・しない人を問わず、益々大きな影響を及ぼし続けてゆくことでしょう。

(解説:北條高史) Comments: Hojyo Takashi

ORIGAMI TANTEIDAN
折紙探偵団
MAGAZINE
CONTENTS

No. 92



Yoshizawa Akira

P.4 ~ P.23

吉澤 章 追悼特集

An Issue in Memory of
Yoshizawa Akira

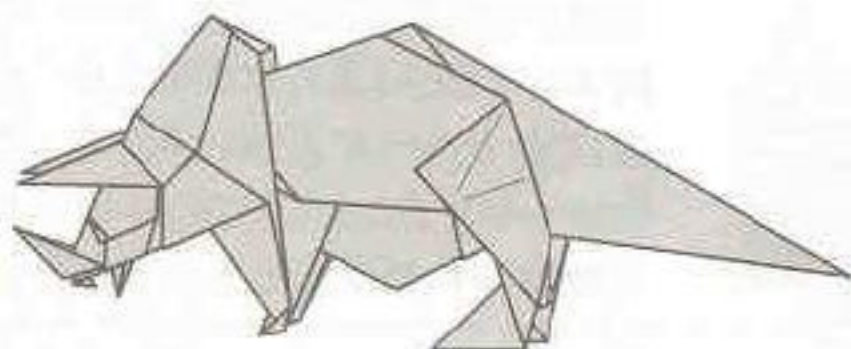
折り図/Diagrams

P.24 トリケラトプス

Triceratops

西川誠司

Nishikawa Seiji



カラーページ/Color

P.20 オリガミ・フォトギャラリー Origami Photo Gallery

解説・北條高史

Comments: Hojyo Takashi

特集/Special Articles

P.4 吉澤 章 一折り紙に捧げた人生一

Yoshizawa Akira:
A Life Dedicated to Origami

P.9 偲ぶ想いを世界から

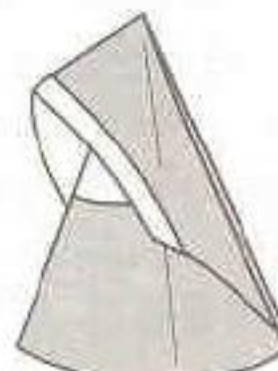
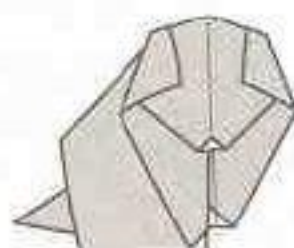
Tributes to the Memory of the
Master Yoshizawa

翻訳：羽鳥公士郎

Translator: Hatori Koshiro

P.14 折り紙の道 一吉澤章・作品集一

Models by Yoshizawa Akira:
The Path of the Master



P.22 アフタヌーン・オリガミ

Afternoon Origami

吉澤章先生との出会い

Akira Yoshizawa
an encounter with the master

デビッド・ブリル
David Brill

翻訳：羽鳥公士郎

Translator: Hatori Koshiro

コラム/Columns

P.33 おりすじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

菅原良子

Sugahara Yoshiko

P.34 折紙三昧

Origami-Zanmai (This Origami and That)

西川誠司

Nishikawa Seiji

情報/Information

P.35 つまみおり Rabbit Ear

2005スペイン国際折紙コンベンションレポート
AEP VIII International Origami Convention Report

ヤドカリの攻撃ーヤドカリ戦争顛末記
Attack of the Hermit Crabs!

第11回折紙探偵団コンベンション直前情報
Information about 11th Origami Tanteidan Convention

第1回折紙探偵団名古屋コンベンション情報
Information about 1st Origami
Tanteidan Nagoya Convention

吉澤 章 —折り紙に捧げた人生—

3月14日に逝去された吉澤氏の訃報は、瞬く間に全世界のペーパーフォルダーに伝わった。そして多くの折り紙愛好家が近代折り紙の世界に大きな影響と遺産を残してくれたOrigami Godの死を悲しんだ。世界中の折り紙グループは、会報で競うように吉澤氏の特集を組み、その功績を讃え偉大さを伝えている。

現在オーストリアのザルツブルク(Hangar-7)で開催中のMASTERS OF ORIGAMI(詳細は次号で紹介)でも特別な存在として紹介されている。ご本人がこのエキシビションをご覧になれなかったことはとても残念だと思う。(やまぐち 真)

新しい折り紙を世界に伝える

吉澤喜代

日本から文化を海外に発信するために外務省の文化課によって吉澤折り紙が選ばれました。当時折り紙は日本の伝承文化の域にありながら昔ながらの折り紙では決して考えられなかったといわれました。

吉澤折り紙の独自の芸術性を評価されました。アムステルダムでの展覧会以後10年の歳月が経ち、世界の人々に折り紙を受け入れ、たのしむ兆しが見えてきた頃です。

第一回は1966年オーストラリア、ニュージーランド、インドネシアへ外務省から公式に折り紙のインストラクターとして派遣されました。キャンベラ(オーストラリア)の小学校が新聞に取材された記事の一例です。吉澤と私は緊張感の中で皆様の喜ばれる反応を受けてけん命にお伝えしました(日経新聞記事とあわせてご覧ください)。

その後日本政府は国際的な文化交流を目的として、新たに創設された国際交流基金に外務省の事業を移行しました。現在の国際交流基金のシステムは初期のものとはかわってしまったようです。

■1966年2月～3月 外務省文化課から折り紙講師としてオーストラリア、ニュージーランド、インドネシアへ派遣される。



▲オーストラリアの新聞では吉澤氏による折り紙講習の様子が紹介された

このようにして国際折り紙研究会と吉澤章は純粋に折り紙を世界に普及することに努力しました。折り紙は世界に広く行きわたりましたが、これからは質の向上があつて欲しいと願ってきました。また入りやすく、登りにくい道と自らを顧みつつ、格調の高い作品の制作に精進しておりました。吉澤折り紙と真っ直ぐに向き合えば作品から伝わってくるものがあるといわれます。

山口様から海外での折り紙をしたときの写真なども入れるようにと言われましたので、古いものの中から適当に出してみました。『民俗学』16号に掲載された「折り紙の旅」(P.6掲載)は始めの頃の折り紙がどのようにしてひろまっていったかという原典としてごらん頂きたいと思います。折り紙の全容ではありませんが、それぞれの国、また人々に影響を及ぼしたことは大きいと思います。

海外への出張は生涯の極く一部分ですが、現代折り紙に何の背景もなかった何十年も前の当時のことを考えながらごらんになってください。

国内のことは展覧会など催しについて最小限の様々なことにしました。膨大な資料を整理しなければならない責務をひしひしと感じます。



▲インドネシア、ジャカルタの師範学校にて



▲ニュージーランドでの講習風景



◀MASTERS OF ORIGAMIのパンフレット
表紙に吉澤氏の代表作であるゴリラが使われている

折り紙使節の記

—三国で講習会・喜ばれた日本の美—
吉澤 章

昭和41年4月2日日本経済新聞記事より

■豪州の保母さんたち

「私は4つの時から50年間折り紙を続けてまいりましたが、外国で講習会をやるのはこの国が初めてです。私は皆さんが折り紙の楽しさ、美しさを理解されて、この国に折り紙の種をまくことができればと考えてやってきました。私たちの手は美しいものを作るためにあるものであって、争いに使うためのものではありません」。

私は会場を埋めた約200人の保母さんたちを前に壇上からそう呼びかけた。さる2月16日、豪州のシドニーで折り紙の講習会が開かれた時のことである。卓上には日本から持参した私の作品が並んでいる。豪州には折り紙の伝統がないので、彼女たちは不思議そうに作品を見つめていた。

私はまず2つ折りのチョウから折り方を教えていった。いきなりむずかしいものからはいったのではついてこなくなるからである。

「1、2、3」と号令をかけながら私が折ると、全員がその通りにまねて折る。できない者には同行の妻が手をとって教える。ただの四角い紙が、たちまち鳥になり花になると、彼女たちは歓声をあげる。自分の手で物を創造したことに素朴な喜びを感じ始めたのだ。カンガルーや火食い鳥やコアラベアを折ってみせると、彼女たちは自分たちの国の動物に私が関心を持っていると言って、

■1972年9月～10月 国際交流基金から、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、オランダ、フランス、イギリスへ派遣される。作品展示とデモンストレーション、講演。



▲スウェーデンの講習風景

非常に喜んでくれた。

■総領事館に質問殺到

私は折り紙が子供の情操教育に役立つことを、力をこめて説明した。たとえば左ききの子供に右ききの習慣を無理しいすと、おねしょをしたり口がもつれたりして情緒障害を起こすことをあげ、いかにすれば折り紙で情操が高められるかを説いた。わずか1時間半ばかりの講習だったが、彼女たちは非常な関心を示した。1ヶ月後、ニュージーランドからインドネシアへ渡るとき、飛行機の都合でシドニーに寄ったのだが、現地の日本総領事館には「どうしたら紙や折り紙の本が入手できるか」という質問が殺到し、館員たちをてんでこ舞いさせたということである。

私がこのような講習会を開いたのは、外務省から折り紙講師として豪州、ニュージーランド、インドネシアの三国に派遣されたからである。ニュージーランドのハミルトンの市長が日本の折り紙に興味を持ち、近藤駐ニュージーランド大使を通じて折り紙の講師を派遣してほしいと依頼されたのがきっかけだったそう。講習の対象は教育者と児童、会場などの設営、通訳は全部在外公館のお世話になった。

■折り紙に一生かける

ところで、私が折り紙を始めたのは4歳の時だった。近所のおねえさんに新聞で舟を折ってもらって家へ持ち帰ったのだが兄弟にこわされてしまい、自分で作ろうとしたのが動機である。私はいま「自由表現による折り紙」という方式を掲げているが、これは戦時中、東京のある鉄工所に勤めていた時に考えついたことである。

当時その工場には小学校を出たばかりの幼年工が送り込まれたが、製図が読めないで、彼らの手になる製品はオシャカが非常に多かった。幾何学的学習が全然できていないせいである。私はその不足を折り紙で補うことを考えた。つまり折り紙は直線的図案だから、紙を折ることで幾何学の知識を身につけさせようというわけである。

これならおかあさんのひざの上から、子供に幾何学を学ばせることになるのではなかろうか。私は工場長の理解で、その研究に専念することになった。折り紙に一生をかける気になったのである。

そして昭和29年にはユネスコ主催の美術工芸教育国際会議に「自由表現による折り紙」の理論と作品を発表した。簡単にいえば、幾何学的な知識養成のほかに情操を高めるという2つのねらいを持つ折り紙である。手は「第二の脳」と言われ、手の動きによって情緒が養成されることは、現代の医学で証明されている。現在私の折り紙は形態、色彩、造形を通じて正常な子供に対してはより情緒を高め、また精薄児には人間的な感情を呼び戻させ、身体不自由児には「作業療法」となることをねらいとしている。

■身障児の心を豊かに

話を戻そう。シドニーには4日滞在して日本人協会の婦人部のお世話で、生花を習っているという豪州のご婦人方にも講習し、テレビにも出た。フィルムは英国にも送られたはずである。テレビのせいか、町を歩いていると、見知らぬ人からも声をかけられ、折り紙を見せてくれとせがまれた。顔色が変わった男が変わったことをやってみせたのが、彼らには物珍しかったのだろう。

キャンベラでは3つの小学校で教えた。最初は2校の予定だったが、どうしても来てほしいという学校があって3校になった。キャンベラは首都だけに役人の子弟が多く、英国式のスパルタ教育を行っていた。みな行儀がよく、配った紙があまると必ず返しにきたし、途中で折るのをやめなさいと言うと、びたりといっせいに手をとめる。

3番目の学校は日本のある小学校と姉妹校になっているそうで、日本への関心は非常に高かった。地理では、太平洋に面した国を教えるとき、まず日本から教えるということだ。外地でそうしたことを聞くのはうれしいものである。豪州人の日本文化への関心は予想外に強く、源氏物語を読んでいるという先生にも会った。日本の文化的遺産

のおかげだと思い、意を強くしたのだった。一般に豪州の教師は第二の国民を育てるのにたいへん熱心である。造形心理学の術語を使っても、彼らはすぐ理解した。それだけに折り紙についても納得のいくまで質問し、自分のものにしようとしていた。

このあと私たちはメルボルンで講習会を開いたのち、ニュージーランドの首都ウェリントンへ飛んだ。ニュージーランドでは5つの都市で講義したが、感動的だったのはハミルトンの身体障害児童の施設へ行ったときのことで、ここはある新聞社の社長が寄付したものと言い、広い庭には芝生が植えられ、建物全体が緑に囲まれていた。

私はまず紙を2つに折って、卓の上に立てるように言った。手足の不自由な子供たちの中には口で紙を折り、懸命に立てようとするものもいた。紙が立つと、彼は喜びに目を輝かせた。目には涙さえ浮かばせている。ともかく自分の力で「平面」を「立体」にしたのだ。これが創造というものであることを、その時彼は知ったに違いない。1枚の紙が、1人の不幸な少年の心を豊かにしたのだ。先生方は、折り紙を教材に取り上げると言い、私に指導要領を詳しくたずねた。

■動乱下でも全員参加

ジャカルタでは3月18日から3日間、毎日2時間ずつ全国から集まった幼児教師から高校の先生方に連続して講義した。ちょうど政変の最中で市内には軍隊が警備につき、夜9時以降は外出が禁止されていた。講習を主催した基礎教育省では、この動乱下では講習生が集まらないだろうと心配していたが、ふたをあけてみると、予定の60人が全員参加した。折り紙への興味というより、教育の熱意がそうさせたのであろう。ここでも前二国と同様、受講者はこちらがへきえきするほど熱心だった。

わずか36日間であったが、私には有意義な旅であった。折り紙の伝統のない3つの国に、ともかく種だけはまくことができたのだから……。

■1976年11月～12月 中米のドミニカ共和国、メキシコ、コスタリカ、ニカラグア、ホンジュラス、エルサルバドル、パナマへ国際交流基金から派遣される。



▲ノルウェー、放送局にて録画



▲イギリス



▲パナマでの講習風景

折り紙の旅

吉澤 章

季刊『民俗学』国立民族学博物館監修16号(1981年)

折り紙は紙の面と線の屈折から生まれる造形です。その歴史は古く、紙が製造されたときからこの国にも、しぜんにはじまったものと思われまゝ。紙という素材が気候風土によって、折り曲げに適しないような乾燥した国には折り紙の伝承はすくなく、その点、湿度の高い日本は折り紙をするのにたいへんよい条件がそなわっています。日本紙の流し漉きは柔軟で、曲げても破れにくい特徴があります。こうした素材をつかった造形が、日本にはふるくからおこなわれてきました。従来の折り紙は、紙の切り口やカドを合わせて折る機械的な操作で、模倣の折りかたでした。たまたま自然物を折る工夫もされましたが、おおくは紙に切り込みを入れてつくりました。わたしの提唱する創作折り紙は、むろんわたしの母国日本の伝統、文化遺産によって生まれたものではありませんが、紙をただ折るだけで自然物を写生したり、わたしたちの精神的な内面活動も抽象として表現します。

オランダのアムステルダム市立美術館において、前まえから文通のあった民俗学者G・レグマン氏と親日家のF・チコチン氏のご尽力により、わたしの折り紙の展覧会が1ヶ月間開催されたのは1955年のことで

した。フランス在住のG・レグマン氏はハーバード大学教授のころから、折り紙の歴史文献の研究と折り紙に、たいへんな理解と情熱をもっているかたです。この展覧会のニュースはヨーロッパはもとより、南北アメリカにひろく反響をよび、その後ニューヨークのクーバーユニオン美術館でも「幾何学と折り紙の装飾的な試み」と題して、わたしの作品を主に、世界の折り紙愛好家の作品の展覧会が催されました。それまでスペインのウナムノ折り紙がヨーロッパ方面に若干おこなわれていましたが、画期的な紙造形として、わたしの折り紙が世界から迎えられようになってきました。

こうして創作と研究に地味な歩みをつづけ、いろいろ要望にお応えして作品を提供し、資料を送ったりしてまいりましたが、その折り紙を海外の人びとに直接お伝えする機会が与えられました。外務省や国際交流基金から、あたらしい美術の分野としての折り紙をひろめ、文化交流に役立てるよう、数次にわたって世界各国へ派遣されました。日本の伝承折り紙の折鶴や奴さんでは何もわざわざ派遣することはないので、あなたのあたらしい折り紙をしてほしいといっただきました。そしてわたしの海外の資料収集もここからはじまりました。

はじめてわたしが派遣された国はオーストラリア、ニュージーランド、インドネシアでした。広大な緑のひろがりヒツジやウシの群れをみながらおりたつたシドニーで、その

日のうちに予定されたわたしの外国での最初の講演は、師範学校でおこなわれました。折り紙の理論と折り方の実習を、学生は熱心に受講してくれました。紙をひと折りすることで、たちまち親しみが湧くのは折り紙のもつ不思議な魅力です。

そこにはわたしの好きな動物がたくさんいます。カンガルーやエミュー、コアラ、カモノハシ、それにヒツジやウシ、ウマなどを折って大変歓迎され、テレビの出演には折り紙の動物たちが大うつしにされました。ニュージーランドでは空港に迎えてくださったジャパン・ソサエティの会長から、コインにデザインされているキウイを折り紙でできないかといわれて、即座に創作したところ、早速翌朝の新聞に紹介されました。

ハンディキャップ・センターでは子どもたちの部屋に案内されたところ、付き添いの先生が、寝たきりの子どもたちにもいる紙を配られました。その子どもは片方の手と口を使って、ひと折り折るのになかなかたいへんでした。すると、そばにいた子どもがつつと歩み寄って、自分の片手を添えて二人でひとつの紙を折ってゆきました。それはたどたどしいものですが、ごく自然に助け合っている姿に、たどようもなく貴い驚きを感じました。

創作折り紙に対する日本の一部の人の偏見は外国にはなく、あたらしい紙造形として、どこでもたいへんな喜びをもって受け入れられ、むしろ、日本古来のものとうけと

■1983年10月～11月 イギリス、フランス、ベルギー、西ドイツ、ハンガリー、チェコスロバキア、旧ユーゴスラヴィア、イタリアへ派遣される。各国に折り紙の会が前後して設立されてゆく。



▲ハンガリー



▲ベルギー



▲フランス、日本文化センターの展示

■1984年3月～4月 パリのエスパス・カルダンにて朝日新聞社の主催で個展が開催され、講習会は連日学校から一般までしぜんに求め、受け入れられたという感があった。



▲講習風景



▲パリの展示会場

■1984年8月 スイスのフィノメナ実行委員会招聘により作品展示と講習会



▲完成したパンダを手に、みな笑顔の講習会

■1984年11月 韓国の京城、大邱、春州、釜山へ国際交流基金より派遣される。文化センターの広い会場に作品を展示して、学校から集団で見学に来られたり、一般の人々にも展覧、講習。新しい折り紙を受け入れる気運が生まれる素地となった。



▲韓国の展示会場

られた様子さえありました。通訳のかたの熱心な協力にもよりますが、こちらの気持ちは受講者に反映して、講演の終わりには美しい合唱で送ってくださったスイスの学生たち、一人の子どもと握手をしたら、皆で列をつくって順番を待ち、小さい子どもには先生が台をもって来てくださったりと、ほほえましかったポルトガルの小学校、ウィーンの日本大使館でおこなったデモンストレーションをごらんくださったオーストリアの文化省の高官は、わたしの手の操作を音楽そのものだとおっしゃってくださいました。

フランスではミューゼ・ギメの300名の会場を、これまでの文化催しの想像を上まわっていっぱいにし、最後まで残った人びとは「禅と折り紙の結びつきについて」と問い、若いときに仏門にあったわたしは、色を選び何枚かの紙を抽象に折ることで答えました。イギリスはブリティッシュ・オリガミ・ソサエティの会員とバーミンガムで合宿研修をともにすることができました。ふるくからの知人で会長のロバート・ハービン氏といっしょにBBC放送にも出演しました。わたしの作品は日本紙の上等なものを使うからよくできると考えられておりました。かれらに、技術的にもっと努力すれば芸術的な作品に高められることを勧めても、材料のせいにして理解できないので、ホテルの紙製の白いバス・マットのあたらしいものをもらって、適当に裁ち、白鳥の制作の過程を披露しましたところ、感嘆の声がもれました。白鳥はその姿の美しさか

ら、折り紙の作品にしても、どこの国でも喜ばれました。ソ連の高官には太古からシベリアと日本を往き来する鳥ですからと、デモンストレーションをして制作した作品を親善の願いをこめて差し上げました。

10年ほどたってふたたび行ったインドネシアではまったく同じような面と、すべてがいれかわったような面がありました。滞在中の日程をおなじ会場で何回も過ごしたビルマの人びとは、同胞のようないとおしさで、いまもなつかしく胸にせまってきます。オセアニア地方、ヨーロッパの国々に、東南アジア方面、中米諸国を歴訪しましたが、それぞれの国にちがった言葉をもった人がいて、それぞれの民族の文化があります。

折り紙はあたらしい分野の造形として求められ、先年はイギリス、フランスから1ヶ月あまりの短期ながら勉強に来日した人がいました。フランスの美術の先生は、もっと深く研究したいからと、再度の来日を希望しています。

折り紙は多分に数学的な直線図案形ですが、自由表現による折り紙構造のわたしの創作折り紙は、折る人により個別的で個性のだせる折りかたです。折ること、曲げること、ものを包み、結ぶことは人類が太むかしからなんらかの形でしてきたことです。そうした紙を折る操作のなかに、手仕事の原点と心の安らぎがあり、これからはますます世界の人びとに親しまれてゆくことと思います。

■1987年、1988年、1989年3月 日本週間にて展覧会と講習会。3回の訪中で折り紙が吸い込まれるように人々に浸透していった。国際折り紙研究会会員同行。



▲1987年、第1回目の中国での展示



▲1988年、第2回目の訪中での講習風景



▲1989年、第3回目の展示会場にて

■1989年12月 ベルー日本人移住90周年記念折り紙展。



■1992年2月～10月 スペイン、セビリア万国博覧会における日本政府館に折り紙で「日本の四季」を展覧、同博覧の全展示の中でも最も好評を得た。



■1999年6月 アメリカ、セーラムのピーボディ博物館において、Emiko KrucknerやMichael LaFosseの協力で展覧会。



▼同年のOrigamiUSAコンベンションにも参加



■1997年9月 スペイン、サラゴサに於けるスペイン折り紙の会に参加。



■イギリス、ヨークに於けるBOS30周年記念コンベンションに招待される。



■2000年3月 オマーン国、在日本大使館によってスケジュールが組まれ、講習、作品展示。



■1982年から1999年まで 筑波大学付属小学校に於いて、子供たちは長年文化祭で折り紙のたのしさ、造形のよろこびを共にして美術教育の基礎を子供たちに伝えることが出来た。



▲1995年11月の講習風景

■1989年8月 東京、木のアトリウムにて林野庁主催による展覧会と講習会 木の素材を生かした建築構造は折り紙の展示もマッチしてしぜんで気持ちのよい雰囲気をかもし出している。



■1995年8月 24時間テレビ(大阪よみうりテレビ)「愛は地球を救う」 国際折り紙研究会は京都支部と連携して大型作品を時間内に仕上げる。



■1995年7月 夏の特別講演会 Mrs. Marsha Dupre (USA)参加、この年のテーマの一つ、念願のゴリラの制作に満足する。



■1995年8月 東海大学社会教育センターにてマンタの折り方講習会。子供たちは身近に見てきた水族館のマンタに取り組む。



■1997年12月 愛 LOVE ジュニア 録画のためスタジオ風景(テレビ朝日) 恐竜イグアノドンとブラキオサウルスを会員も手伝って指導する。



■1998年9月 大和書道院展における書道と折り紙のコラボレーション。



■1999年5月 荻窪タウンセブン展示場にてふるさとの一つともいえる東京杉並の荻窪で地元の人たちと過ごす忙中閑のひととき。



■2005年7月30日～8月1日 第35回夏の特別講習会Summer Seminarを小田原市のアジアセンターに於いて開催する。吉澤折り紙の理論と技術を究める重要な行事として続けている。

■2005年9月13日～11月6日 紙の博物館企画展として「還ってきたORIGAMI吉澤章創作の原点から現代まで」が開催される。

略歴

- 1911年(明治44) 栃木県に生まれる。幼少の頃より折り紙に親しむ。
- 1938年(昭和13) 鉄工所に働きながら、本格的に折り紙の研究に入る。
- 1950年(昭和25) 栃木県教員組合の推薦により、教育的美術造形としての折り紙を発表。
- 1952年(昭和27) 『アサヒグラフ』をはじめ新聞、雑誌、展覧会などで創作折り紙を社会的に広める。
- 1954年(昭和29) 初の著書『折り紙芸術』刊行される。国際折り紙研究会を創設。
- 1955年(昭和30) オランダのアムステルダム市立美術館において海外初の個展を開き、画期的な造形美術「ORIGAMI」として世界の注目を浴びる。その後海外各国、国内各地の美術館やギャラリー(有隣堂、高島屋、三越など)で展覧会を開催。
- 1957年(昭和32) 著書『折り紙読本』を刊行。また古書『千羽鶴折形』を解説、普及をさせる。
- 1959年(昭和34) ニューヨーク市クーパーユニオン美術館において展覧会。
- 1963年(昭和38) 著書『たのしいおりがみ』が毎日出版文化賞を受賞。
- 1964年(昭和39) 長年探し求めていた折り紙の古書『何哉等草』の原本を朝日新聞大阪本社調査部で発見。
- 1966年(昭和41) 外務省から折り紙の講師としてオセアニア方面へ、またスイス、イタリアなどヨーロッパ(1968年)へ派遣される。
- 1971年(昭和46) モービル児童文化賞受賞。
- 1972年(昭和47) 国際交流基金の要請でヨーロッパ各国に派遣される。2000年まで世界数十カ国を訪問し、作品展や講演、ワークショップを行う。
- 1983年(昭和58) 折り紙による文化の普及に尽した功績により、勲五等雙光旭日章を叙勲される。
- 1984年(昭和59) パリのエスパス・カルダンで朝日新聞社主催「日本の折り紙展」、また同展が松屋銀座で開催される。
- 1986年(昭和61) 折り紙とその背景になる日本文化の紹介に尽したことによる外務大臣賞を受賞。
- 1987年(昭和62) イタリア・ミラノ市の招聘により作品展。ローマ日本文化会館主催による個展及び講演。中国に創作折り紙を普及(～1989年に渡り)。
- 1992年(平成4) スペインのセビリア万国博覧会の日本政府館に「日本の四季」を折り紙で展示する。
- 1993年(平成5) ビーボディ・エセックス(アメリカ)にて個展と講演。
- 1995年(平成7) 国際折り紙研究会の四十周年記念展(練馬区立美術館)を会員と共に催す。ドイツ三都市にて展覧会と講演会を開く。
- 1999年(平成11) 米寿記念「吉澤章創作折り紙」展(朝日新聞社主催)を東京銀座、札幌、京都、埼玉川越で開催。
- 2000年(平成12) 東京・王子の紙の博物館五十周年記念企画展として「創作折り紙」開催される。同館では1962年以来、毎年講習会や作品展が行われている。国際交流基金よりオマーン国へ派遣され、学校や各施設にて日本文化紹介のため作品展と講演、指導を行う。
- 2001年(平成13) 美濃和紙の里会館(岐阜県)、池田町立美術館(長野県)に於いて個展を開催。ロンドンCrafts CouncilのOn paper: New Paper Art 展に依頼されて出品する。
- 2002年(平成14) 「吉澤章創作折り紙の世界」展を佐野美術館にて開催。
- 2003年(平成15) 新春特別展を横浜市有隣堂ギャラリーにて催される。同ギャラリーでは10回となり、創作折り紙は広く深く浸透している。9月から11月まで出身地の栃木県にて「創作折り紙展」を開催。現在、自治体、文化施設その他各所で展覧会や作品の発表、折り紙の理論と技術指導を定期及び随時行っている。

2005年3月14日

総てを折り紙に捧げて長い一生の終焉を迎えました。

写真解説・略歴 吉澤喜代

偲ぶ想いを世界から

Tributes to the Memory of the Master Yoshizawa

世界から故、吉澤氏を偲ぶメールが沢山寄せられた。思い出の言葉、エピソード、感謝それぞれの想いが亡き吉澤氏に届くことを願いながら紹介したいと思う。

Translator: Hatori Koshiro
翻訳: 羽鳥公士郎



思い出に残るお手伝い

デビッド・リスター(イギリス・BOS)

吉澤さんが初めてイギリスを訪れたのは1972年のことでした。彼はBritish Origami Society (BOS)の会合に出席し、私たちはすぐに親交を深めました。イギリスの折り紙人も彼の作品の本質を理解するようになり、彼に会うために日本を訪れる人もいました。1983年に吉澤さんがイギリスを再訪したのをきっかけに、その翌年からBOSの副会長になっていただきました。私は1994年大津の第2回折り紙の科学国際会議でも彼に会い、作品を本当に生き生きとしたものにするには実際の動物をじっくり研究しなければならぬと教えられました。

吉澤さんが最後にBOSを訪れたのは1997年のヨーク・コンベンションでしたが、そのころには私たちは本当の友

人になっていました。私は彼にインタビューを申し込み、彼は快諾してくれました。おかげで、私は彼の半生についての詳しい文章を書くことができました。それがきっかけとなって、2000年に米寿記念の展覧会が京都で開かれたとき、吉澤さんは私を数少ないゲストの1人として招いてくださいました。彼のバラエティ豊かな作品を一堂に見ることができたというのは、私にとっては初めてのことであり、大変うれしいことでした。昨年夏にはもっとうれしいことがありました。ガーション・レグマンさんの未亡人ジュディスさんが彼の遺品をBOSに寄付したのですが、その中から吉澤さんの初期の作品が見つかり、それを吉澤さんにお返しするのに私もお手伝いできたのです。この作品は、1950年代のアムステルダムとニューヨークの展覧会の後で失われたと思われていたのです。吉澤さんが他界する前に作品をお返しす

ることができて、ご本人も大変喜んでくれたことでしょう。

私が吉澤さんとその作品を知ってから50年、ご本人にお会いしてから30年になります。彼は幼少のころ病弱だったということですが、それにもかかわらずこれだけ長く充実した人生を送ったということをうれしく思います。その間、折り紙はさまざまな方向に発展しましたが、吉澤さんはいつまでもその中心であり続けることでしょう。



生命の系統図

国際折り紙研究会会員 塩川 誠

雑誌の編集部につとめていた関係で、吉澤先生には折り紙の連載をお願いし、また書籍担当になってからは10冊ほどの著書をつくりました。

ある日、「脊椎動物の基本形は六角。正方形の対する角を中心に合わせて折ると六角形になるのですべての脊椎動物を折ることができる。対角線を脊椎として両端が頭と尾、あとの4つの角が前脚、後脚になる」と話され、さらに、「2枚の正方形の紙を重ねて、対角線の方へ1枚をずらせると同じように角が6つになる。1枚で動物を折ると難しくなるけれど、2枚の正方形で

前半身、後半身を折って組み合わせると比較的やさしく折ることができる」と。『折り紙読本Ⅱ』に載っている猫、ベガサス、ぞうなど2枚で折る動物の後半身をつくる時、私はみぶるいするような感動を受けるのです。先生が「基礎折りA」と規定されているものをまず折って、2つに分かれた先の部分を引っ張るようにして折り方図にしたがってまとめると、一瞬にして動物の後半身ができてしまう。その「基礎折りA」とは伝承折り紙「つる」そのものなのです。いつの頃からか、たくさんの人が数え切れない「つる」を折ってきて、そのなかに脊椎動物の後半身がひそんでいることを見抜いた人が現れたことは奇跡というより他ないと思います。

ある日、先生の仕事場に置かれた手

控えと思われる大きな紙に、一ヶ所から出た数々の線がさらに分岐し、たくさんの節に印と文字が書き込んであ

るのが目に入りました。「あ、これこそ先生がご自分に課されている折り紙による生命の系統図」とわかりました。「折り紙を折るために神からつかわれた2本の手」と自ら話された手が数万点ともいわれる貴重な作品をわれわれ人類のために遺されたのです。



紙の中に吹き込まれた 命のお手本

ロバート・J・ラング(OrigamiUSA)

吉澤章さんは、私たちすべてにとって、発想の源であり、活動の基準点でした。私がまだ若く、何とかして名を成したいと思っていたころアリス・グレイさんから、吉澤さんがセミを創作するのに20年かかったという話を聞いて、「フーン、私だったら20年も要らないぞ!」と思いました。そしてその場で創作を始め、自慢の作品ができたので、私の最初の本に収録しました。ところが、何年か経つと、その作品の欠点が見えてきました。そこで私はもう1つの作品を創作しました。しかし間もなく、その作品にも弱点が目につくようになりました。それを繰り返す中で、2年前、日本折紙学会のコンベンションに参加した折り、静岡市で実際のセミをじっくり観察して、もう一度創作を始めました。その結果が「静岡

のセミ・作品番号445」です。これでやっとけりがついたと思いました。しかし、カレンダーを見てみれば、私がこの題材に取り組み始めてから25年が経っているではありませんか。私は結局吉澤さんよりも5年長くかかってしまったわけです。

吉澤さんにとっては、折った形に生命が宿っているということが最も重要で、それだからこそ、彼の作品は今でも私たちを啓発し続けているのだと思います。1970年代から1990年代にかけて、コンプレックス折り紙の「黄金時代」には、折り紙設計の道具が発達し、それまでは考えられもしなかった複雑な形が作れるようになりました。吉澤さんは、概して、この動きの外側に居続けました。逆に、コンプレックス折り紙では、技術の発展に焦点が当てられ、生き生きとした形を作ることはあまり省みられませんでした。しかし、世紀が変わるとともに、再び最終的な形が強調されるようになってきました。技術は、芸術的な目標を達成するための道具という、あるべき位置に戻りました。吉澤さんは、初めから芸術的な形の

重要性を認識しておられ、彼の本や講習、展覧会はいつでもそのような哲学を表していたのです。彼の作品は、紙の中に吹き込まれた命のお手本であり続けます。それは、鶴の基本形から折った鳥にとっても、足が100本あるムカデにとっても、お手本なのです。彼は世を去りましたが、彼の作品は、初心者から上級者まですべての折り手に対して、創作意欲をかき立て、道を示し続けるでしょう。私はかつて、十分に経験をつめば吉澤さんのように折ることができるだろうと考えていましたが、それはいささかばかげたことでした。今では、十分に経験をつめば、彼の非凡な作品の真価を理解できるだろうと思うばかりです。そして、私にとってはそれで十分なのです。



Readers' Digestの記事

マイケル・ラフォース(OUA)

吉澤章さんの作品を見るのがなかったら、私は折り紙アーティストになっていませんでした。吉澤さんの作品を初めて見た日は、今でもまるで昨日の日のように思い出します。それは Readers' Digest 誌の記事でした。その写真と文章は、まさに私の人生を変えました。吉澤さんの自画像が掲載されていましたが、それがなんと折り紙なのです! そこにはアーティストのタッチが認められました。私はそれまで、折り紙でそういうことができるとは考えてもいなかったのです。しかし、

それはなんと難しいことでしょう。その日以来、折り紙は私にとって単なる趣味ではなくなりました。でも、この新しい芸術を学ぼうにも、私には折り図もなければ、教えてくれる人もいませんでした。私はただ、彼の作品の写真の前にして座り、そこから多くのことを学びました。紙、タッチ、そして題材を実現するために必要な根気。

私は彼の作品に駆られて努力しました。よい紙を見つけることも、買うこともできなかったのですが、16才のときに、紙漉きを独学で学びはじめました。吉澤さんがどのようにして折っているのかが分かりませんでした。彼が自然から学んだと言っていたので、私も自然を

研究しました。そして私自身の方法を編み出したのです。芸術の真価を決めるのは、おそらく、それが他人にどれだけ影響を与えたかということ

ではないでしょうか。私は吉澤さんの芸術から大きな影響を受け、そのことをうれしく思っています。彼の作品がいつまでも私たちを感激させ、私たちを導いてくれることを願っています。





私の生き方にも影響

ピーター・エンゲル(USA)

吉澤さんがもう私たちのそばにいないということは、多くの人にとっても同じだと思いますが、本当に悲しいことです。私が初めて吉澤さんに会ったときのことは、私の本『Folding the Universe』に詳しく書きました。しかし、吉澤さんが他界したという知らせを聞いて、彼を見知ってから20年を振り返ってみると、彼に出会ったことはそこに書いたよりもっと大きな意味を持っていたことがはっきりと分かります。私が吉澤さんから学んだことは、折り紙だけでなく、私の仕事である建築にも、私の生き方そのものにも影響を与えています。自然の声に耳を傾けること(水はいつでもどこに流れるべきかを知っている)、現在地と目的

地を知ること(どこへ行くべきかを知らなければ、コンパスは役に立たない)、この世のものすべての相互連関に心を留めること(すべての生き物は同じ空気を呼吸している)、そしてもっとも重要なことに、すべてのものに隠されている本質を見つけること、私たちの五感で経験できることはベニヤ板のように薄っぺらな表層にすぎないことを、吉澤さんから学びました。

その後私は、アジアの芸術や文化を深く研究することにしましたが、それはおそらく無意識のうちに吉澤さんの後を追いかけていたのだと思います。スクリーンに投影されてはじめて生命を得るインドネシアの影絵人形、私が折り紙で創作したことのある菩提樹の葉やベゴニアの葉の非対称な形、重力だけを使った古代スリランカの灌漑設備(私と妻はこれに関する建築プロ

ジェクトの仕事をしたことがあります)、インド音楽のラーガの中には夕暮れ時に



しか演奏できないものがあることなどに私が魅かれているというのは、吉澤さんの影響でしょう。影、非対称性、流れ、無常。私は若いうちに、吉澤さんの深遠な思想や雄弁な芸術のおかげで、このようなアジア的な不朽の概念に触れることができて、とても幸運だったと思います。残念ながら、このようなことはアメリカの文化においては評価されず、認識すらされないものです。しかし吉澤さんなら、折り紙には目に見える以上の価値があるとおっしゃることでしょう。

垣根を乗り越え

ジョン・スミス(BOS)

私が初めて吉澤さんに会ったのは、20年以上前のことです。彼の非凡な才能と彼の教えは、私にとって大きな刺激となりました。彼の講習を受け、彼の献身的な態度に触れ、彼が折っているところを目にすることができたというのは、大変光栄なことだったと思います。彼が日本から持ってきて私たちに見せてくれた作品は、まるで生きているようで、1つ1つが至宝でした。

後に、先生がイギリスの学校で講習をすることになって、私は調整役を仰せつかりました。このときのことは一生忘れないでしょう。吉澤さんは子供

たちに愛を伝え、子供たちはそれを吉澤さんに返したのです。彼はまるで子供に戻ったか



のように、折り紙と一緒に楽しんでいました。吉澤さんの力によって、子供たちはお互いのあいだにある垣根を乗り越え、紙と折りとも一緒になって、魔法のような新しい世界を生み出したのです。

私は、先生のような人と知り合うことができて、幸福だと思っています。





先生というより友人

ミック・ガイ (BOS)

1982年にバーミンガムで BOS コンベンションがあったのですが、偶然にもその3週間ほど前、日本大使館から私に、吉澤さんがイギリスを訪れる予定だという連絡があり、日程をコンベンションに合わせてもらいました。それが、私と吉澤さんとの初めての出会いでした。このときは、吉澤さんは私たちの先生でした。私は彼の本を読み、作品の写真を見ていましたが、実際に作品を見るのは初めてで、彼がいくつかのスーツケースの中から作品を引っ張り出すたびに感嘆の声を上げました。彼の講習を受けたときは、最初に

半分に折っただけで、紙の目の向きが逆だと言われたことを思い出します。このコンベンションは本当に忘れられない出来事となりました。

その後10年ほどが経ち、BOS の願いがかなって吉澤さんが再びイギリスを訪れたとき、私は BBC のプロデューサーに向かって、吉澤さんはテレビ番組で取り上げる価値があると説得しました。彼らはしぶしぶ取材することになりましたが、実際に吉澤さんの作品を見るなり態度ががらりと変わって、吉澤さんを番組の一番よい枠で紹介したばかりでなく、その年の年鑑でも見開きで取り上げました。吉澤さんも本当に喜んでいました。

吉澤さんは、何度か私たちのコンベンションを訪れるにつれて、先生という

より友人となりました。しかし、私にとっては、彼の作品は右に出るものがありません。彼の作品は動きを感じさせ、また対象の形を正確に捉えています。

彼は単なる犬を折るのではなく、品種を折り分けることもできるのです。吉澤さんは私たちのもとを去りましたが、彼の作品と彼の教えはいつまでも称賛の対象であり続け、私たちに影響を与えるのみならず、不運にも彼に会うことのできなかった人たちにも受け継がれてゆくことでしょう。



雑誌に掲載された自画像

エリック・ジョワゼル (フランス)

私が初めて吉澤さんの作品を見たのは、全くの偶然からでした。それは本当に衝撃的でした。先生はちょうどパリで展覧会をしていて、残念ながら私はその展覧会を見逃してしまったのですが、雑誌に掲載された自画像は今でも初めて見たときと同じように

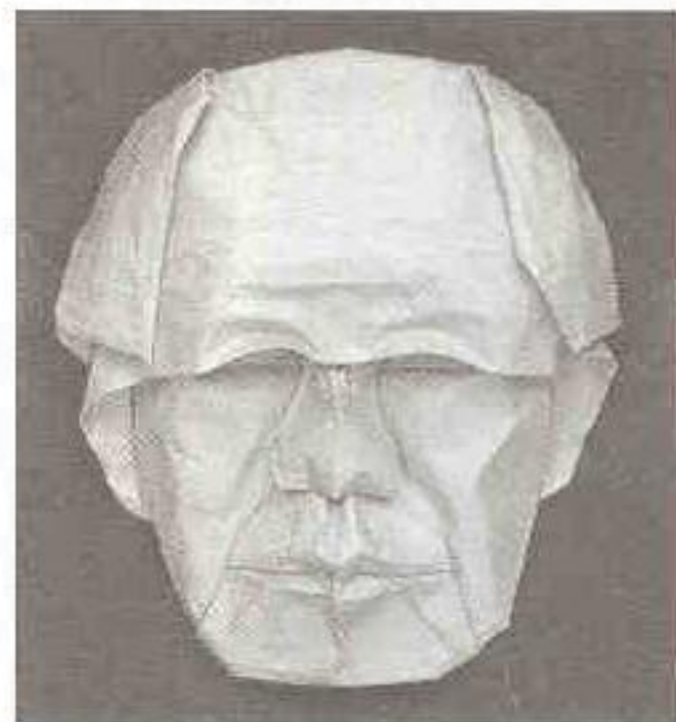


私の心の中にあります。その作品は生き生きとして感情に満ちているので、1枚の紙から折ったものだということも信じられません。私が折り紙を始めたのは、この自画像がきっかけだったことに間違いはないのですが、実際に折り始めるためにはもう数年が必要でした。フランスでは、当時折り紙はまだほとんど知られておらず、フランス語の本はなかったのです。

後に、日本語の図書館で吉澤さんの本を見つけることができました。1つ1つの作品を熱心に学び、何年も折り続け、そして自信を持って(おろかにも、というべきでしょうか)自分で創作を始めたのです。吉澤さんの本は、ほかのどの本とも異なっていました。「普通の」本は、すべての手順を細かく説明しているのに、初めてでも折ることができますが、そこから学ぶものはありません。先生の本では、研究し、熟考し、写真を注意深く観

察しなければなりません。そのようなことに充分時間を費やせば、自分が大きく前進したということに気付くのです。この意味で、これらの本は、私にとって今まで出版された折り紙の本の中で最良の本であり、最大の発想の源なのです。

先生、あなたはいつまでも、私たちの心の中で生き続けます!



自画像「米寿記念展」図録(朝日新聞社)より。

リーダーズ ダイジェストで 世界に

元リーダーズダイジェスト編集員 市山裕子

吉澤先生の作品に対する純粋で真摯なお姿が私の心に深く残り、いつの日か先生をダイジェスト誌で紹介したいという思いで一杯になりました。

1969年、米国本社よりピューリッツァー賞作家のL・ストウ氏が来日し、吉澤先生を紹介しました。インタビューを重ね、記事が出来上がり、1970年には13か国語に訳され、リーダーズダイジェストの32カ国の各版に掲載されました。

去年1月BOS誌に偶然掲載された作品が、50年前に行方不明となった先生の作品であることがわかり、取り戻したいとのご希望を伺いました。BOS会長のプリル氏、リスター氏のご理解とご協力をいただき、7月に先生の手元に作品が返還されました。先生の作品は全て先生の愛する子供で、「私の代わりに、長い間色々な国を旅して帰ってきたのだね」と、失ったと思った子供との再会に、お顔を輝かせていらっしやいました。

自然の中の美しさに心を惹かれ、その中に溶け込み、静かに作品の最高の形を思い描き、指でその形を作って生命を吹き込み出来上がった作品は、世界の芸術としての折り紙において、卓越したものであったと思います。

先生とのお交わりを感謝し、先生の遺された作品を日本の宝としてばかりでなく、世界の宝として保存できますよう心から願っております。

紙の世界を選んでくれた

ジャン・ポーリッシュ (OUSA)

吉澤章さんが他界したと聞いて、私たちはみな悲しく思っています。吉澤先生は、1950年代にまったく新しい作品を発表し、折り紙界に革命をもたらしました。伝統的な手芸を芸術に変えたのです。

今日の折り紙は多種多様ですが、その流れをたどってゆくと、すべて吉澤さんにまでさかのぼることができます。私たちの団体 OrigamiUSA についても、その設立には吉澤さんが決定的に重要な役割

を果たしました。彼がリリアン・オッペンハイマーさんに設立を勧めなければ、OrigamiUSA は存在していなかったでしょう。その後も、彼は私たちの大切な友人であり続けました。吉澤さんは、みずからの心と魂を表す手段として紙を見出しましたが、彼は、どんな世界を選んだとしても、立派な芸術家となったことでしょう。私たち折り紙人としては、彼が紙を選んでくれたということを、とてもうれしく思っています。



厳しく優しい

ジューン・サカモト (OUSA)

私は、13年ほど前に東京を訪れたとき、吉澤先生にはじめてお会いしました。彼のアトリエを訪ねてすぐに失礼するはずだったのですが、彼が次から次に作品のコレクションを見せてくれたので、結局3時間以上もお邪魔をしてしまいました。それはまさに折り紙の宝物でした。そのと



きに、彼自身と彼の作品とに畏敬の念を持ったことを思い出します。

その後も何度となく吉澤さんとお会いする機会がありましたが、彼の人間性と創造力に対する尊敬の気持ちはますます大きくなるばかりでした。彼はとても厳しい人で、私も何度か叱られましたが、それは彼が折り紙について真剣に考えていたからだと理解しています。その一方、彼には陽気な側面もありました。吉澤さんと一緒にいるのは楽しかったし、そのことは決して忘れないでしょう。彼がイギリスやアメリカを訪れたとき、私は案内役を務めることができ、とても幸せに感じています。

わすことができたのは数回しかない。それもうちとけてお話をさせていただくというものではなかった。ご本人を前にした緊張と、それまで耳にしていた諸々で、私は構えてしまった。しかし、少ない会話の中から、柔和な微笑みの中に妥協を許さない強さをお持ちで、それは自作に対するゆるぎない自信と誇りに裏打ちされていると感じられた。

BOSのメンバーのお宅で、吉澤とサインが入った一匹の蛇を手にとって拝見したことがある。手のひらに載るほどの小

さい白蛇は、魂をこめ込みに作成された重みがあり、温度があり、紙の細かい皺は皺ではなくタッチで、紙がその形にしかなり得

ないようであった。気がこもり、そこに確かにYOSHIZAWAがいた。一匹の蛇。だれも同じものを作れない。吉澤章は作品と共に、これからも末永く伝説の中を生きていけるのだと思う。



一匹の白蛇

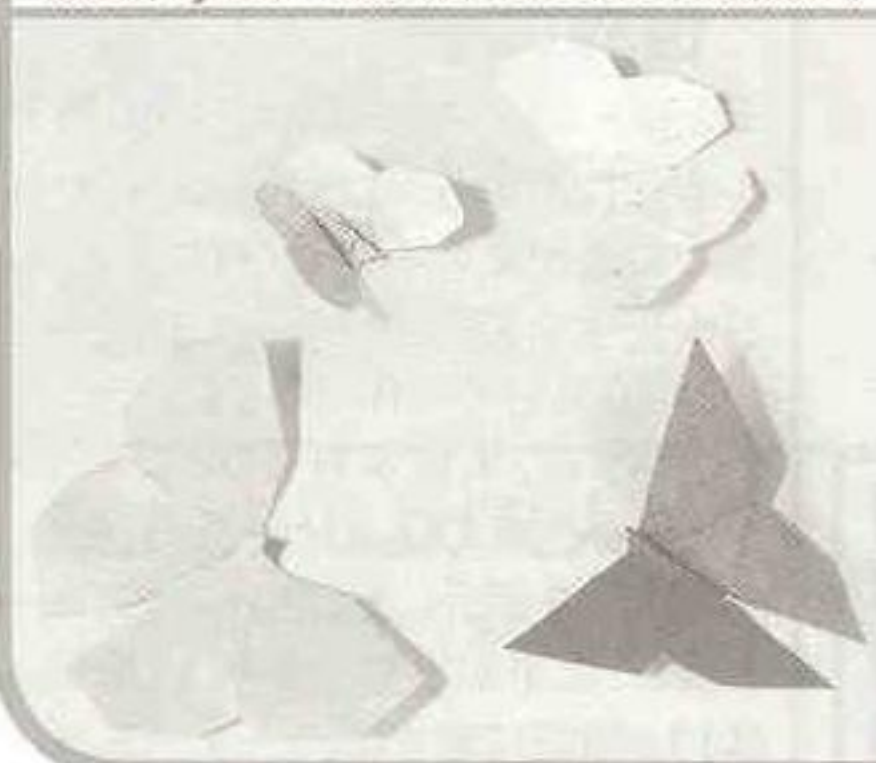
布施知子 (JOAS)

人はどのように記憶されていくのだろうか。折り紙の場合、果たして作者と作品は不可分なものとして伝わっていくのだろうか？ 強い個性を持った作品はともかく、簡単な折りでおもしろければおもしろいほど作品が一人歩きしていくような気がする。それはそれで作者冥利と私は思うのだが。

吉澤氏にお目にかかり直接言葉を交

折り紙の道

Models by Yoshizawa Akira: The Path of the Master



一枚の紙で形作る折り紙は素晴らしい造形です。

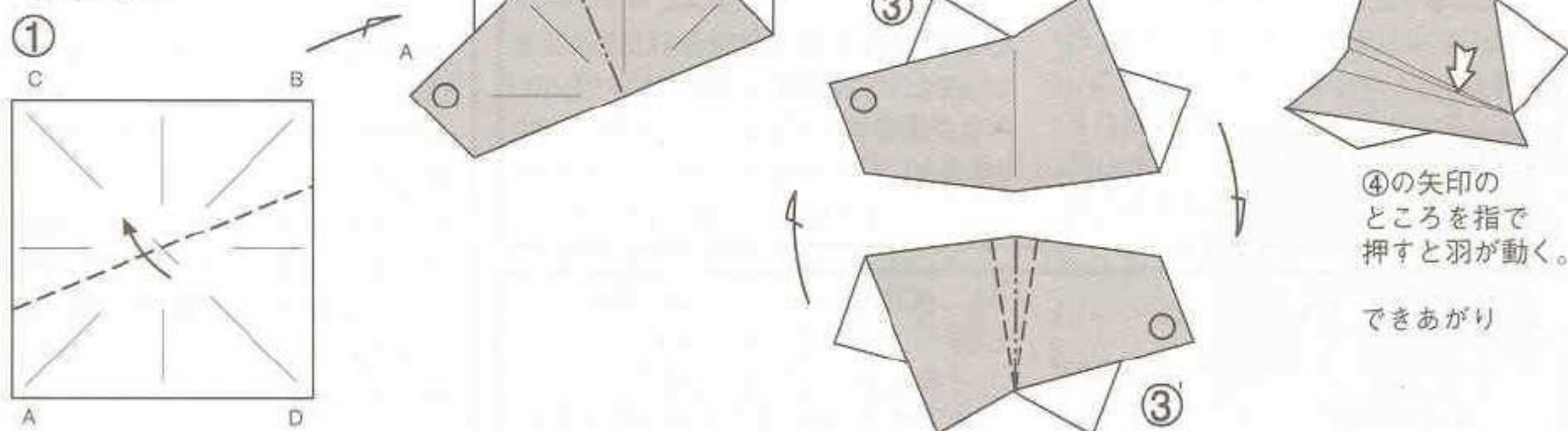
ここには身近なもの、ことをテーマにして基礎となるような折り線構成のものを選びました。この前後に形のあることが何となく見えてくると思います。

吉澤章は問われれば、自然物を折るにはよく観察するようにと応えていました。すがたかたちを表面からよく見ることは内なる骨格や筋肉まで、更には語りかけてくるものまでが見えてきます。人の心は勿論、空気や岩石にまでことばを感じ、総てに自然の法則を重視し創作していました。花の美しさ、動物の愛らしさや躍動感を最も大切に考えていました。

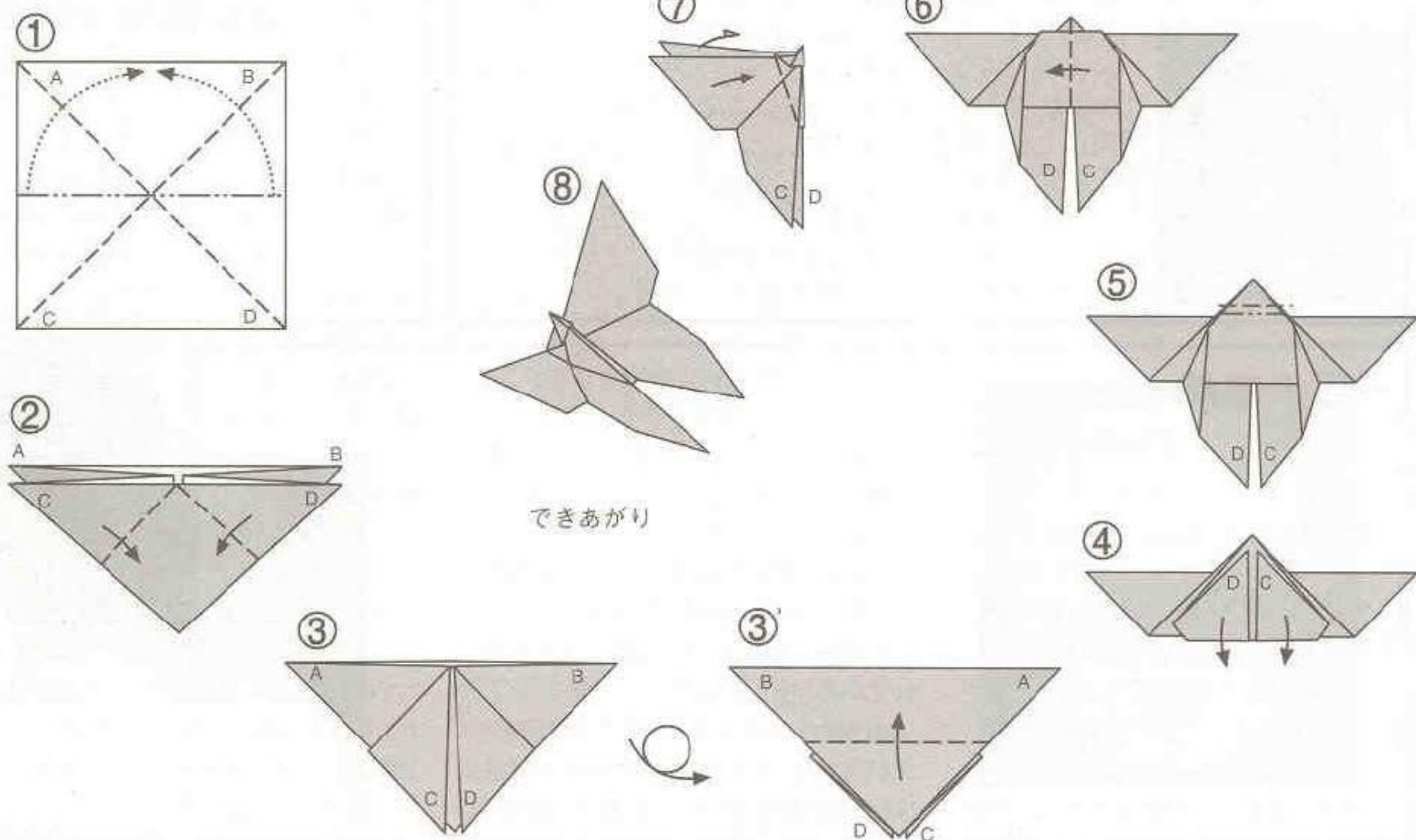
リアルに折れば必然的に折り線が複雑になりますが、折り線構成が昇華されないまま、折るプロセスが多いほど高度な折り方と思われるようです。対象物の本質が表現できれば、シンプルでもリアルでもよい折り方です。造形本来の正当性があり、心を惹き付ける折り方ならばたのしんで折れます。それはきっと皆様の素地となってゆくと思います。

形は無限です。美しく上品に、そしてたのしくあたたかい心の通う折り紙であるようにと、吉澤章は常に望んでいました。(吉澤喜代)

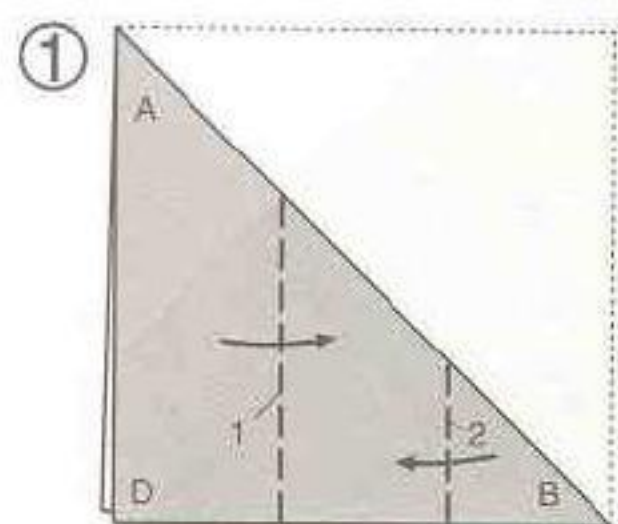
ちょう1



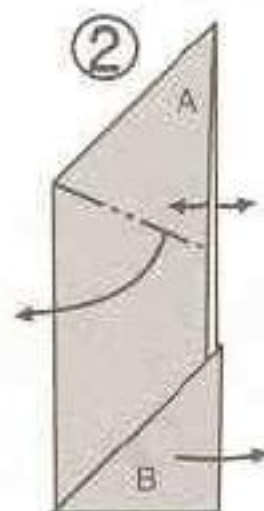
ちょう2



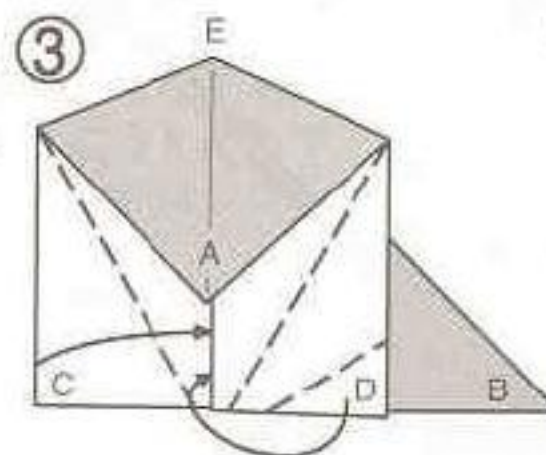
子犬A,B



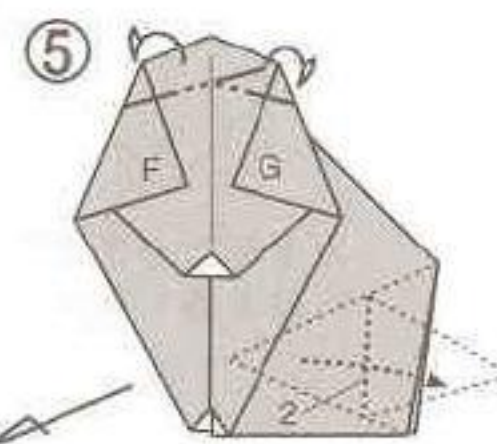
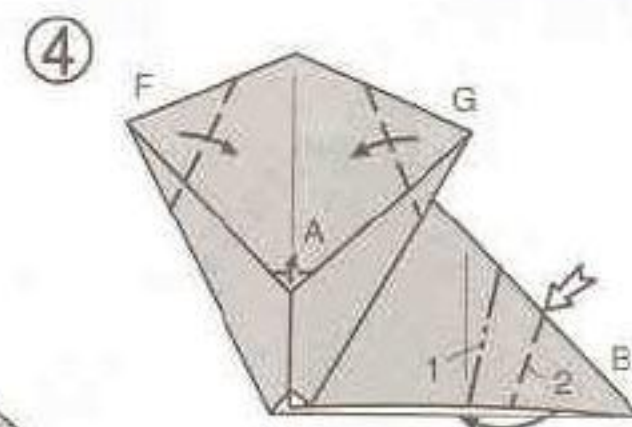
正方形の紙を対角線に折り、さらに図の割合に折る。



Bをのぼし、Aの袋を広げる。

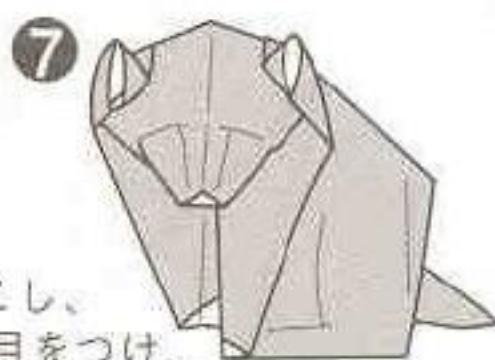


矢印にそれぞれ折る。



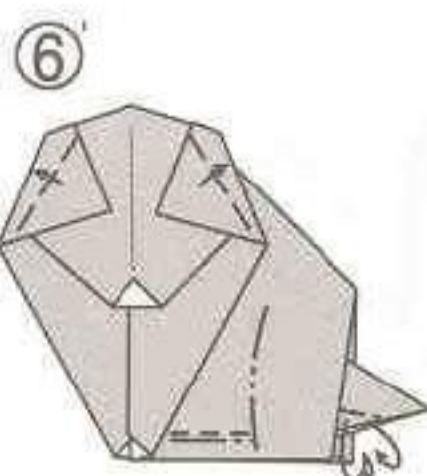
鼻と耳をつくり、Bを山線で折り込み、谷線で折り返して尾を作る。

子犬B

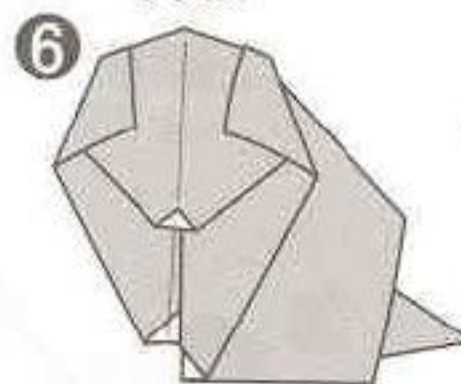


Bは耳を引き起こし、後足の形に折り目をつけ、尾を細くしたもの。

できあがり

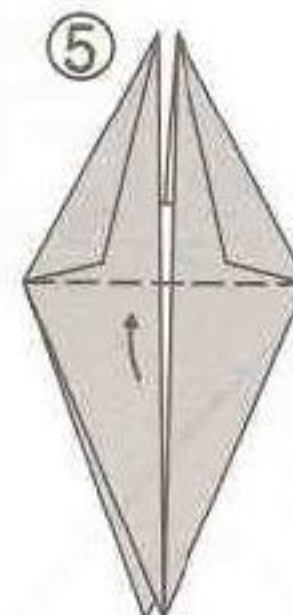
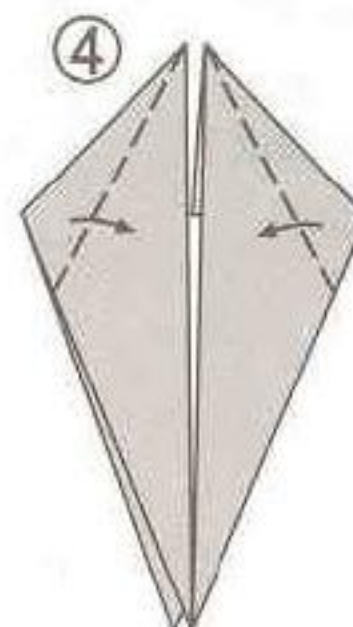
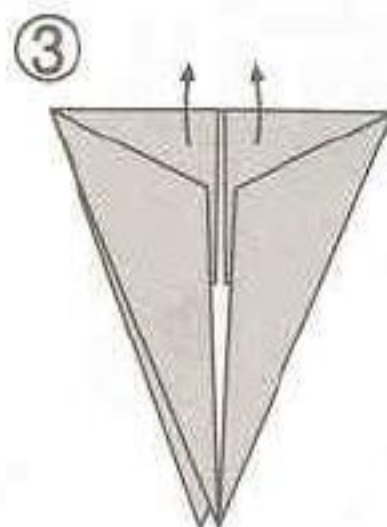
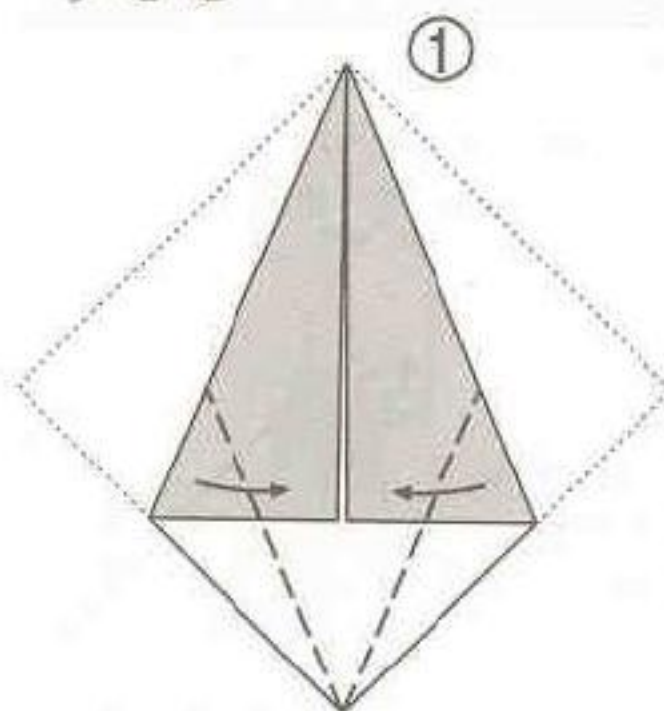


子犬A



できあがり

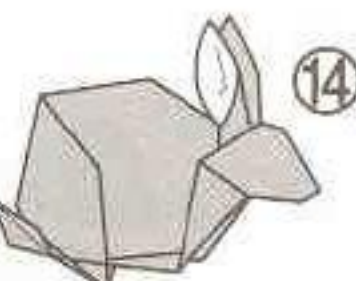
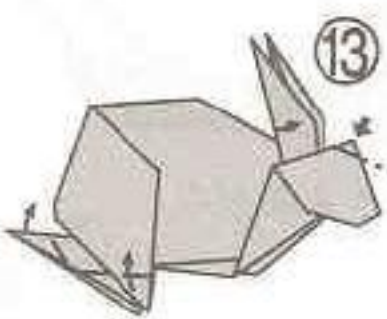
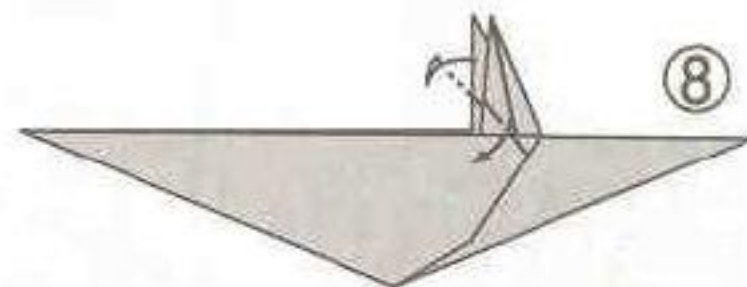
うさぎ



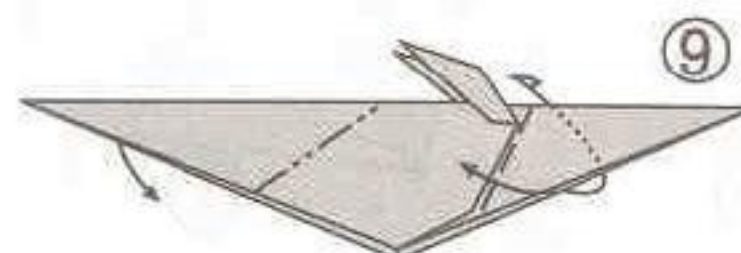
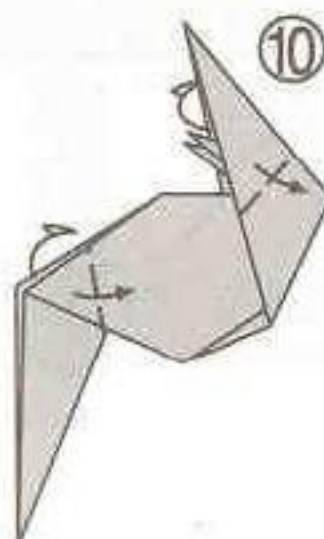
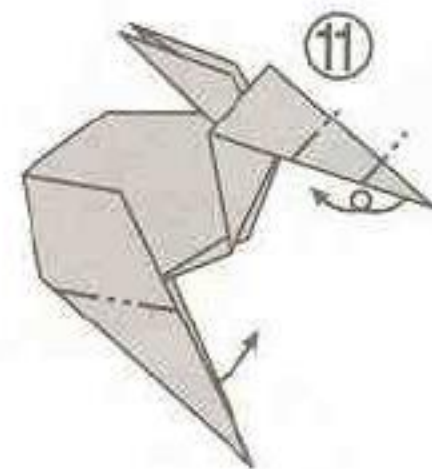
7



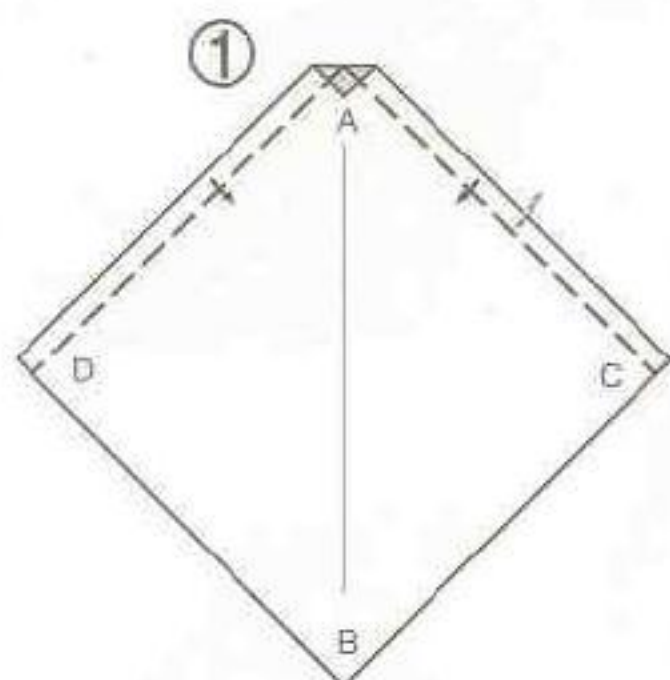
8



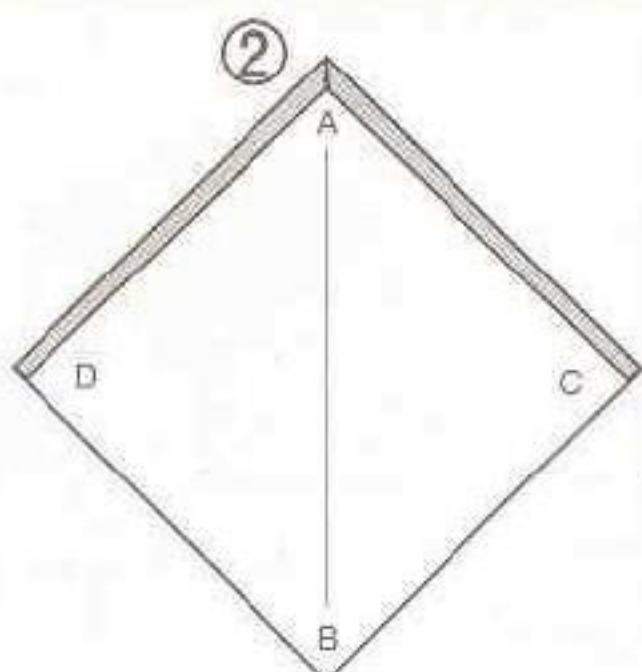
できあがり



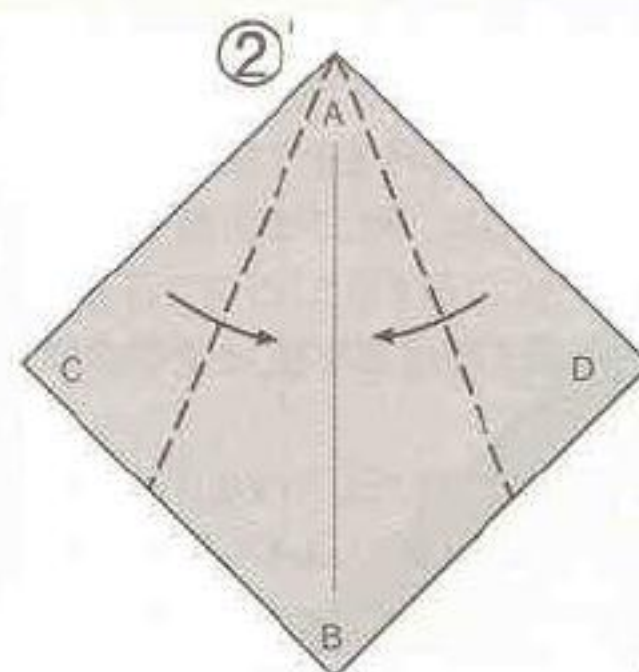
ヨット



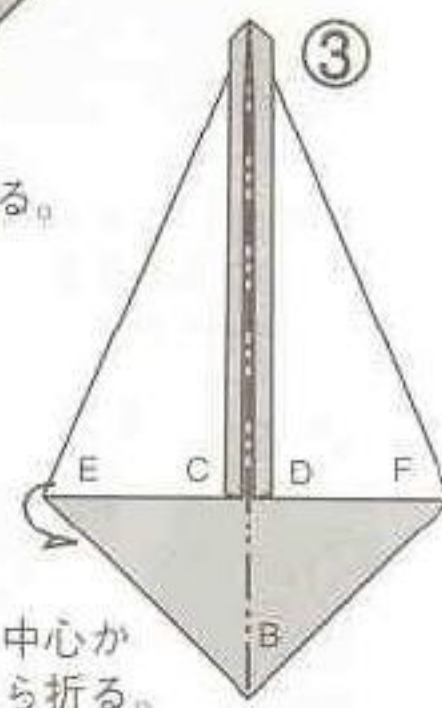
カドを折ってから、
へりを細く折る。



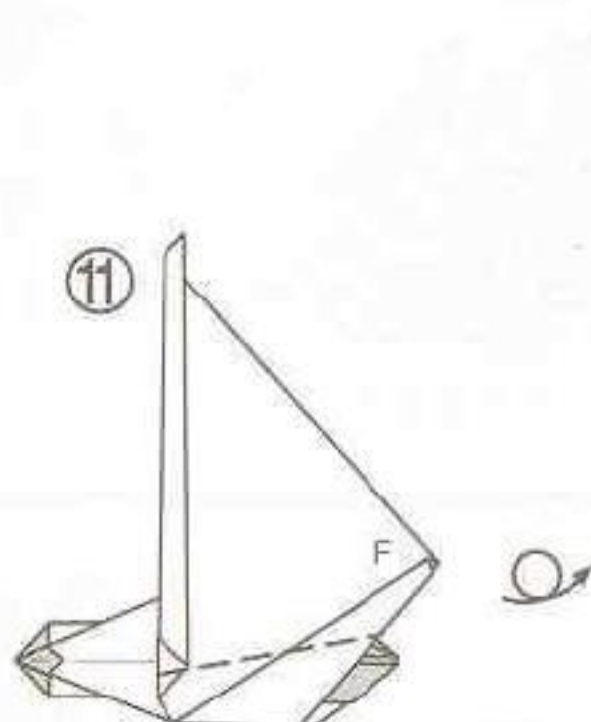
裏返す。



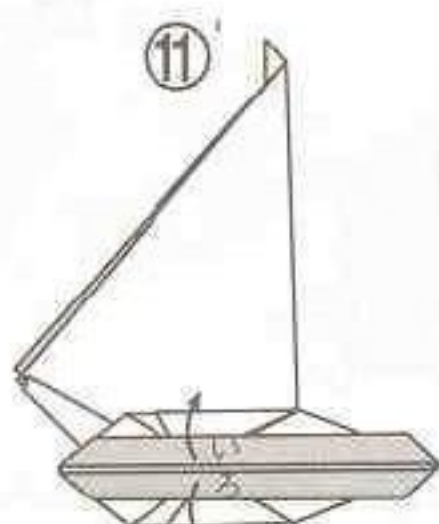
C、Dを折る。



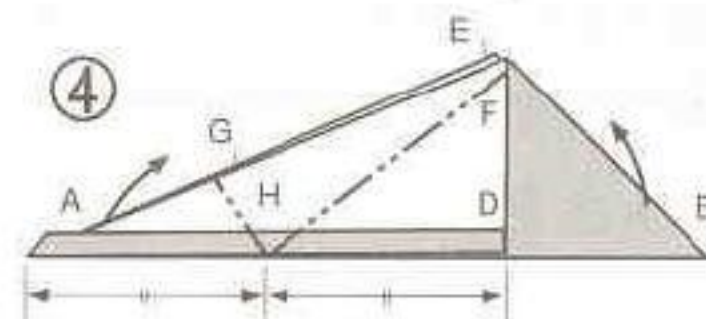
中心から折る。



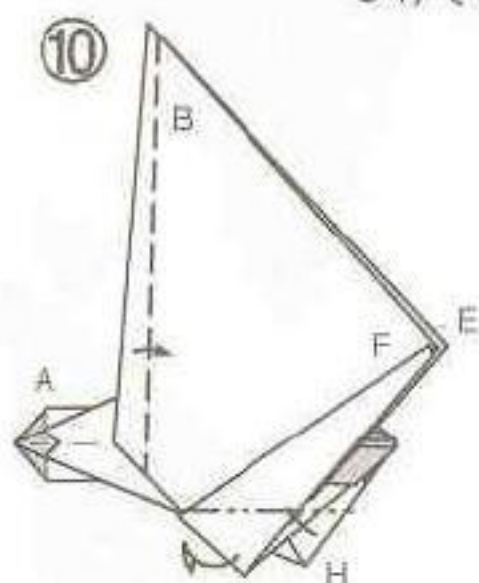
谷線に折り目をつけてから裏返す。



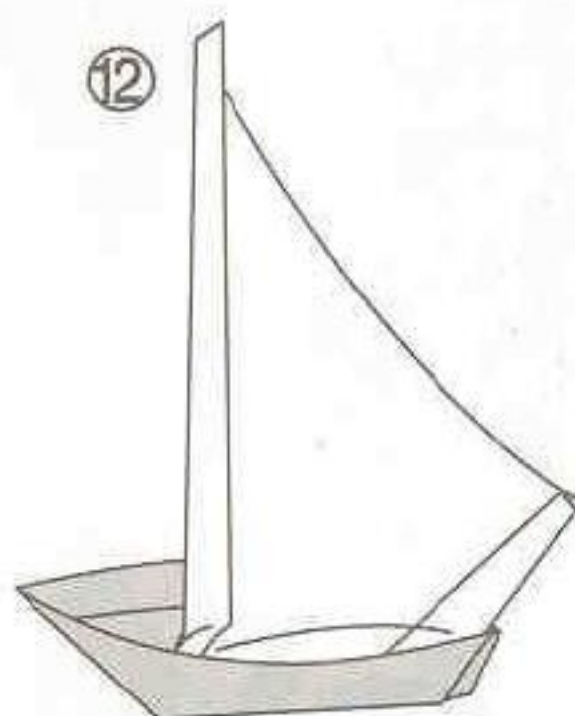
いろをしずかにひらいて
船体をつくる。



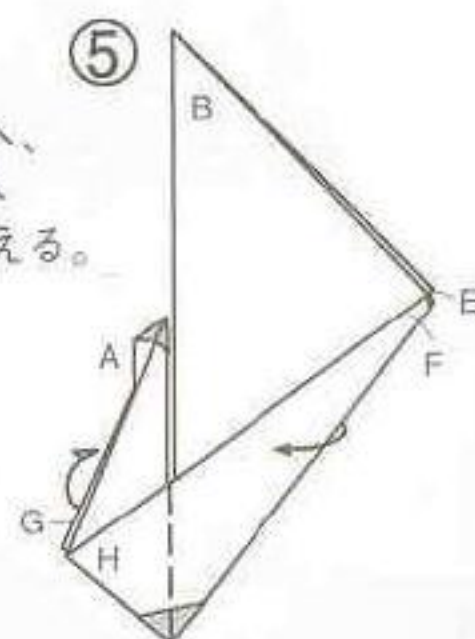
AをGHの間へ、
BをEFの間へ折る。



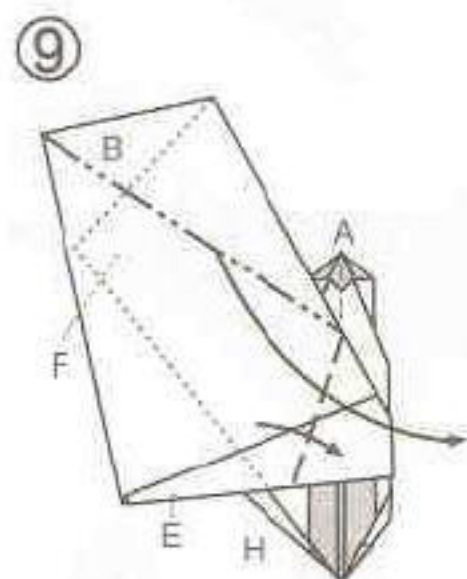
矢印にそれぞれ折る。



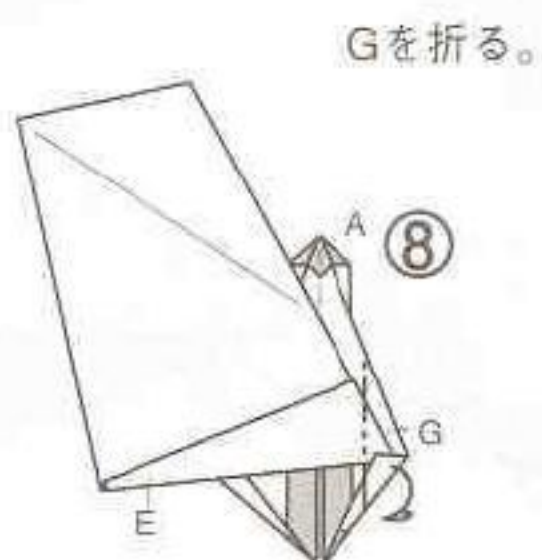
できあがり



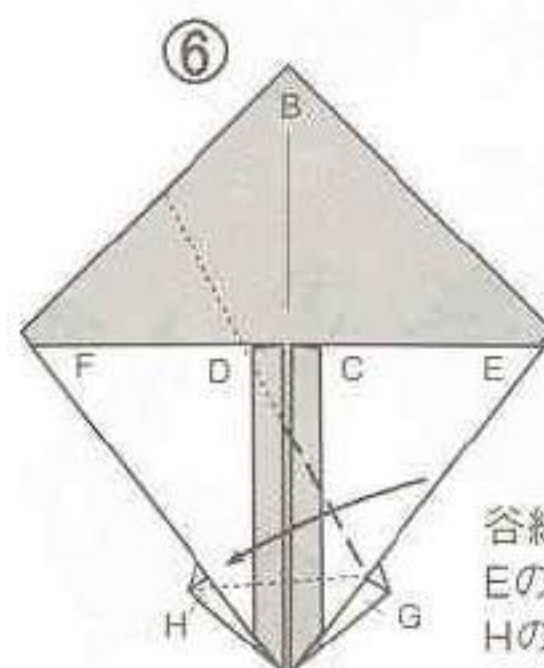
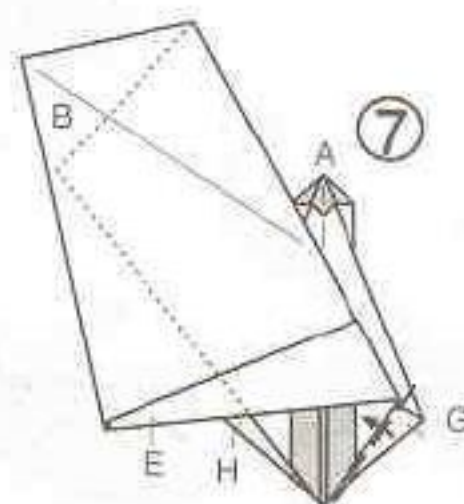
Gを裏へ、
Fを表へ
折りかえる。



谷線を折りながら
山線をつまんで、
EFのへりをそろえて
右へ折りかえす。

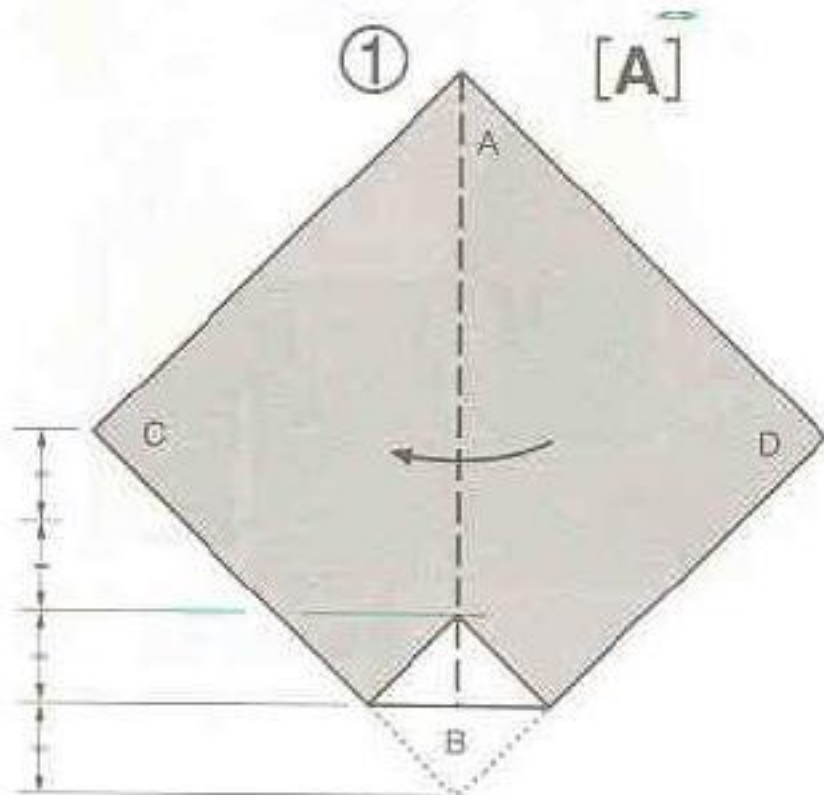


Gを折る。

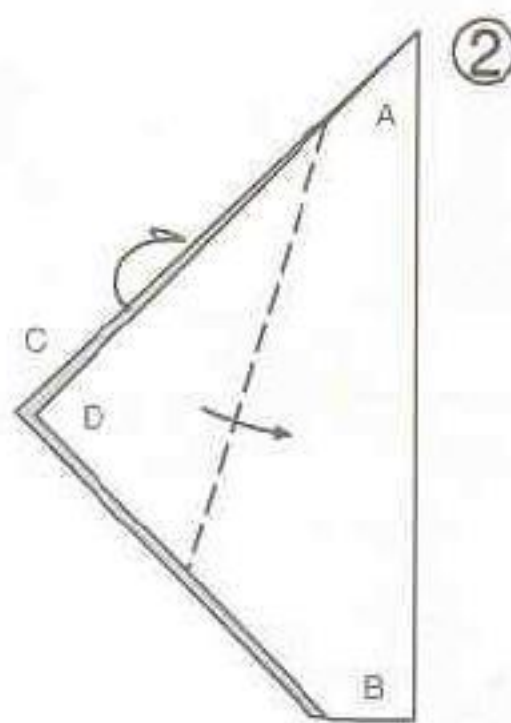


谷線を折って
Eのへりを
Hのカドへ合わせ、
点線のところは
折らない。

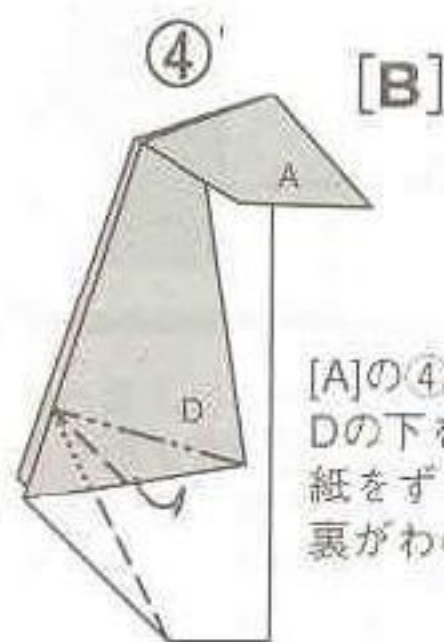
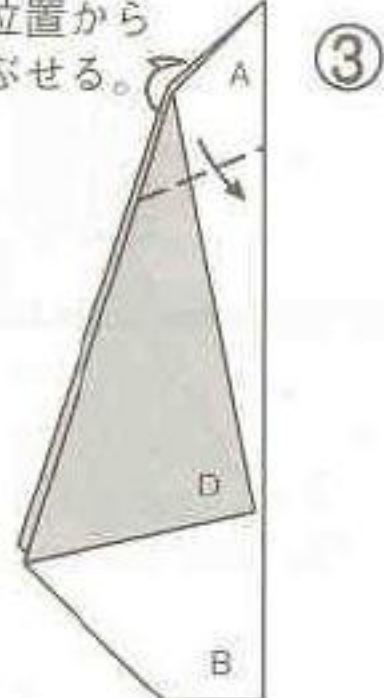
ペンギンA,B,C,D



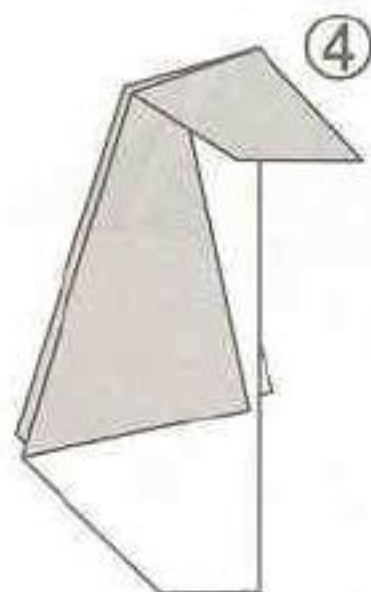
正方形の紙の
対角線ABに
折り目をつけ、
その折り目を
合わせながら
Bを折りあげ、
矢印に折る。



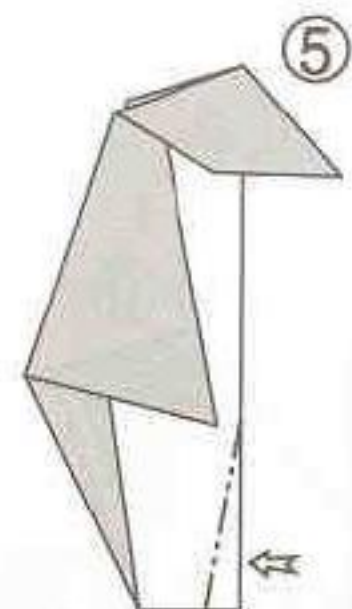
Aを半びらきにして、
谷線の位置から
折るかぶせる。



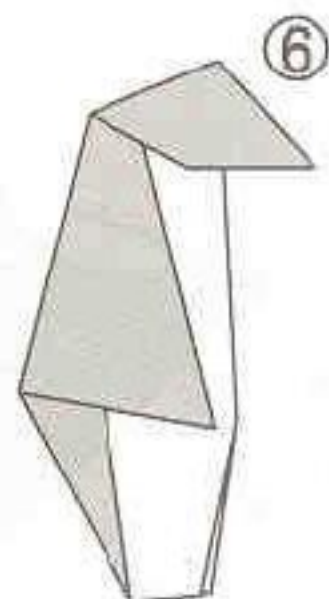
[A]の④から折る。
Dの下を山線と谷線で
紙をずらして折り込み、
裏がわのCも同様に折る。



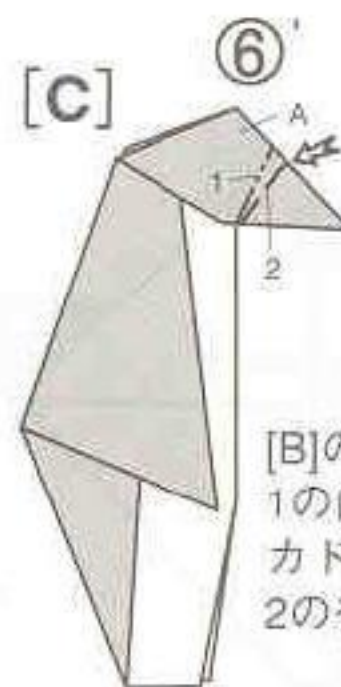
できあがり



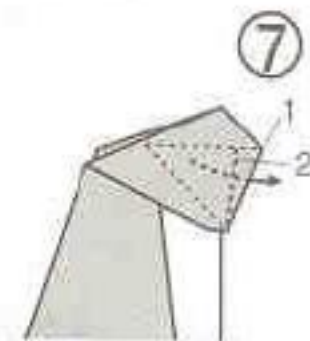
山線の位置から
ななめに折り込む。



できあがり



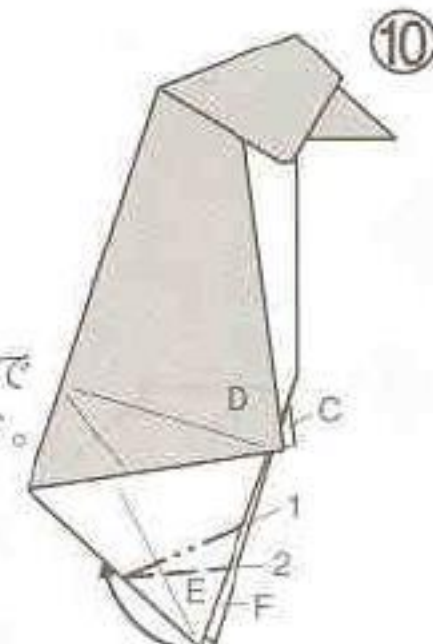
[B]の⑥から折る。
1の山線でAの
カドを折りこんでから、
2の谷線で折り返す。



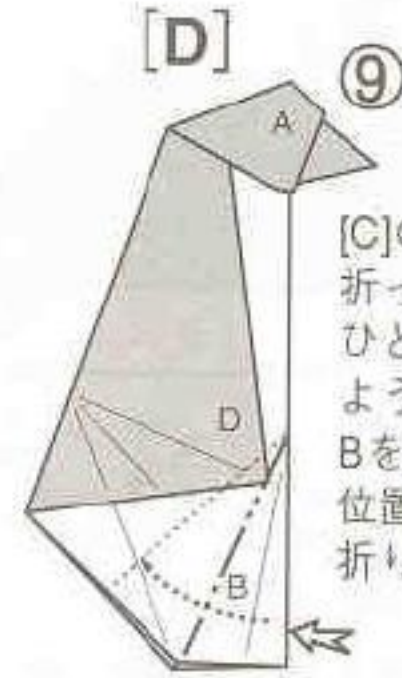
できあがり



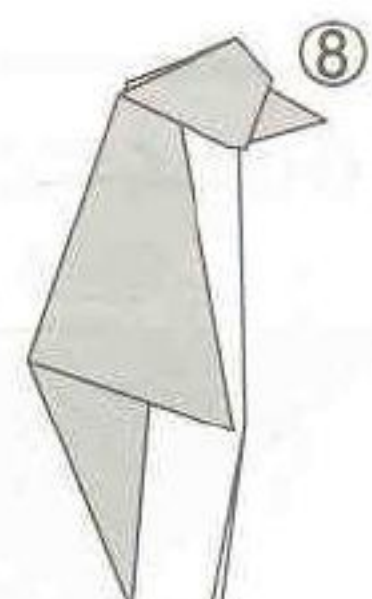
折りこんである
Eを2の点線の
位置から折るかえして、
Fも同様に折って
足をつくる。



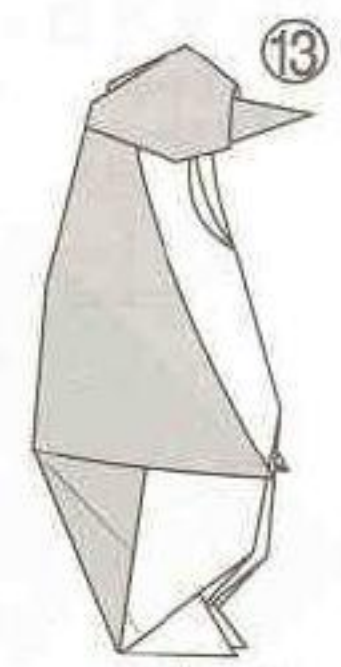
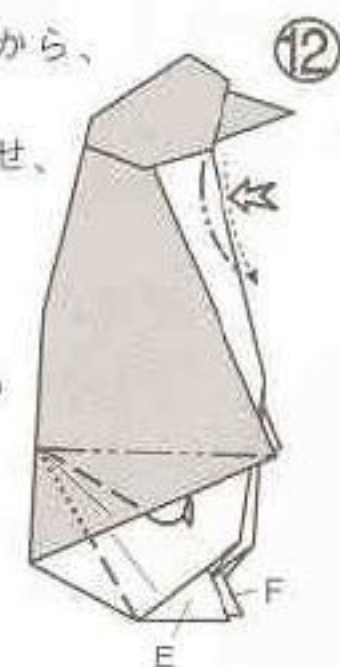
1の山線で
折りこむ。



[C]の⑧まで
折ってから、
ひとまず図の
ようにひろげ、
Bを山線の
位置から
折りこむ。



羽の下を折りこんでから、
中に指を入れて
からだに丸みをもたせ、
胸のところを指先で
なでるようにして
押しこみ、
かたちをととのえる。

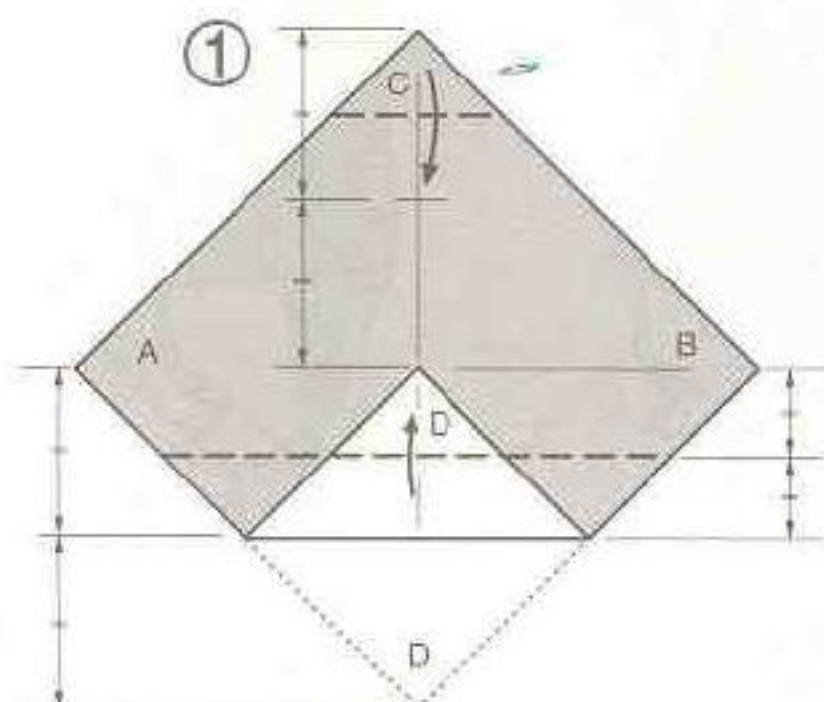


できあがり

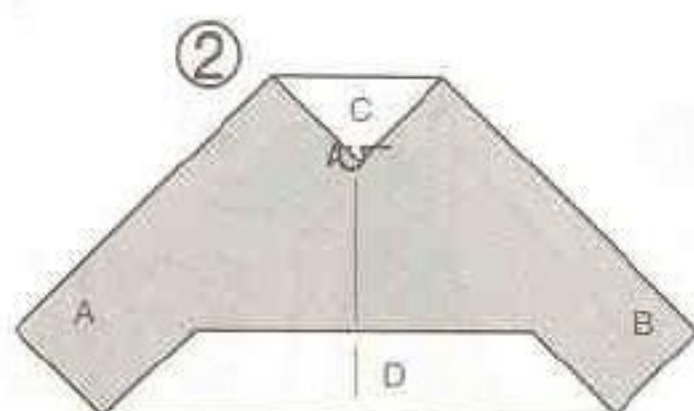
サンタクロースのぼうし

(原典は『やさしいおりがみ』のサンタクロースのぼうしに基づく)

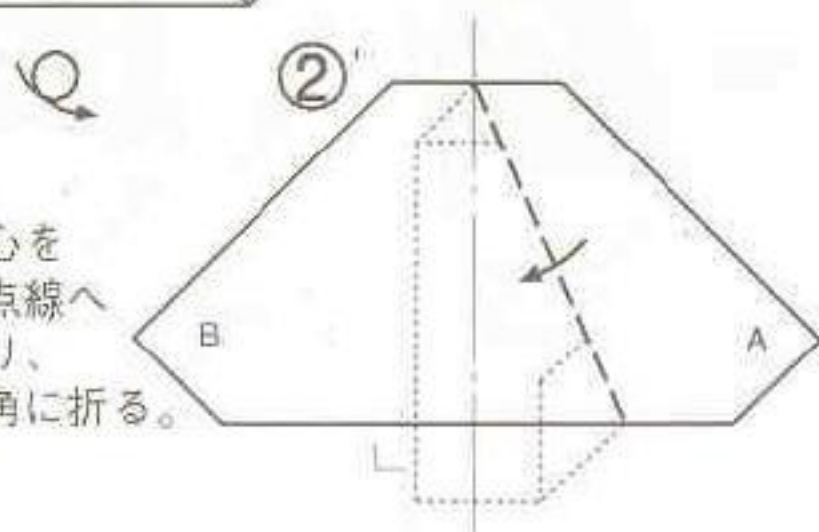
1辺が50cmくらいの正方形の紙で作る。



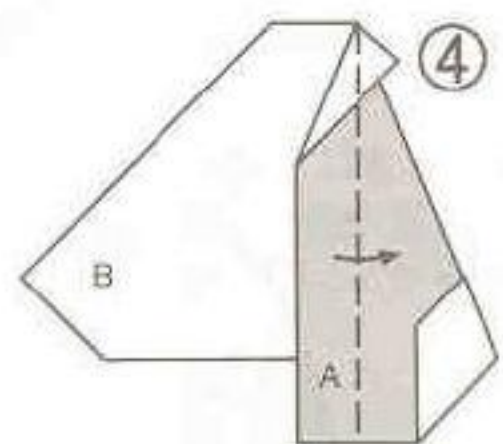
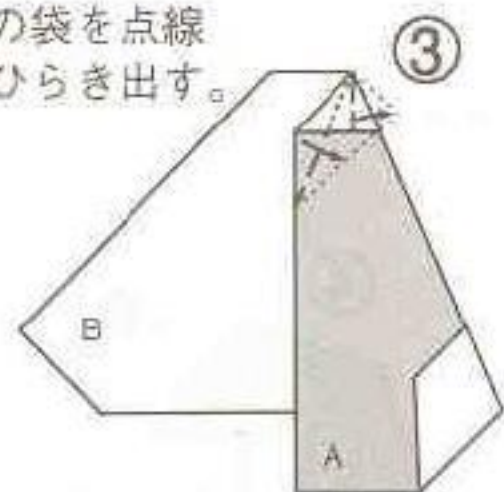
紙の中心にしるしをつけ、Dのカドを中心に合わせて折り、さらに矢印に折り、Cを折りさげる。



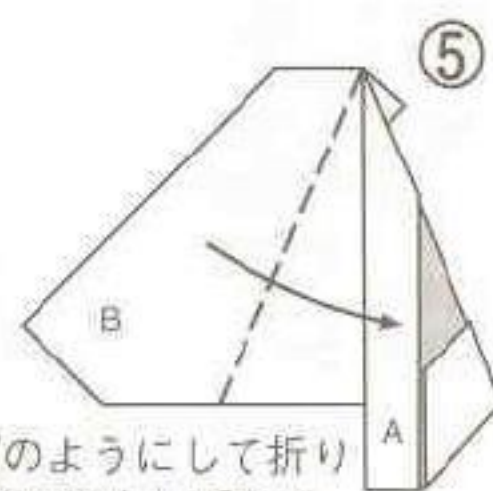
上の辺の中心を支点として点線へ合わせて折り、下の辺と直角に折る。



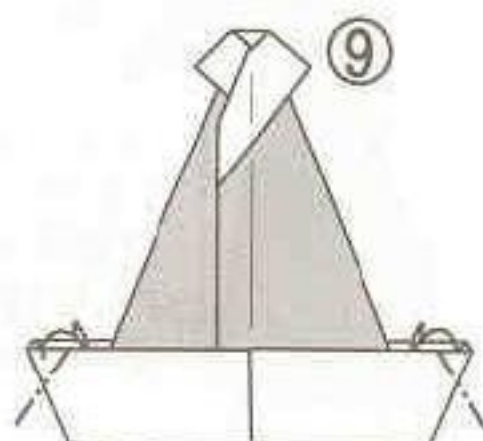
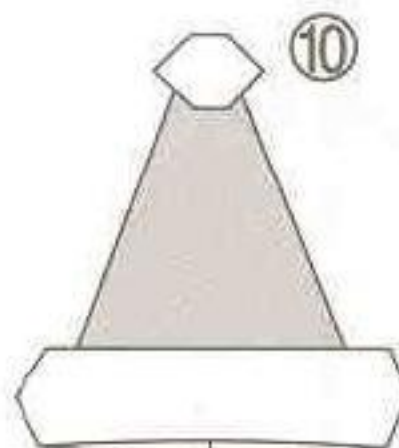
上の袋を点線へひらき出す。



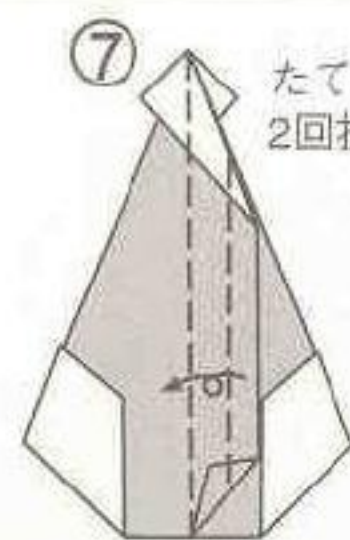
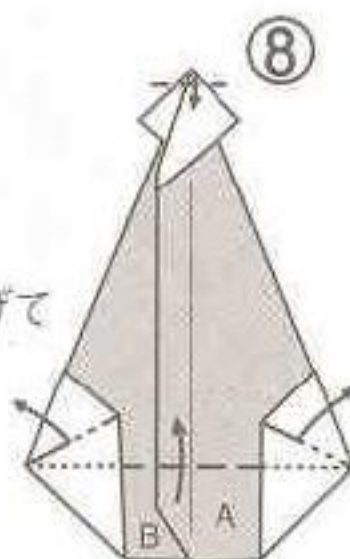
②のようにして折りBをAの上に重ねる。



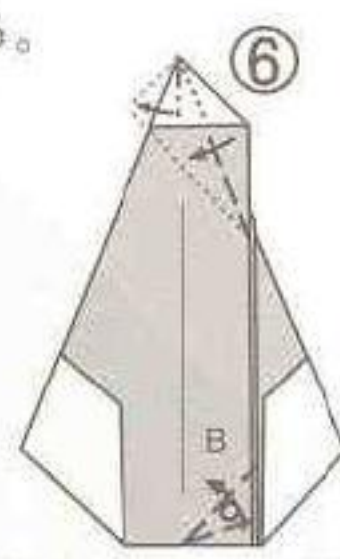
できあがり



上のカドを小さく折り、下を折りあげて左右にひらき出す。



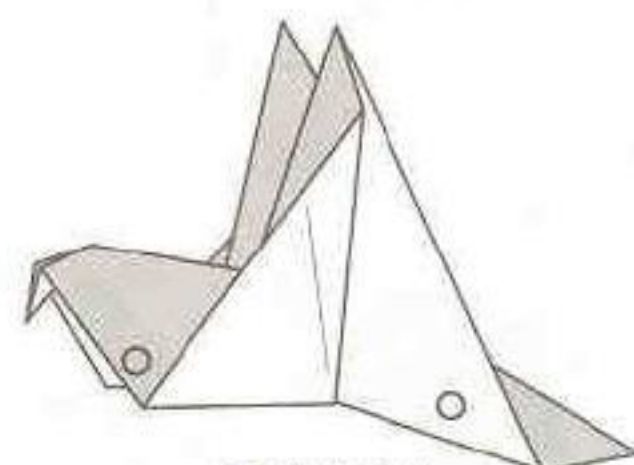
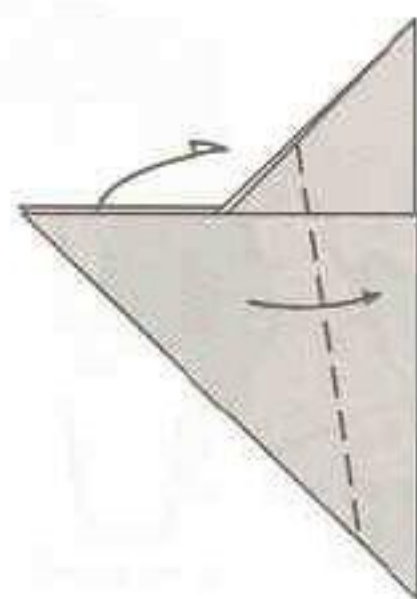
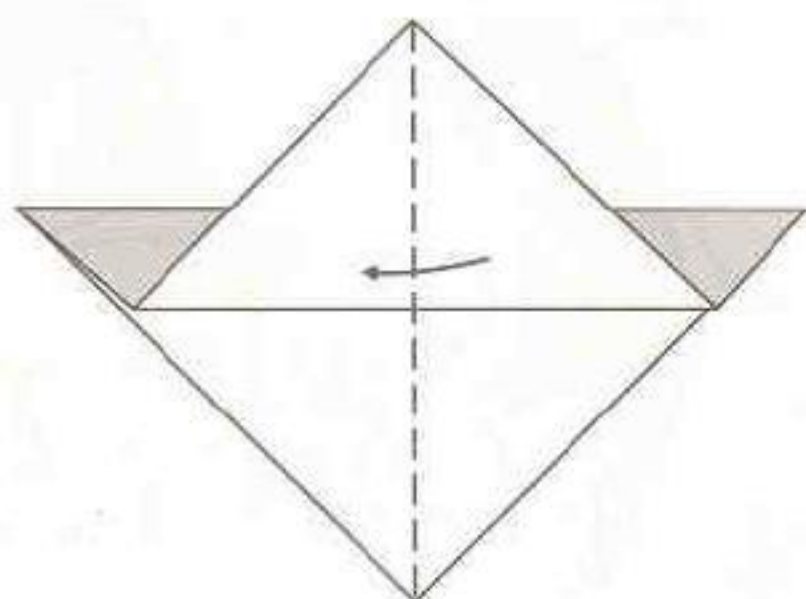
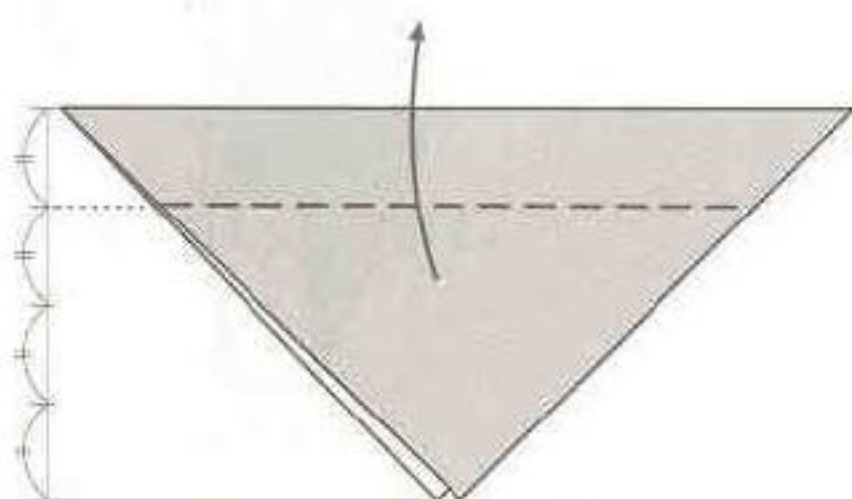
たてに2回折る。



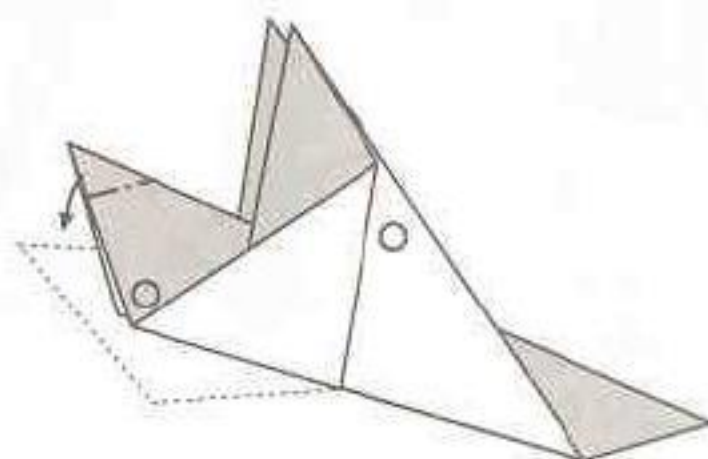
上のカドをひらき出し、重ねたAとBのカドを巻き折りにする。

はばたくはと

基礎折りからののはばたくとりとは違って、折る数が少なく簡単な折り線で羽が動くようにしました。動かしてあそぶやさしいから、魚の尾、ぼうし、かざぐるまなど、こういう簡単な折り線で個性的なものをだすのには随分時間もかかり、苦心してつくり出したものです。



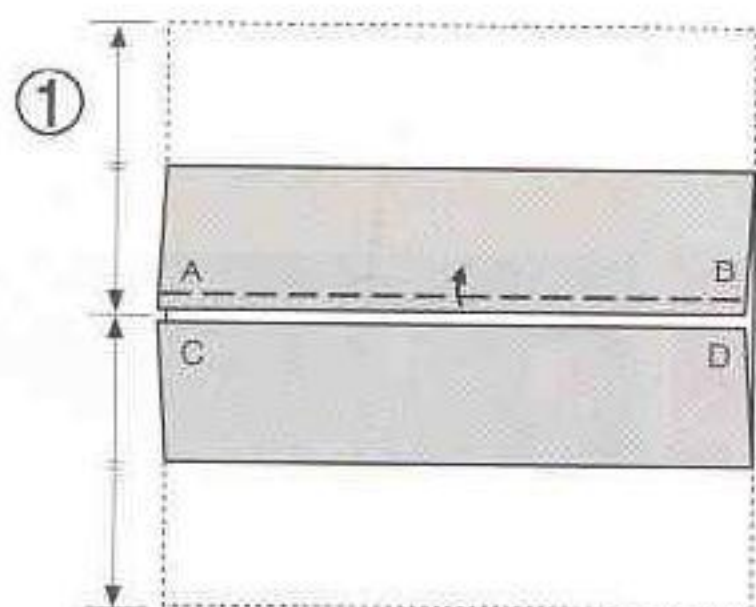
できあがり



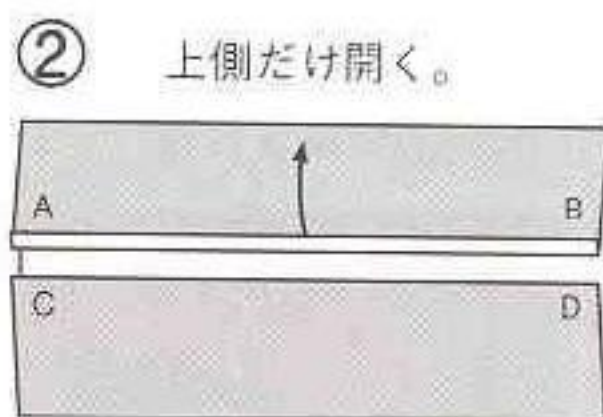
修道女

（原典は「折り紙読本」の
修道女に基づく）

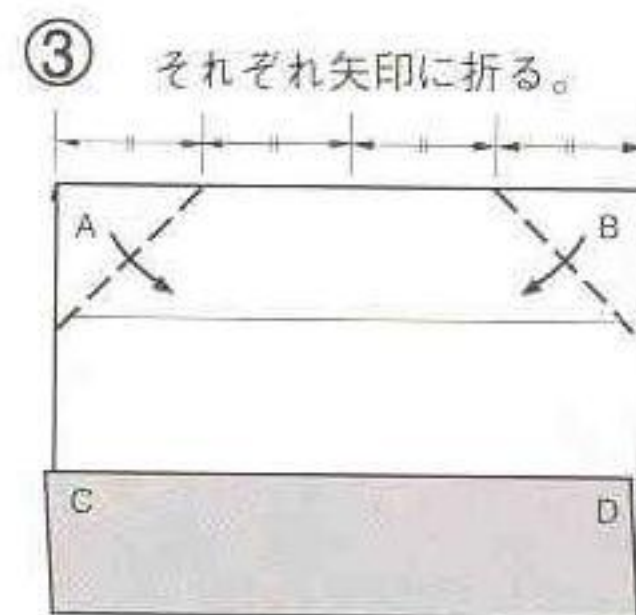
人の姿を造形の対象として、単純な折り線構造で敬虔な折り、
静かでしかも親しみのある姿に表現しました。
かぶり物の縁の分量や、折り目のつけ方で感じが違ってきます。



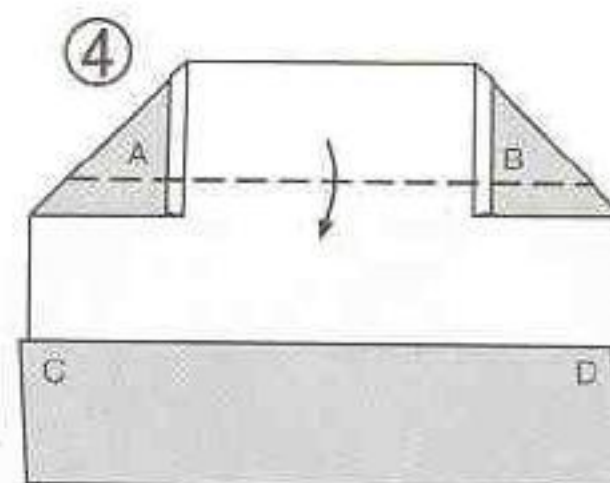
裏の白い黒の紙を用いる。
正方形の紙の1/2の線に
CDを合わせて折り、
ABは1/2の線より少しあけて
折ってから、細く折り返す。



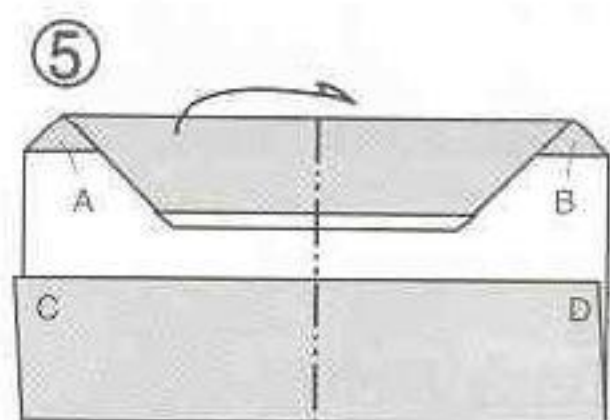
② 上側だけ開く。



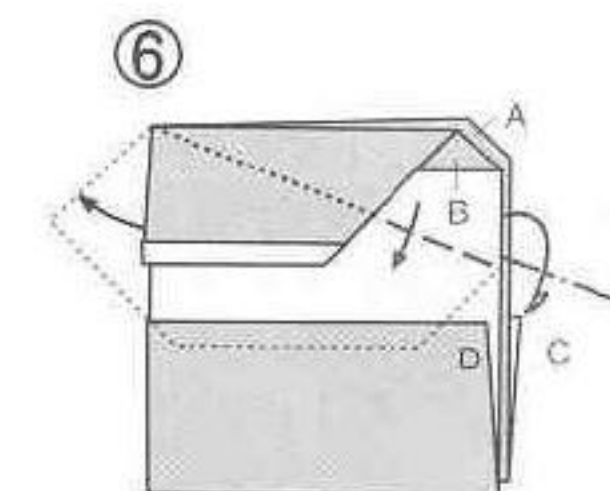
③ それぞれ矢印に折る。



④

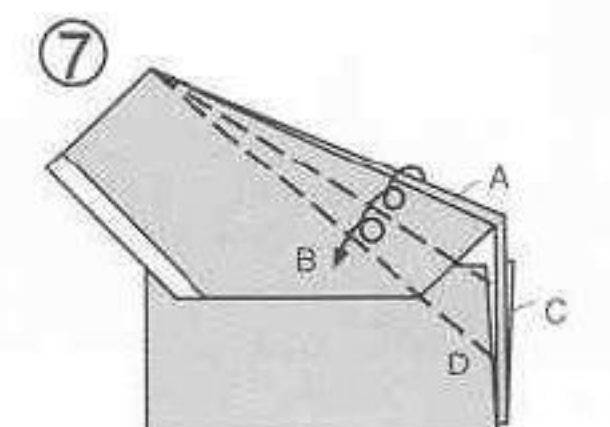


⑤



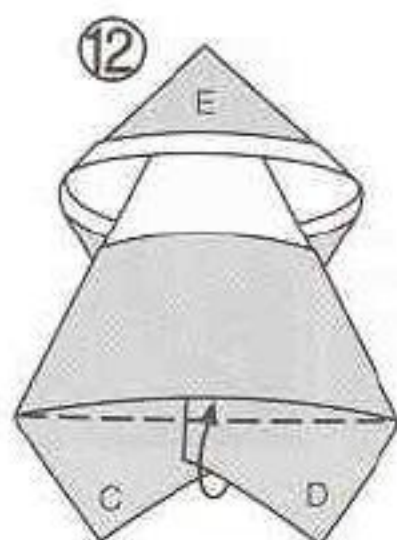
⑥

Bの谷線を（その延長の
点線の下を袋の内側で）折り、
Aも裏側へ同様に折る。



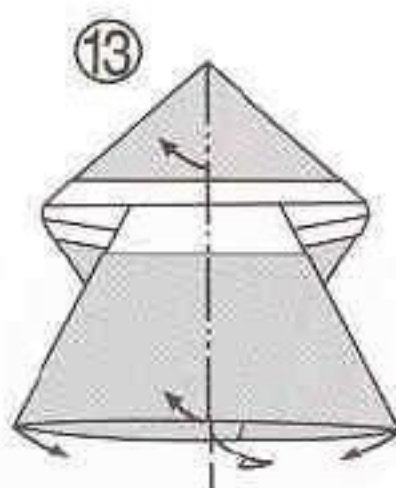
⑦

折り目をつけてもどす。



⑫

CDを中へ折る。



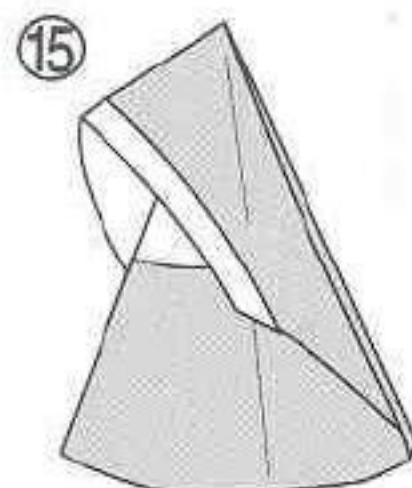
⑬

開いて折りかえる。



⑭

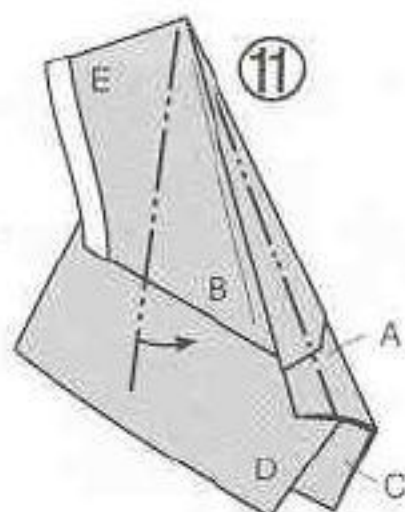
下のカドを
折り込んでから、
丸みをもたせて
形をととのえる。



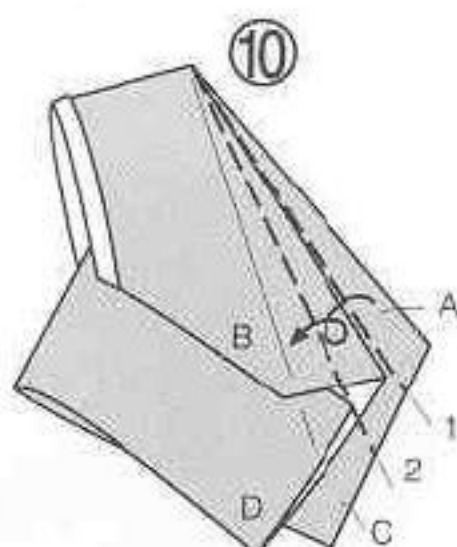
⑮

できあがり

ABをはずれない
ように持って、
中を袋状にして
12のようにする。

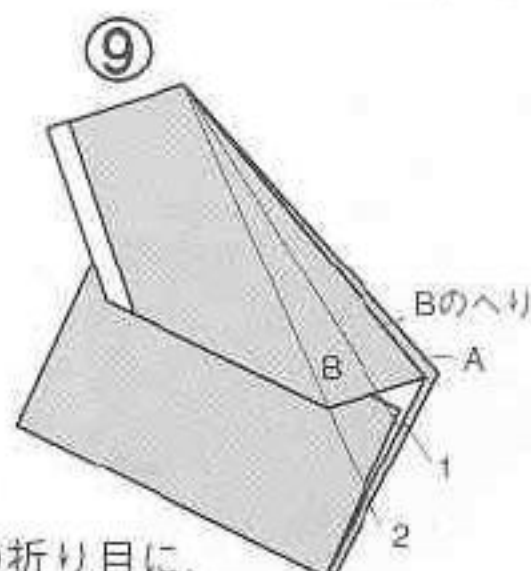


⑪



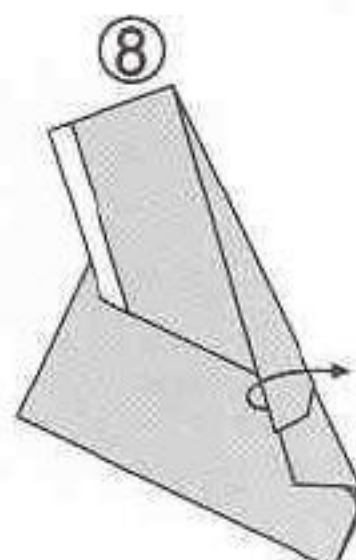
⑩

AをBにかぶせてから、
重ねたままもう一度折る。



⑨

Aの1の折り目に、
Bのヘリをずらしてあわせる。



⑧

■ 先人が築き上げてきた、あまりにも巨大すぎる業績。そのひとつひとつを余すところなく語り継ぎ、現在の最先端作品の中に力強く引き継いでゆくのは、今後の私たちの重要な使命です。

吉澤 章 寒川神社ポスターコレクション The New Year's Poster at Samukawa Shrine with Models by Yoshizawa Akira



「ヤドカリ戦争」

Attack of the Hermit Crabs! (P.36)

ラング氏の呼びかけで始まった、凄まじくも楽しい創作合戦。全身のあらゆるパーツが難題の塊である「ヤドカリ」というテーマに、日米の猛者たちが続々と引き寄せられて参戦しました。ひとつの題材にこれだけ豊かなバリエーションや作風が出現することは、休むことなく発展し続ける折り紙の可能性をあらためて実感させてくれます。



▲ロバート・J・ラング:Robert J. Lang



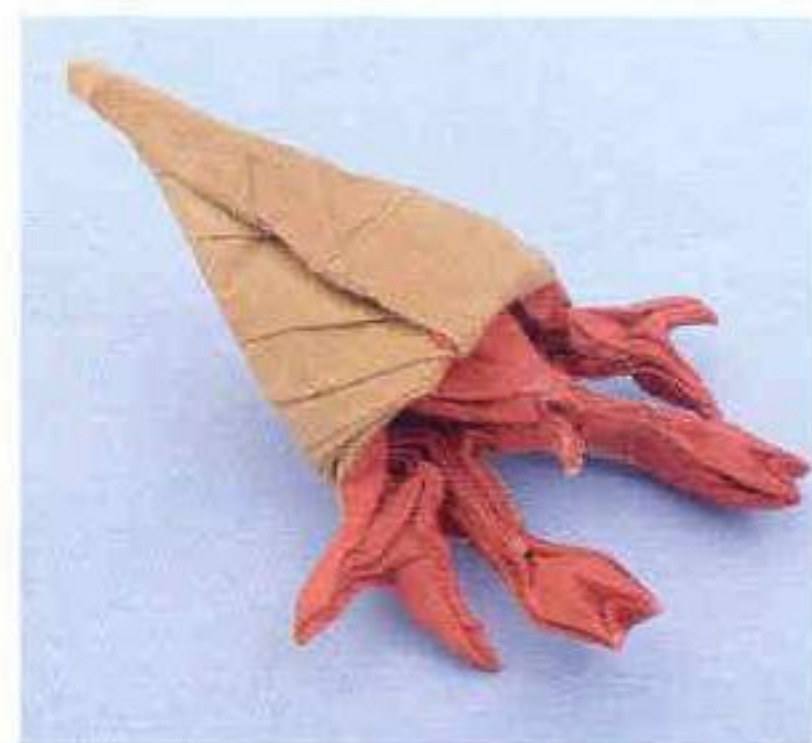
▲ブライアン・チャン:Brian Chan



▲ベン・マラー:Ben Muller



▲神谷哲史:Kamiya Satoshi



▲桜井智紀:Sakurai Tomoki

▼午年のB版全紙バージョンポスター

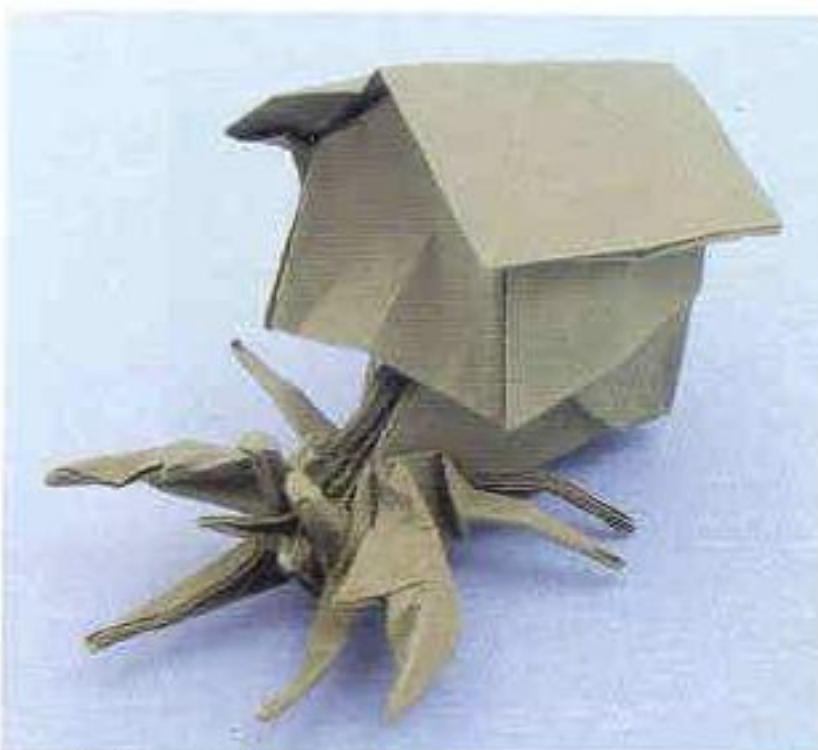


以下、吉澤夫人による解説です。

干支の十二支は方位、時刻、年などに当て庶民の生活の中にあります。1990年新春展を見られた寒川神社の関係の方から、是非ポスターに使いたいと話があり、末年に始まりました。写実的な形態の作品の中から、極く普通の作品を選んで撮影され、B3のJR他の車内吊りポスターとB版全紙はJRの主要駅に掲示され、初詣での広報ではめずらしいものになり好評でした。十二支は個々に特徴がある動物(辰のみ想像上の)です。年末年始には話題になる不思議な力を持ち、永遠のテーマと言えましょう。2002年の午年をもって一巡し、役目を果たしました。



▲神谷 亮: Kamiya Ryo

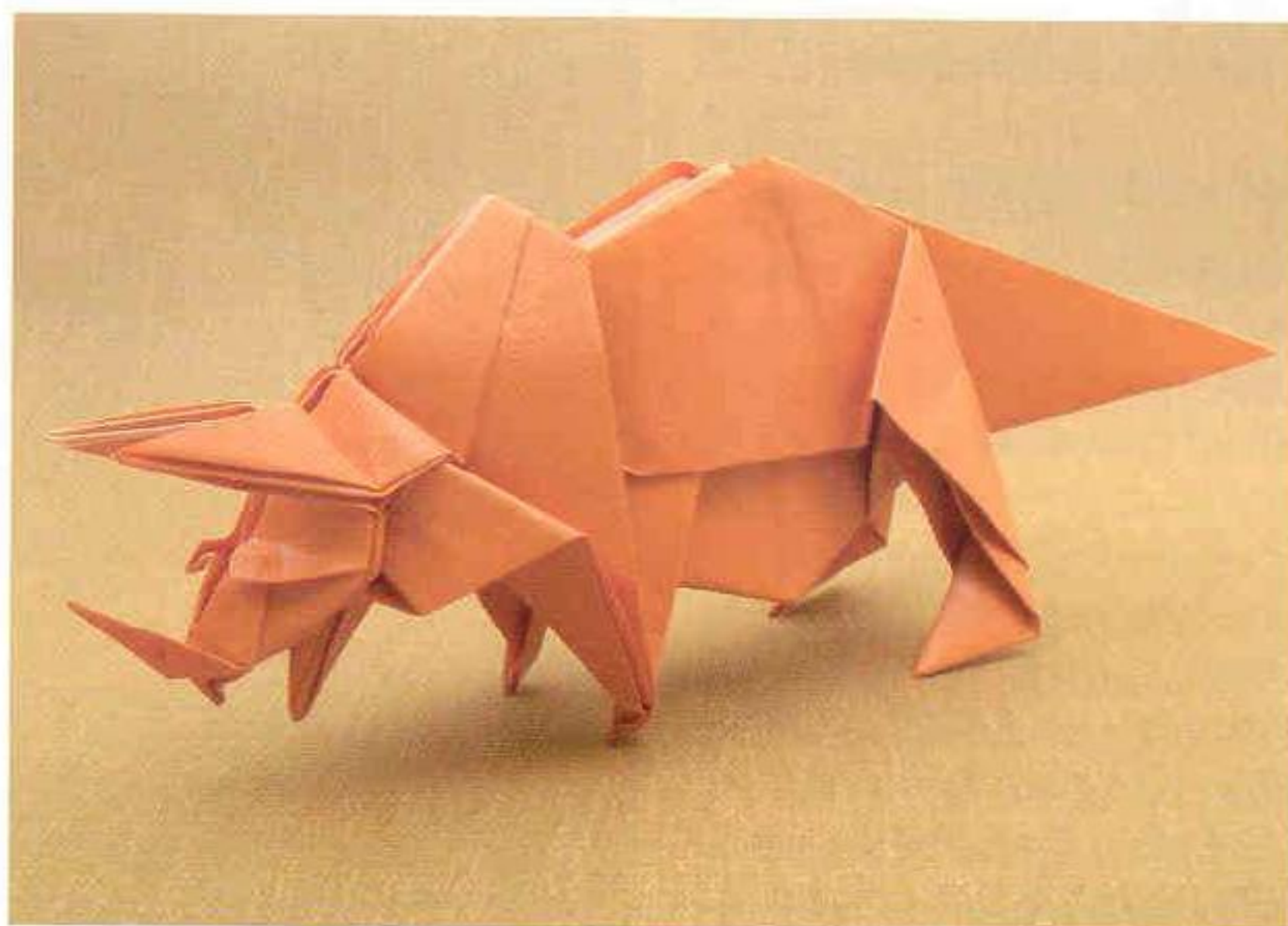


▲森末 圭: Morisue Kei

「トリケラトプス」 作：西川誠司 (P.24)

Triceratops: Nishikawa Seiji (P.24)

高密度の情報量が詰まった魅力的な頭部には、西川氏の代名詞となっている「トラ」とは異なるパターンの「無限折り」が組み込まれています。後引き豆のような軽快な工程を存分に味わいながら、ユーモラスかつ重量感あふれる完成形を手に入れられる作品です。

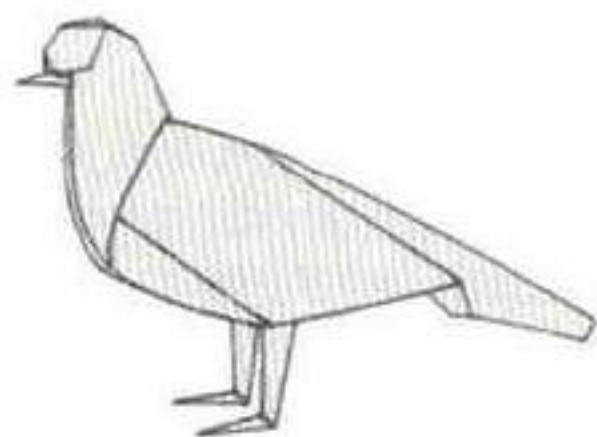


Afternoon Origami

第2回 吉澤章先生との出会い Akira Yoshizawa an encounter with the master

先生との親交

吉澤章先生は、私が会ったことのある人の中で、もっとも影響力のある人の1人でした。彼が創作折り紙の世界に与えた影響、そして私自身の作品に与えた影響は、本当に大きいものでした。1970年代、まだ駆け出しだった私は、当時私が持っていた本、ロバート・ハービンの『Origami 1』と『Secrets of Origami』、サミュエル・ランドレットの『The Best of Origami』で彼のことを知りました。ハービンの『Origami 1』に載っていた「鳩」を折って楽しみ、作品の写真を見て仰天しました。私は吉澤さんに手紙を書いて、1973年に『折り紙読本 I』を1冊いただきました。これはまだ BOS に入る前のことです。それが、30年にわたる彼との親交の始まりでした。



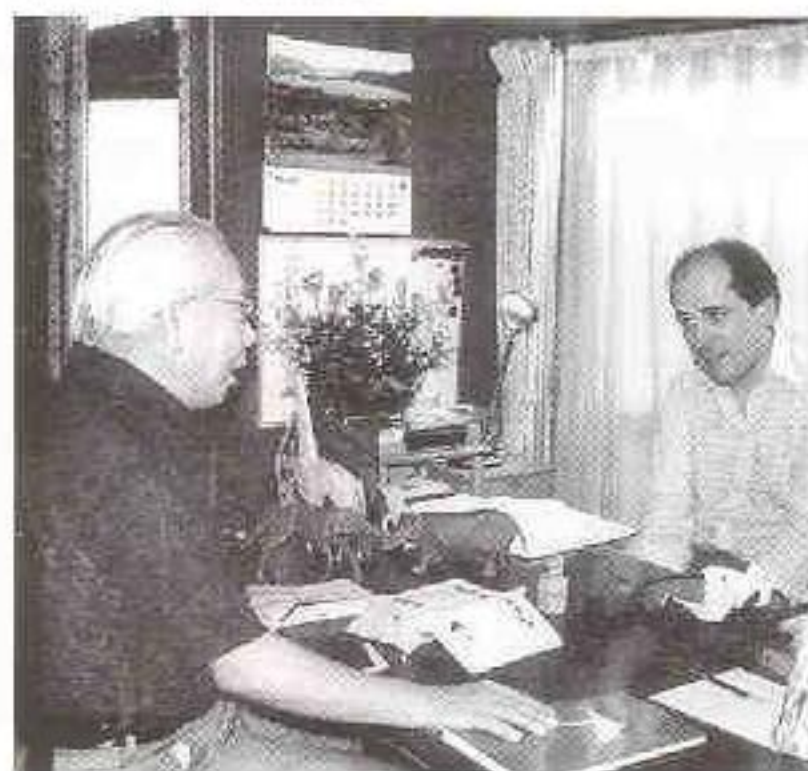
▲ 鳩

訪問

私は幸運なことに、吉澤さんと10回以上もお会いすることができました。先生への賛辞として、私が1980年に日本を訪れた際、9月15日の敬老の日に吉澤さんのお宅を訪ねたときの経験と感動をご紹介します。吉澤さんの生徒さんの1人、古橋さんが私のために通訳してくれました。

午前10時15分に吉澤章さんのお宅に到着し、小さな部屋に案内されました。きちんと整頓されていて、椅子から手が届く範囲に引き出しがたくさんあります。私

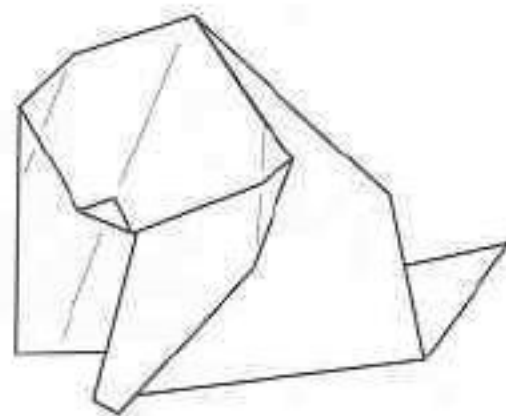
は自分の作品(馬、麒麟、サイ、犬、ナットとボルト、ふた付きの箱、タバコとマッチ箱)が入った箱を差し上げました。彼はマッチ箱を気に入ってくれたと思います。動物の骨格に気を配ればもっとよくなるとおっしゃいました。



▲ 吉澤さんと会う筆者

吉澤さんは、普通の形の紙を使い、星形の多くのカドが突き出したような形は使わず、切り込みも使わないことをルールにしていると話してくれました。また、紙を何枚か使うことについては、1枚であることよりも形の方が重要で、1枚で折ろうとすると造形で妥協をすることになるかもしれないから、最初は2枚か3枚で作って、それから1枚で作ってみるのがよいということでした。

彼はまた、ある題材を折るときに、別の形の紙から同じ折り方で折ってみると、違う姿勢のもの(たとえば伸びをしている犬)ができると教えてくれました。



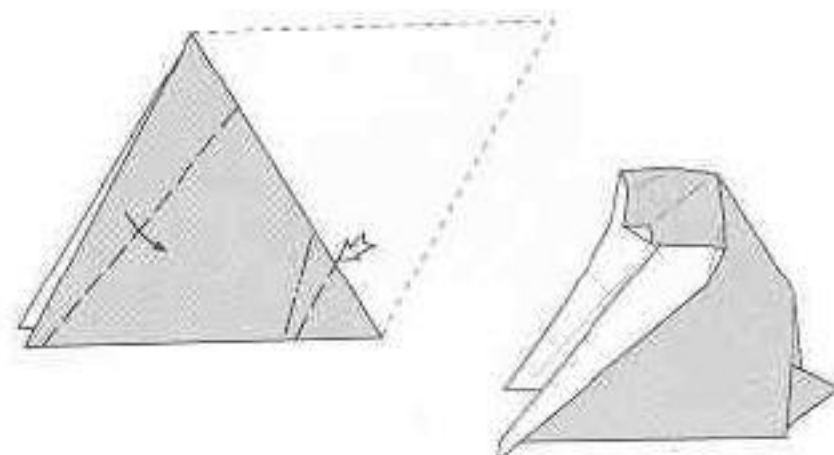
正方形の犬(上)とひし形の犬(右) ▲▶

彼は盆景を学んでいたことがあるようですが、写真をもとに作品を作ってしまうと、波に動きがなくなってしまうことに気がついたそうです。動いているもの、たとえば鳥をすばやくスケッチしたときでも、描かれているものだけでなく描かれていないものも重要だとおっしゃいました。

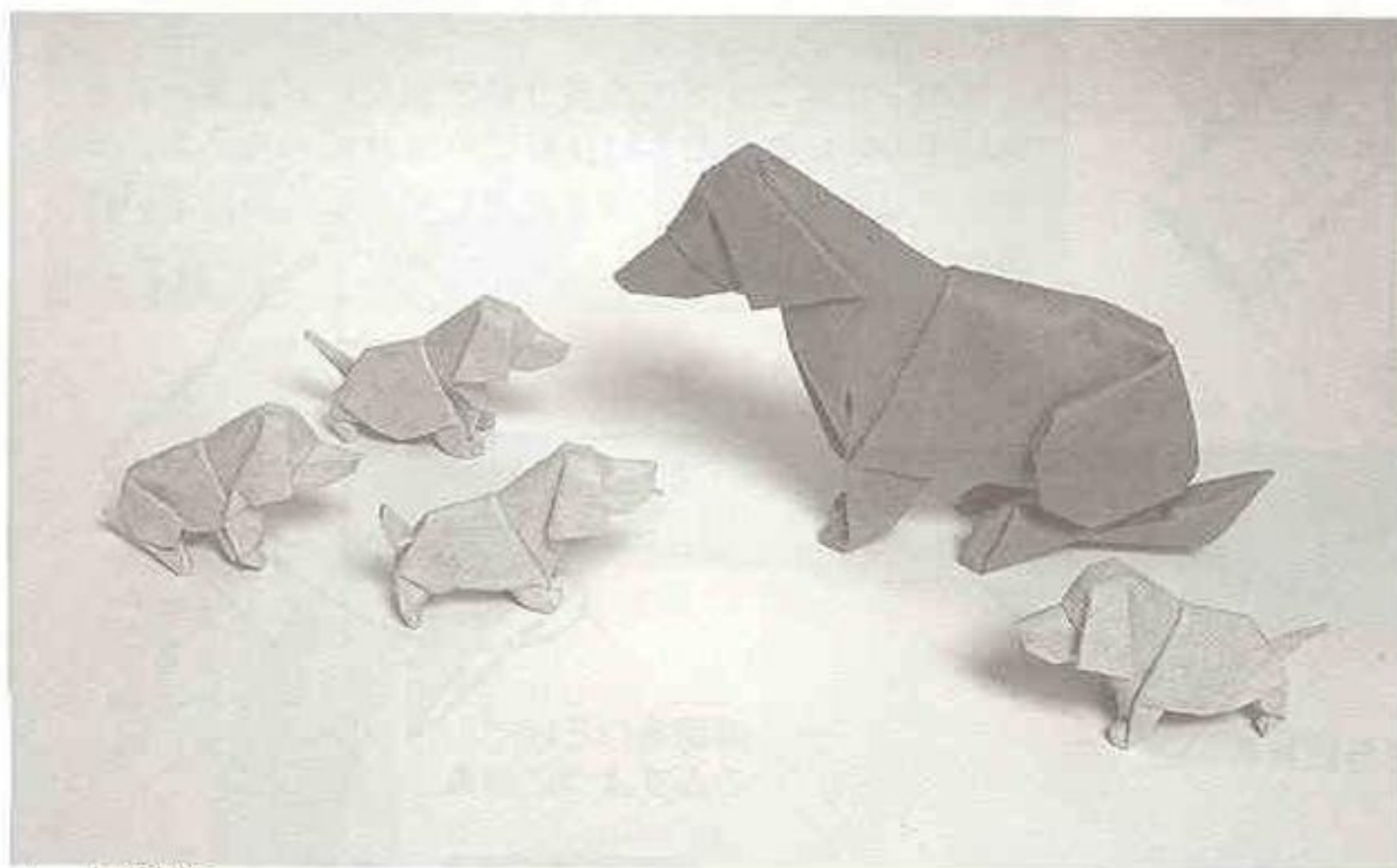
それから吉澤さんはすばらしい作品を見せてくださいました。動物の種類ごとに大きな箱に収められています。はじめに見たのは鶏でした。微妙に折り分けられたさまざまな表情の雄鶏と雌鳥が20から30ほどありました。すばらしく洗練されていて、立体的だというだけでなく、深さを感じさせました。目や舌、足は細かく折られていて、正確に再現されているのですが、それでいて不自然さを感じないのです。

ほかの箱も次々を見せてくださいました。鶴、鳥、犬、象、ゴリラなどなど。この小さな家に棚がたくさんあって、きちんとラベルがつけられた箱が並んでおり、その中にさまざまな作品が詰まっています。2枚で作ったように見えるサルを折って、それをぱっと広げて「1枚だよ、切ってない!」とって楽しませてくれたりもしました。卓越した作品を見ていると、目が痛くなるほどでした。

昼食後、さらにたくさんの作品を見せてくださいました。具象的な作品から抽象的な観念が感じられます。いよいよ、美しい木の箱に収められた傑作の登場です。これについては、吉澤さんは一部をざっと見せてくれたただけでした。マンモ



○David Brill(デビッド・ブリル)＝イギリスを代表する折り紙作家の1人。1975年よりBOS(British Origami Society)の活動に積極的に参加、代表も務めた。折り紙以外の趣味は油絵。



▲ 犬の家族

ス、十字架上のキリスト、ふくろう、そして有名なセミとノミ。これは抜群でした。紙の選択も完璧でした。セミの図をちらりと見せてくれましたが、2対1の紙で、カニの展開図を応用したもののようなものでした。

私は、衝撃のあまり言葉を失って、じっと座っていました。これらの素晴らしい作品を理解するには、1人になって黙想しなければならなかったと思います。外に出て

歩きたいとすら思いましたが、せっかくの作品を見逃すわけにはいきません! 本当に言葉がでませんでした。

匠の仕事

6時30分ごろになって、生徒さんがやってきました。吉澤さんは白い紙を三角形に切って、白鳥(『折り紙読本Ⅰ』に収録)を折り始めました。彼は紙に手を合わ

せてから、よどみなく折っていきます。くちばしの中割折りには木槌を使い、折ってゆくにつれて彼の作品らしくなってゆきます。形を整えるのにはピンセットを使っていました。ときどき手を休め、立ち上がって引き出しから道具を出したり、またしまったりしました。首と胴体を柔らかく中割折りして、紙に曲線を与えます。

私たちは皆、恭しく静かに見つめていました。それ以外のことができたでしょうか。私は光栄にも、匠の仕事に立ち会うことができたのです。彼は胴体や羽根を戻したりまた折ったり、調整をしていました。再び木槌を手にして、頭を平らにしました。ついに完成です。彼は満足そうでした。もちろんこの作品は知っていましたが、これは本当に美しかったです。



▲ 白鳥

夕食のときも私たちは言葉少なでした。言葉が不便なもののように感じました。思っていることをうまく表現できなかったのです。

さらにお話をいただき、贈り物もいただきました。お礼を述べ、ぜひイギリスにいらしてくださいと言って、タクシーに乗り失礼しました。私はとても疲れましたが、古橋さんによると、私は認めてもらえたようだということでした。普通はこんなにたくさん作品を見せてもらうことはないそうです。私は彼女に感謝を込めて作品をいくつか折り、夜中の12時に新宿のホテルに戻りました。

▶ 巣の中の鳥



トリケラトプス

Triceratops

作：西川誠司

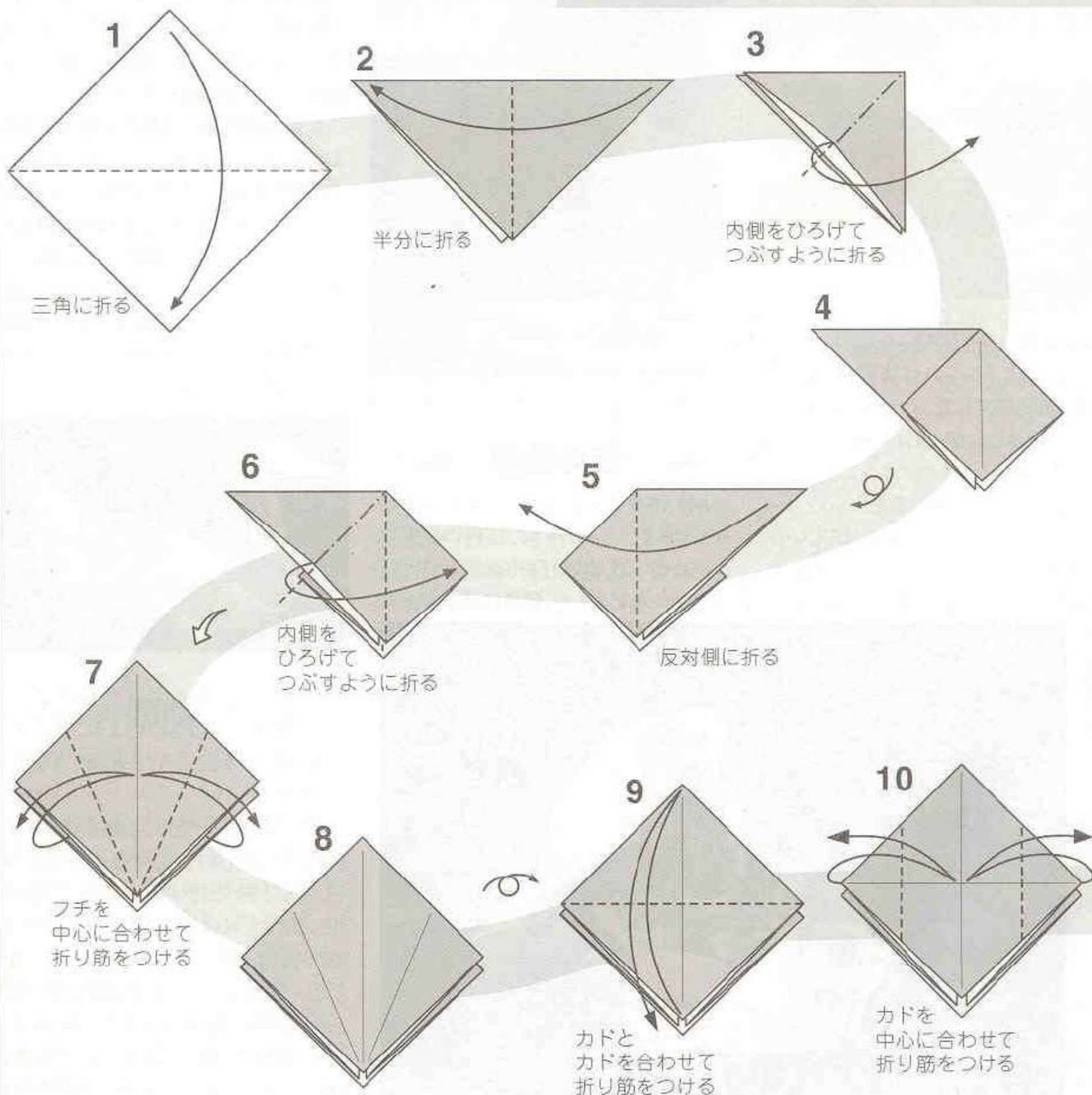
折り図：おりがみはうす

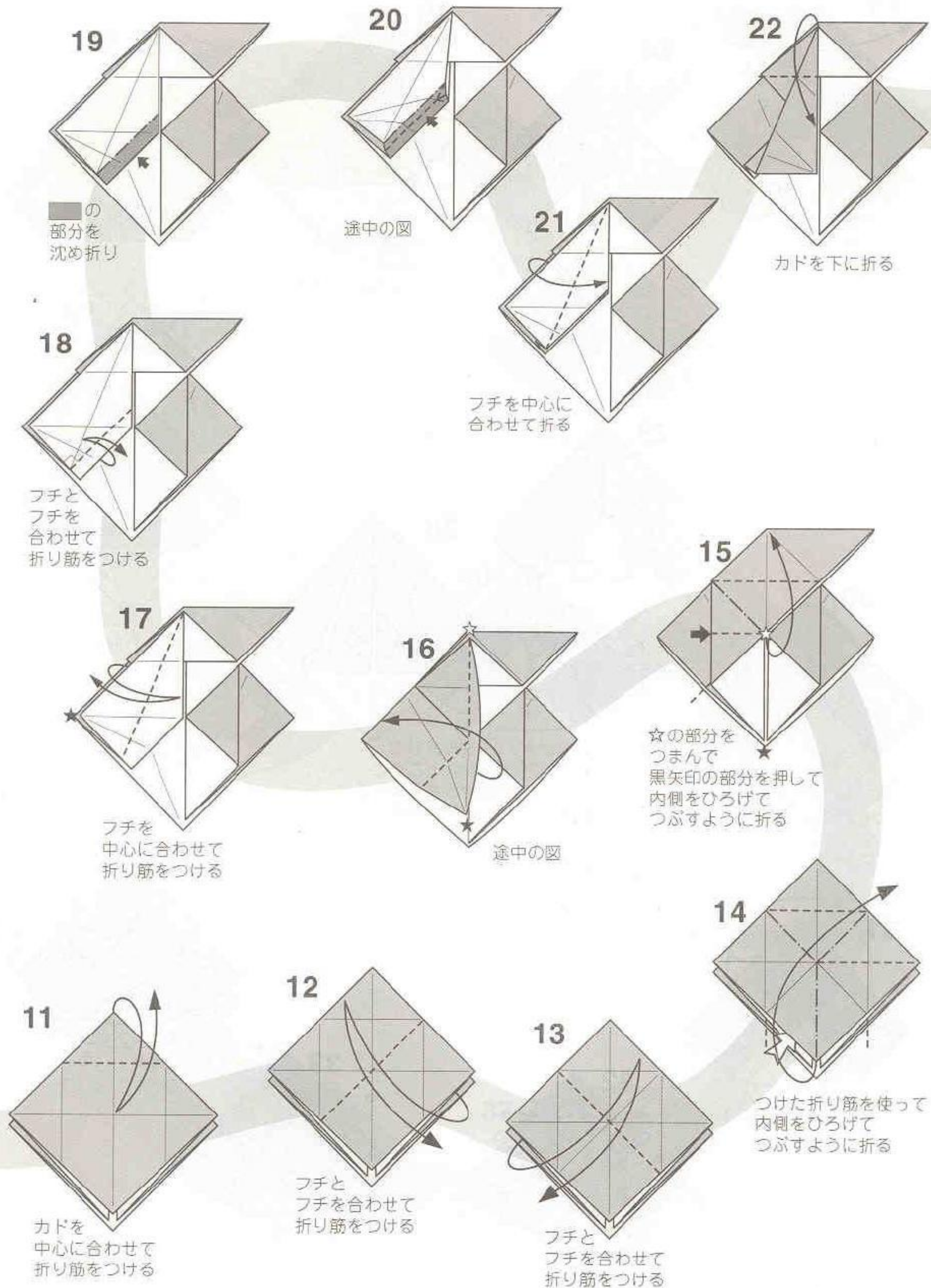
Model by Nishikawa Seiji

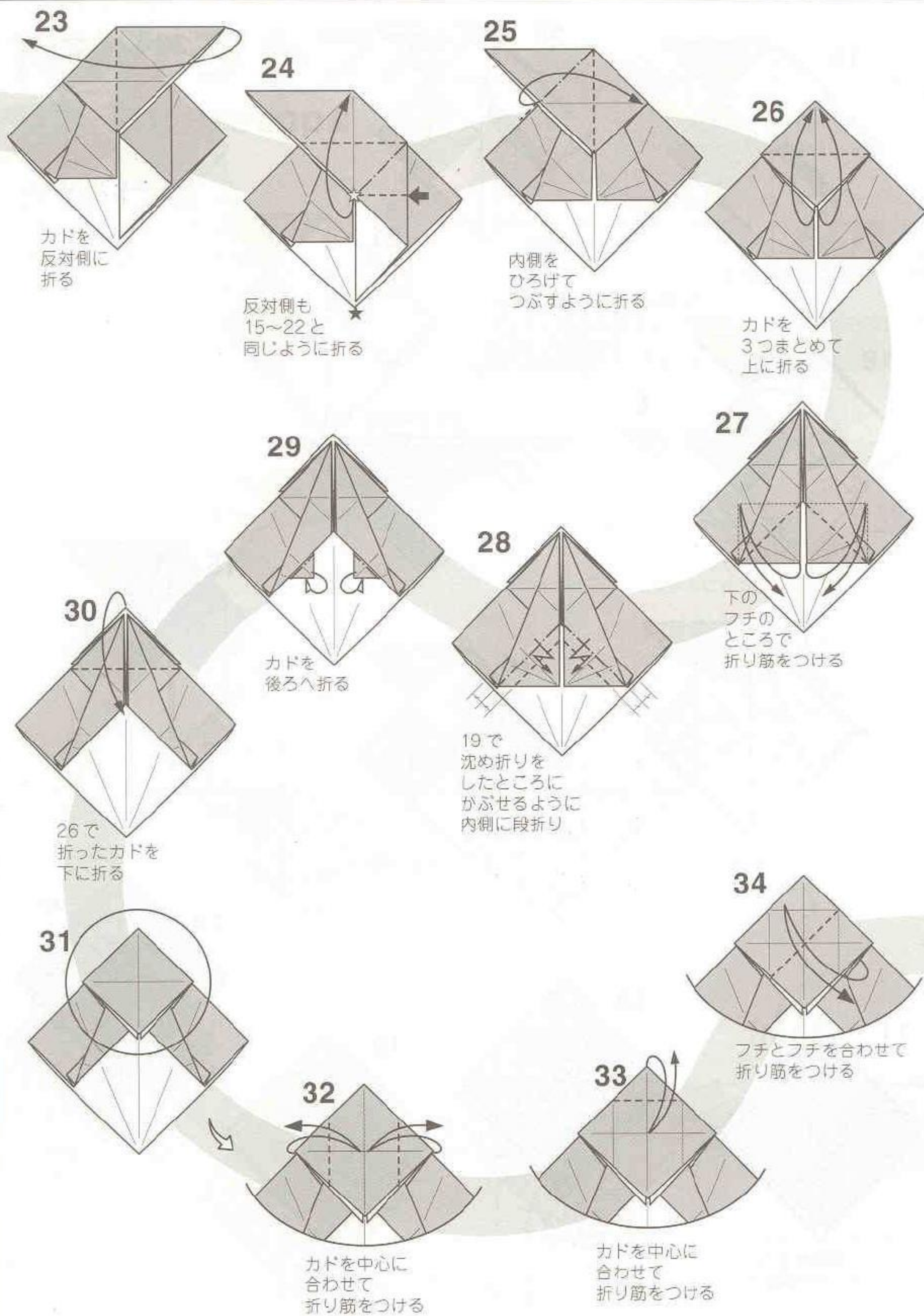
Diagrams by Origami House

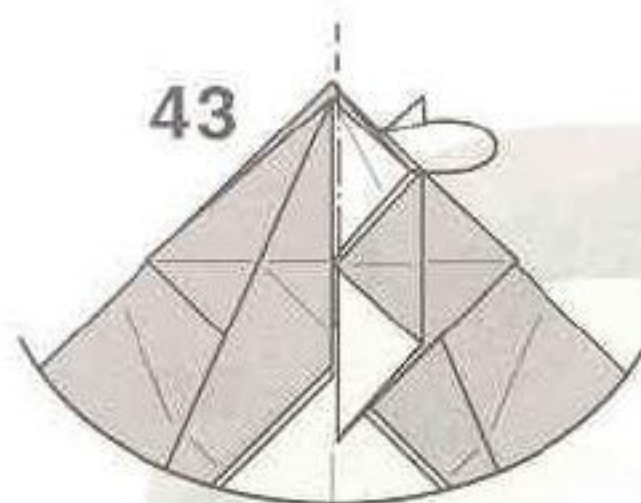
本誌75号で紹介のアロサウルスとともに1987年の雑誌『おりがみ』（日本折紙協会）での写真紹介が初出です。実際は、アロサウルスより前に形にしたもので、アロサウルスがはっきりと『ビバ！おりがみ』的な解析手法の影響を受けているのに対して、このトリケラトプスはそれ以前の経験的手法が色濃いと見えます。子供のころから持ち続けていたトリケラトプスのイメージを、課題である頭の後ろの“楯”を表現するちょっとしたアイデアで作品に仕上げる事が出来たのでした。

このトリケラトプスの折り紙的表現の源泉は、私が高校生の時に知った木村良寿氏の2枚折り作品で、デザインと技術のバランスを意識し始める思い出深い作品のひとつです。

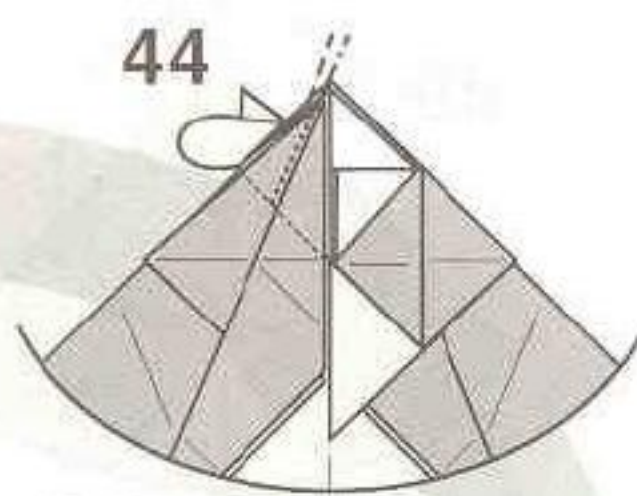




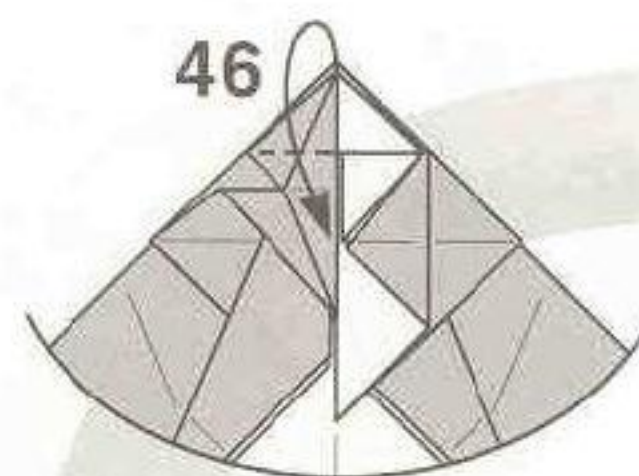




カドを
内側に折る



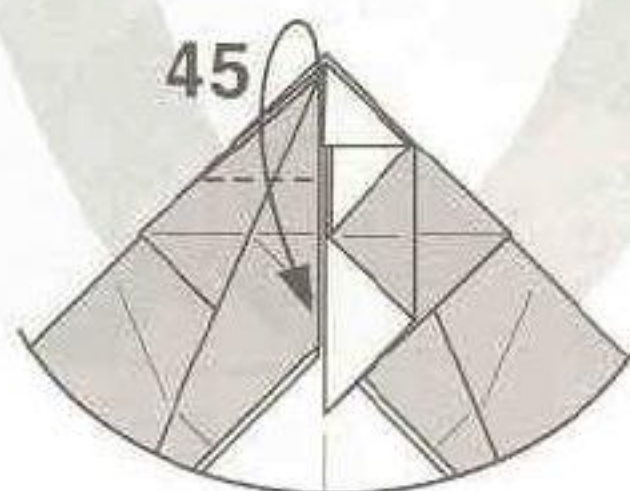
ついている折り筋で
かくれているカドを
内側に折る



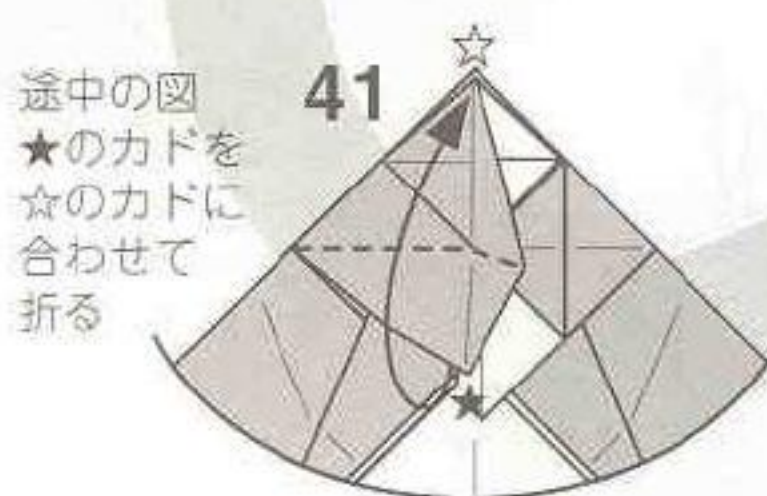
開くところで
カドを下に折る



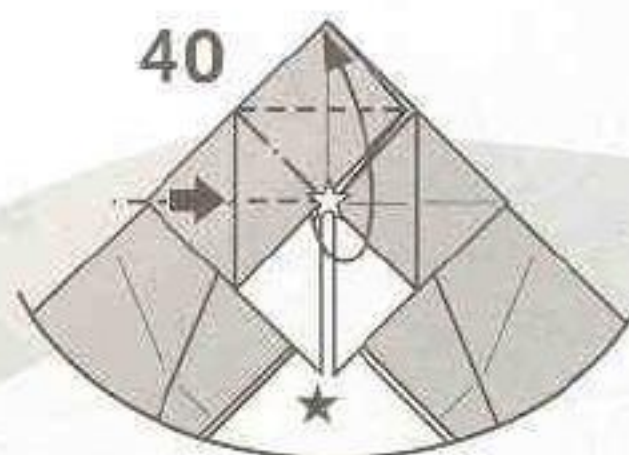
フチとフチを
合わせて
折り筋をつける



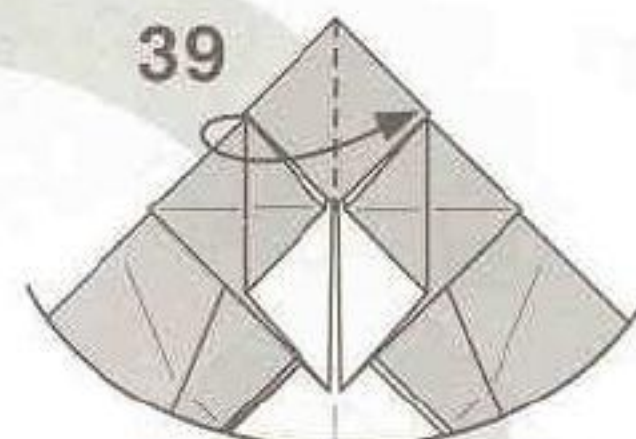
開くところで
カドを下に折る



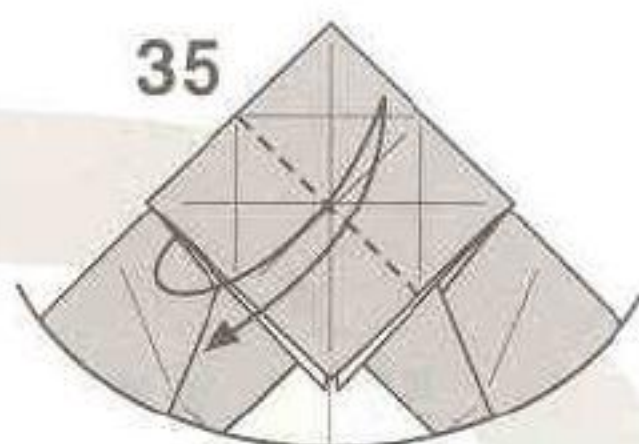
途中の図
★のカドを
☆のカドに
合わせて
折る



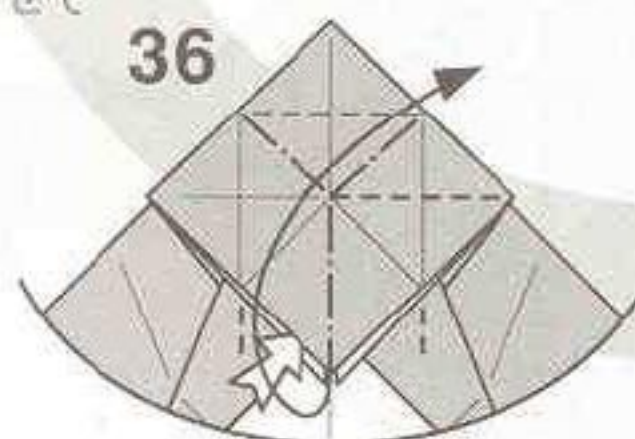
☆のカドをつまみ
黒矢印の部分を押して
内側をひろげて
つぶすように折る



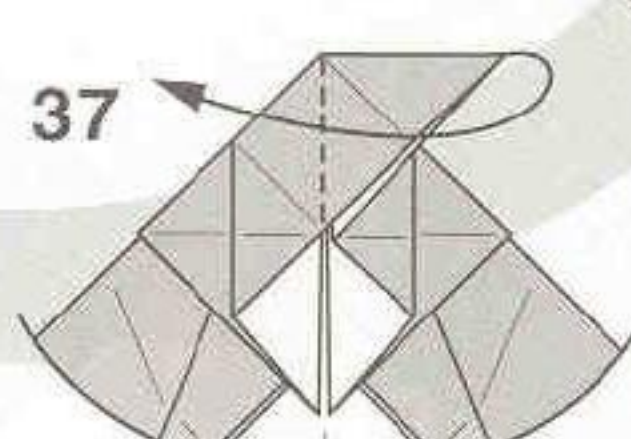
カドを
反対側に折る



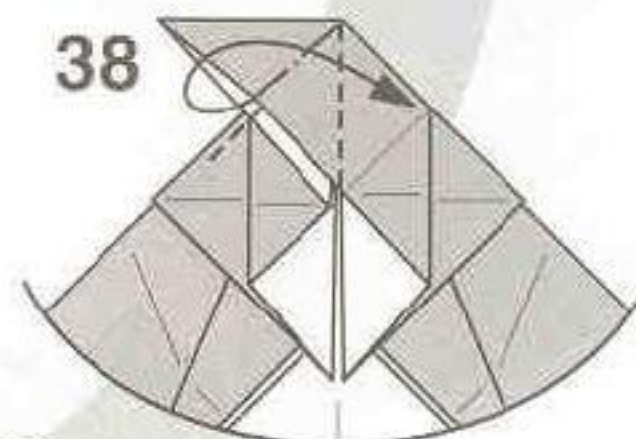
フチとフチを合わせて
折り筋をつける



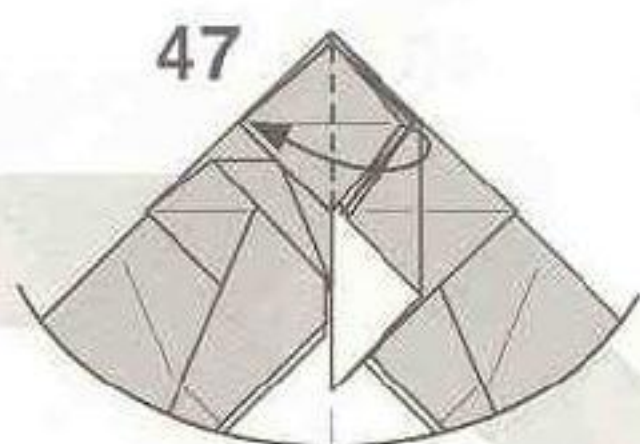
つけた折り筋を使って
内側をひろげて
つぶすように折る



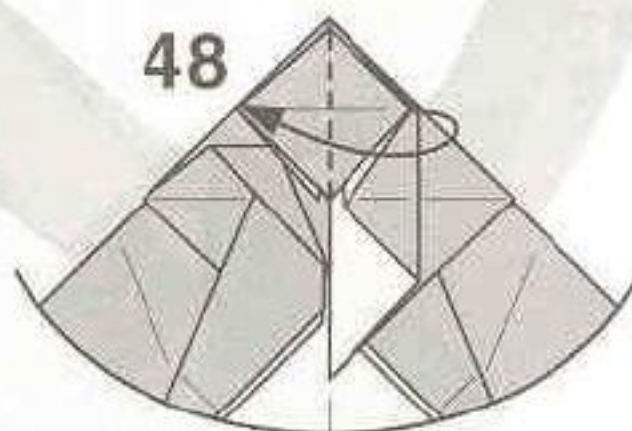
カドを
反対側に折る



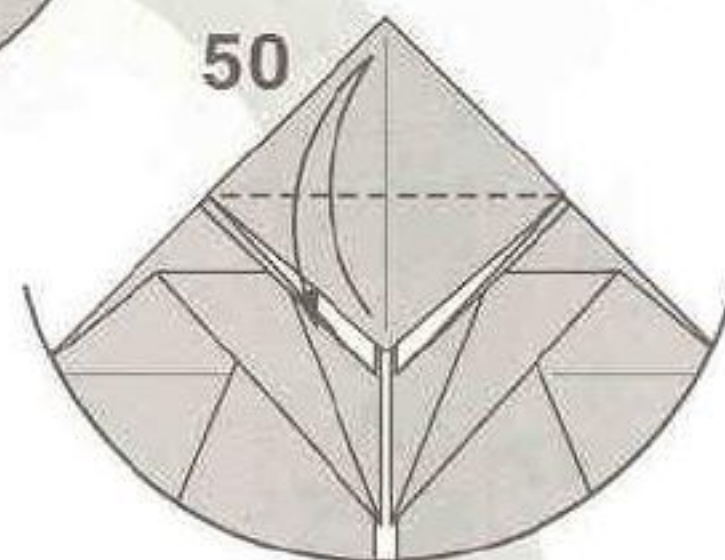
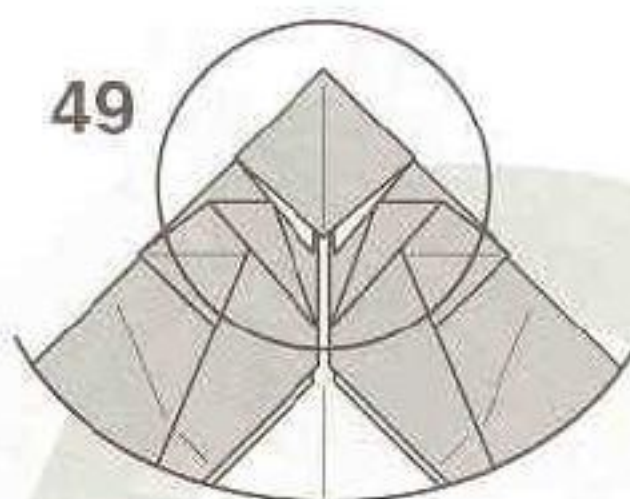
内側をひろげて
つぶすように折る



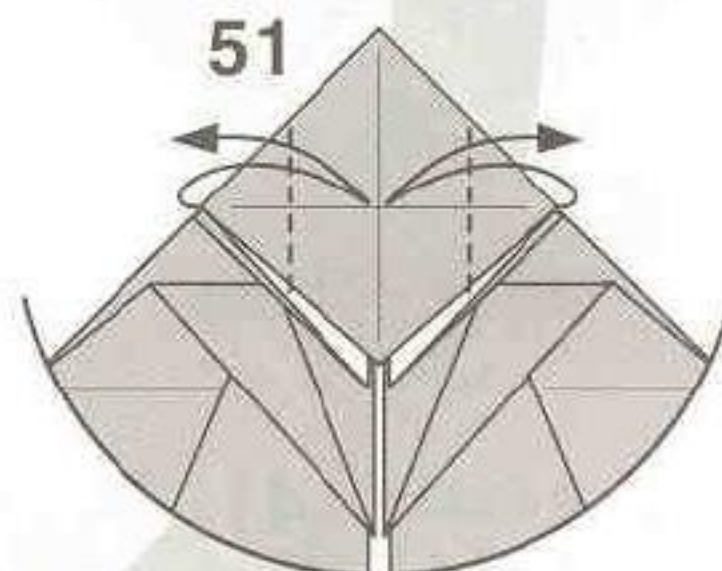
47
カドを
反対側に折る



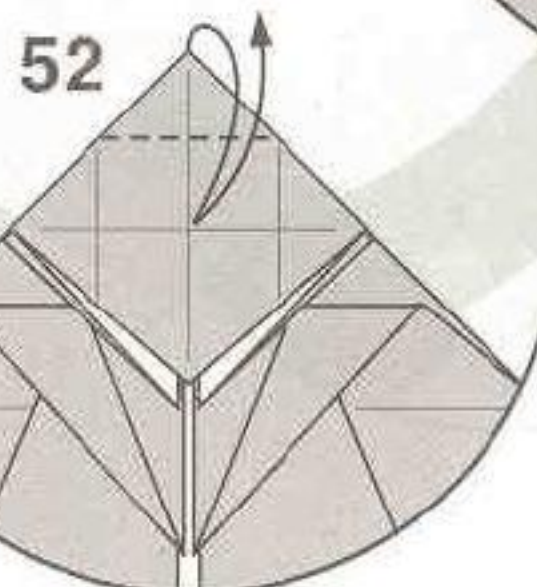
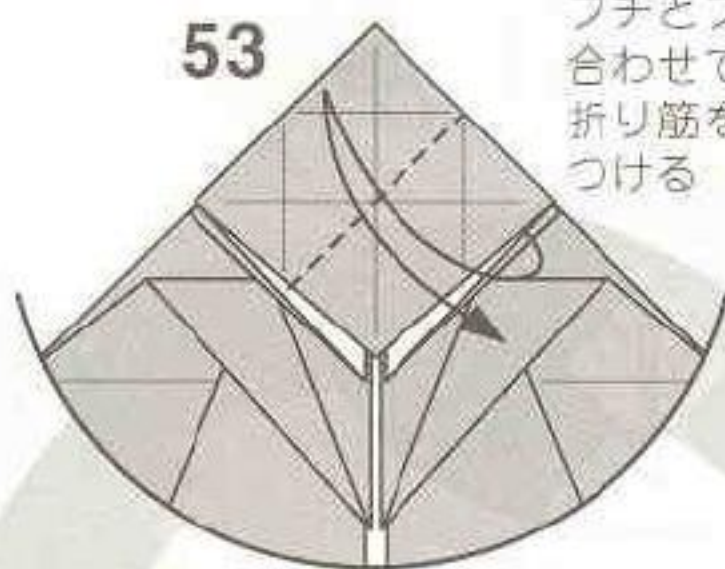
48
反対側も
39~47と同じ



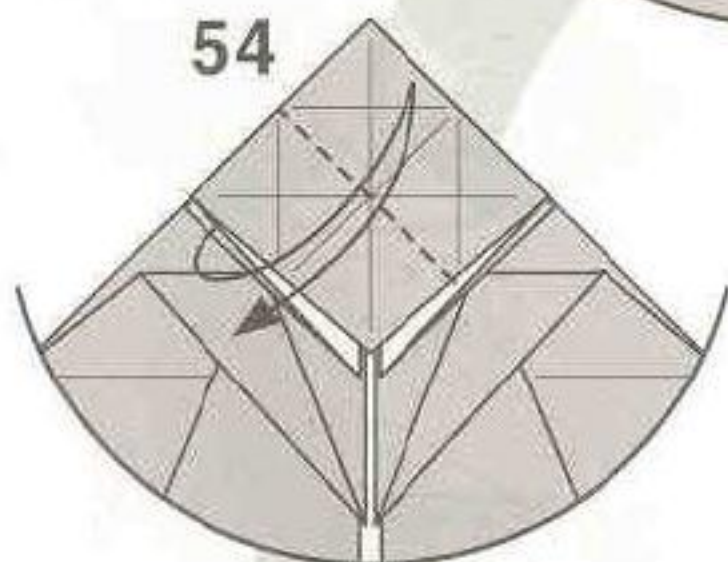
50
カドとカドを合わせて
折り筋をつける



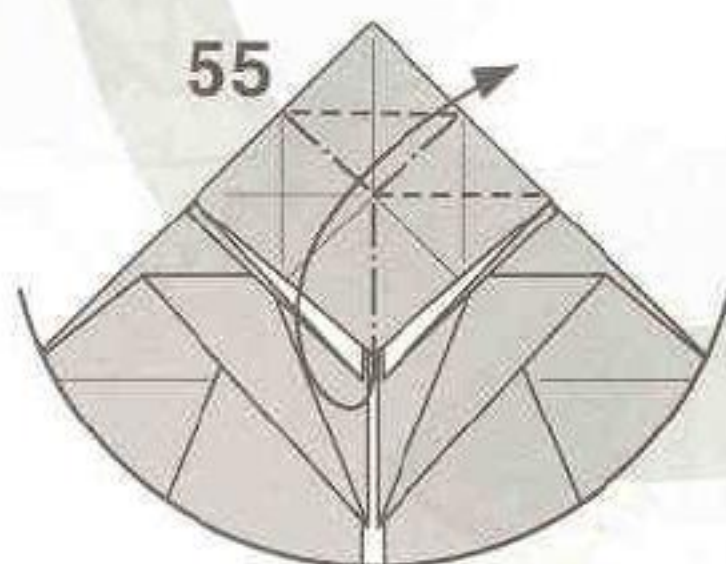
51
カドを中心に
合わせて
折り筋をつける



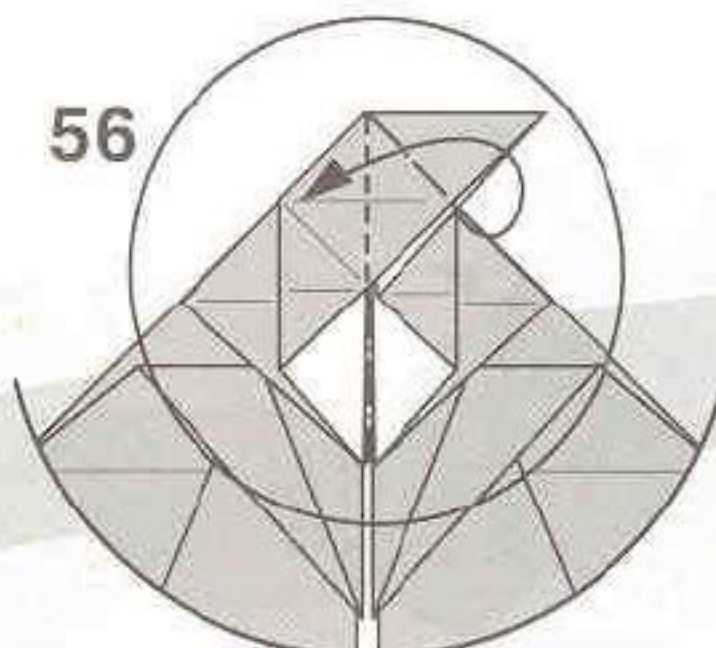
53
フチとフチを
合わせて
折り筋をつける



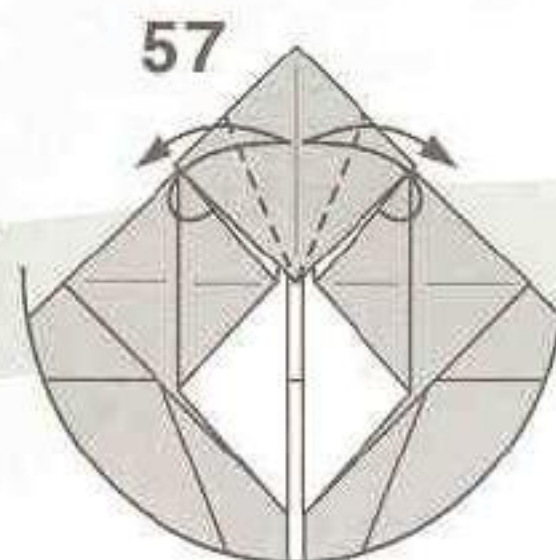
54
フチとフチを合わせて
折り筋をつける



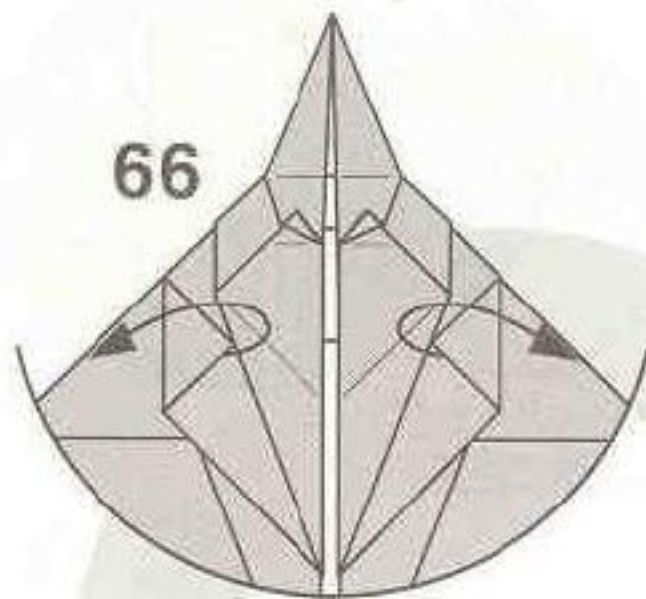
55
つけた折り筋を使って
内側をひろげて
つぶすように折る



56
内側をひろげて
つぶすように折る

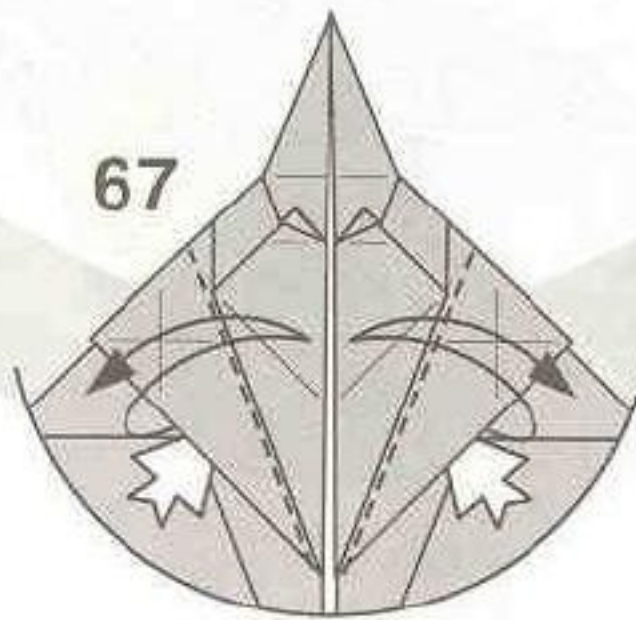


57
フチを折り筋に
合わせて
折り筋をつける



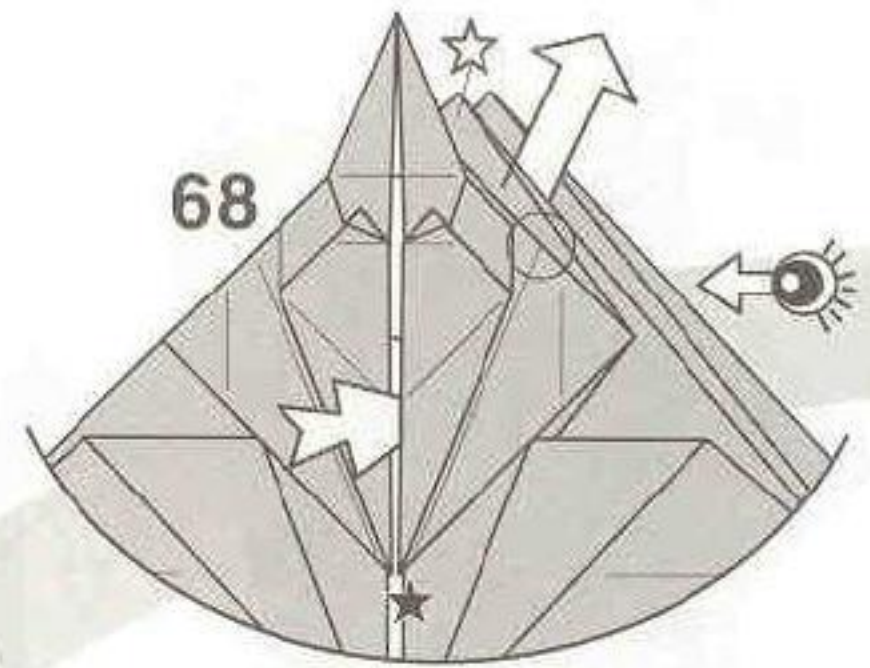
66

しっかりと折り筋をつけてから戻す



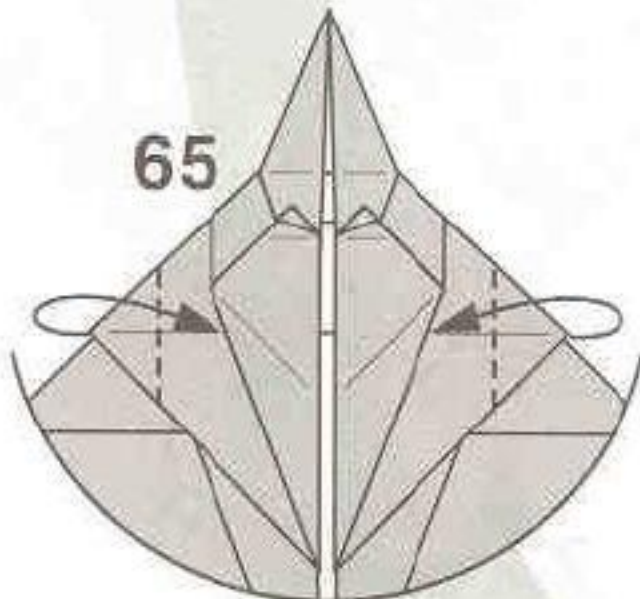
67

内側をひろげて
フチに沿って
折り筋をつける



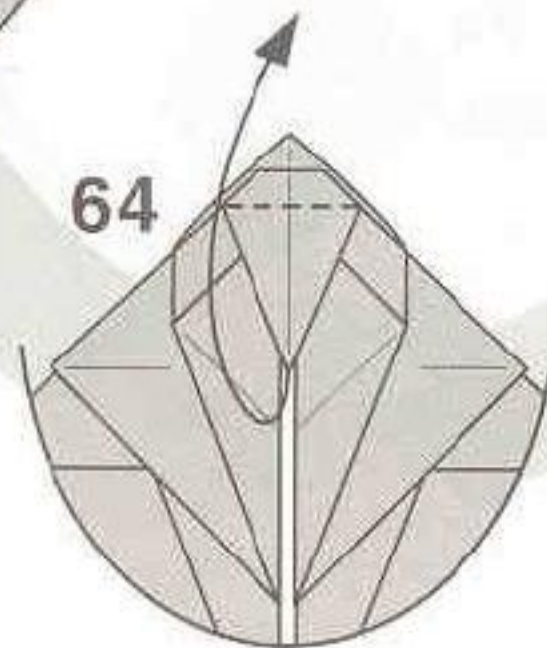
68

後ろから2番目の
カドを引っ張って
内側をひろげて
横から見る



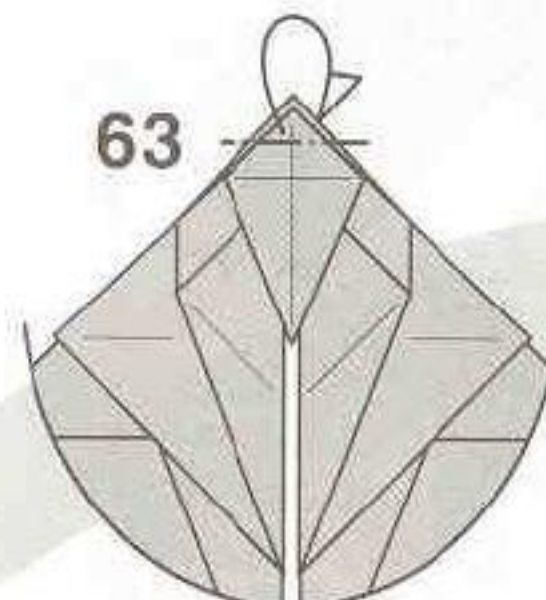
65

カドをフチに
合わせて折る



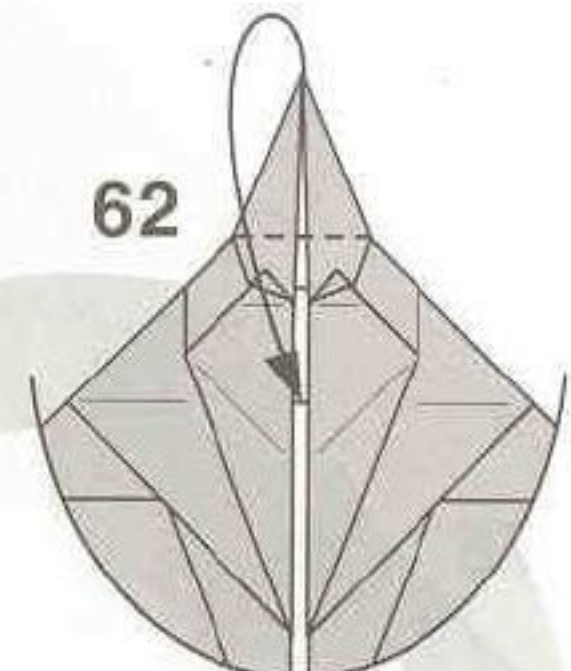
64

カドを上
に折る



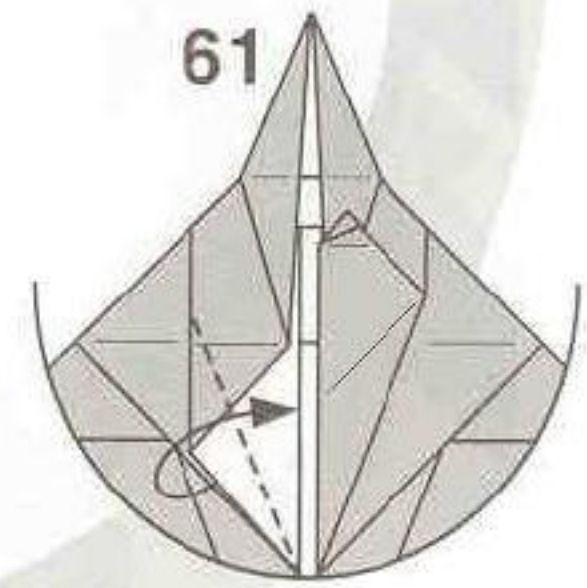
63

カドを後ろへ
少し折る



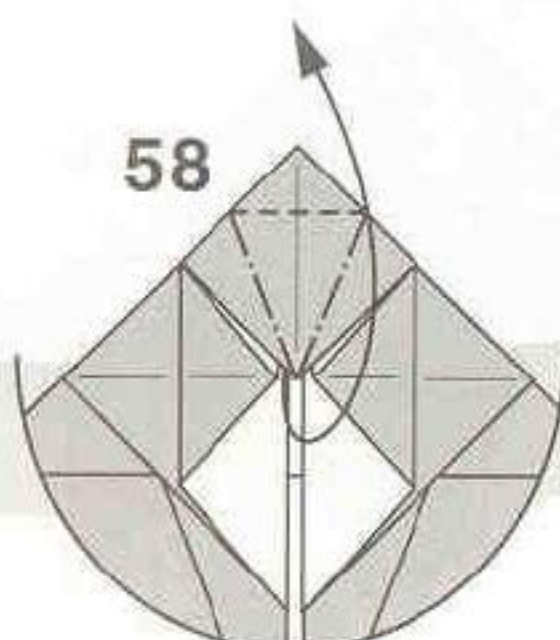
62

カドを下に折る



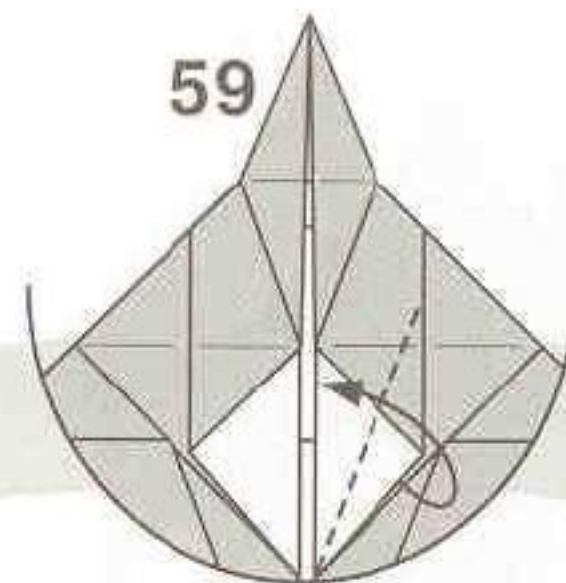
61

反対側も
59~60と同じ
ように折る



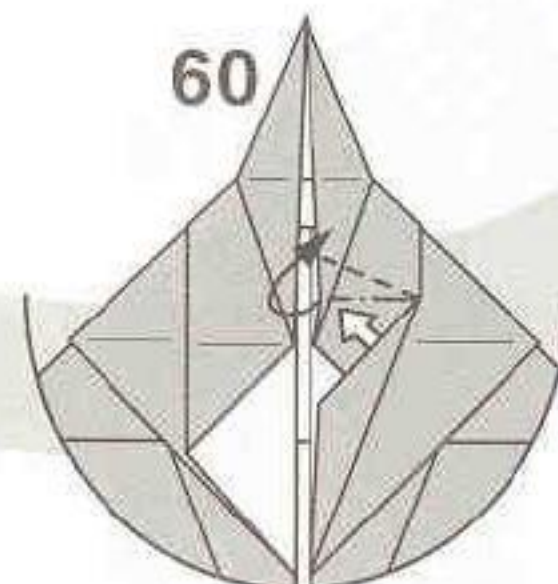
58

内側をひろげて
つぶすように折る



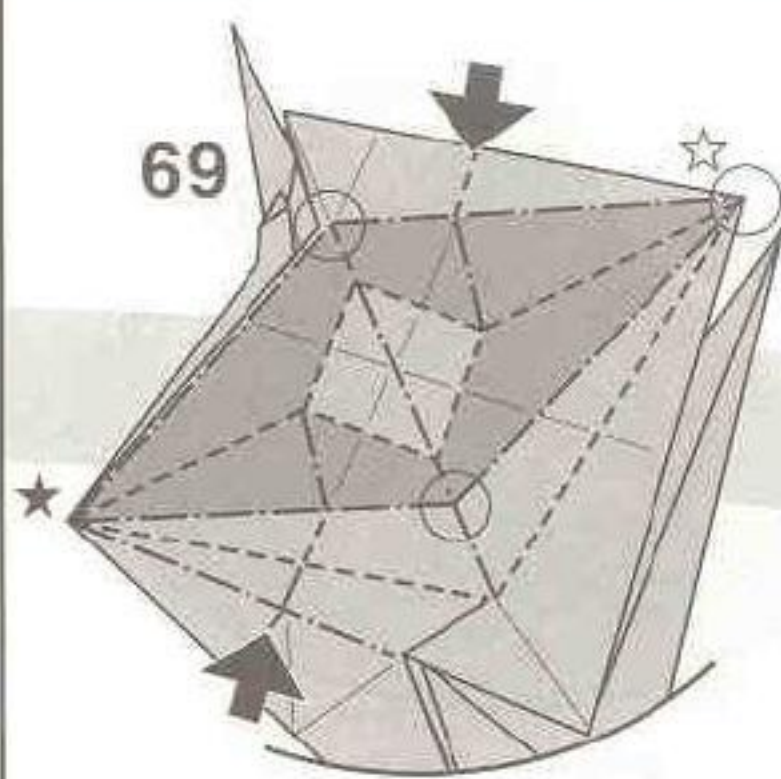
59

フチを中心
に合わせて折る

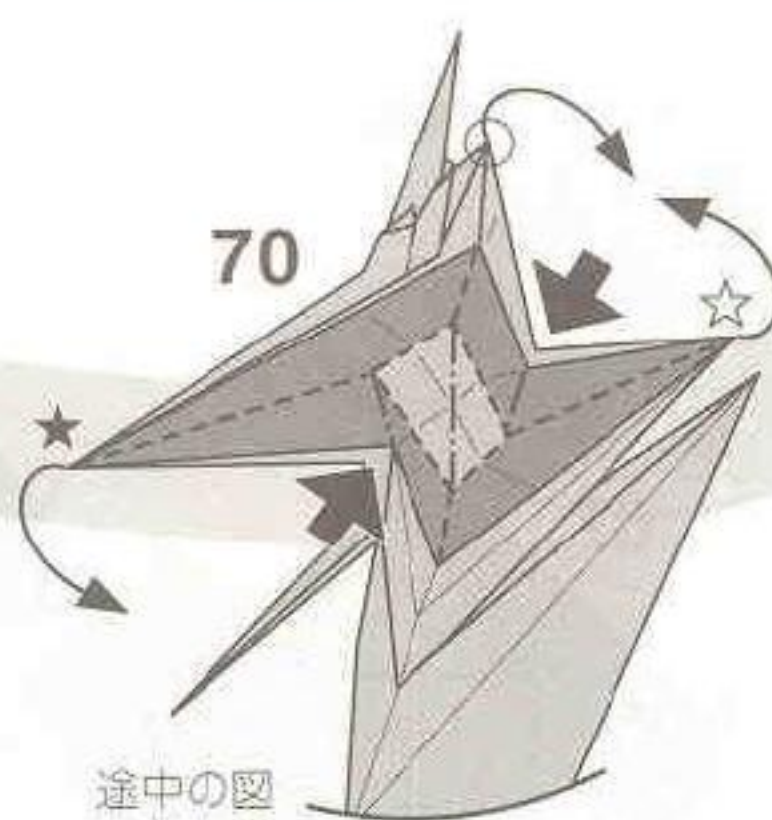


60

内側の紙を
引き出しなが
らカドをつま
むように折る



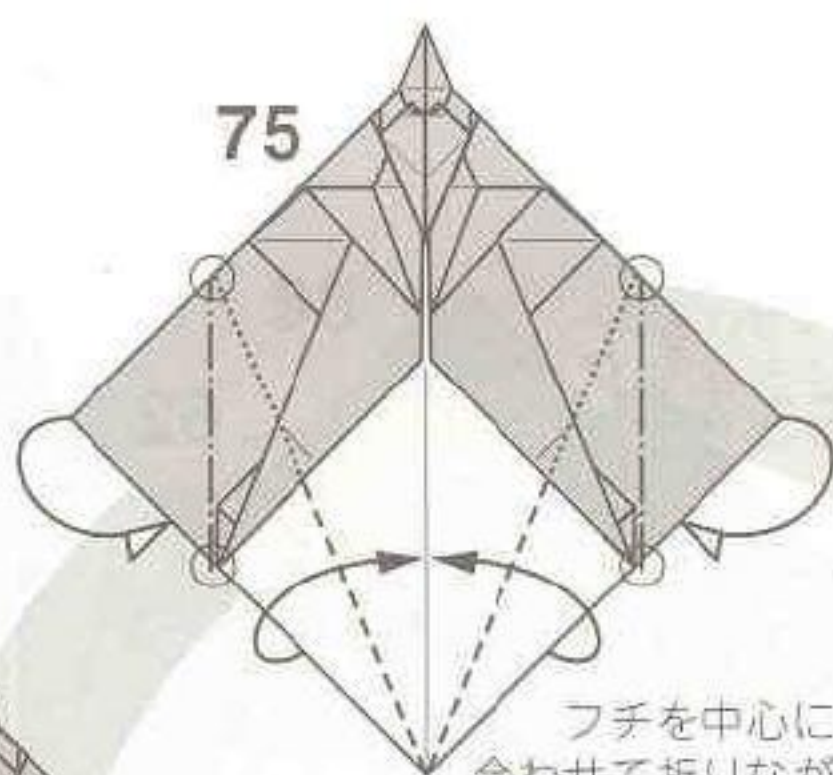
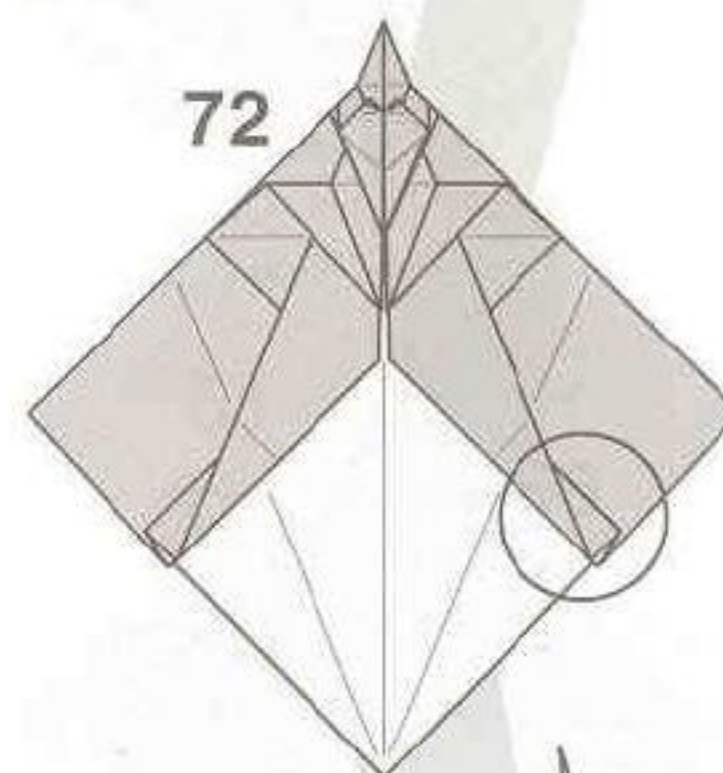
横から見た図
○と○を結ぶ線で
折り筋をつけて
図のような折り筋で
折りたたむ



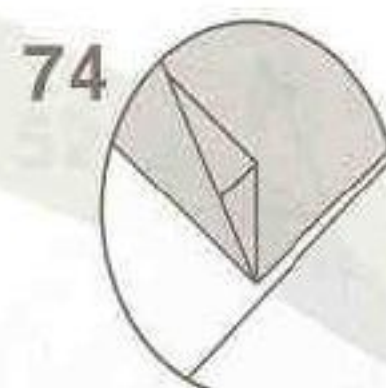
途中の図
○と☆の
カドを合わせて
平らになるように
折りたたむ



反対側も
68~70 と同じ
ように折る



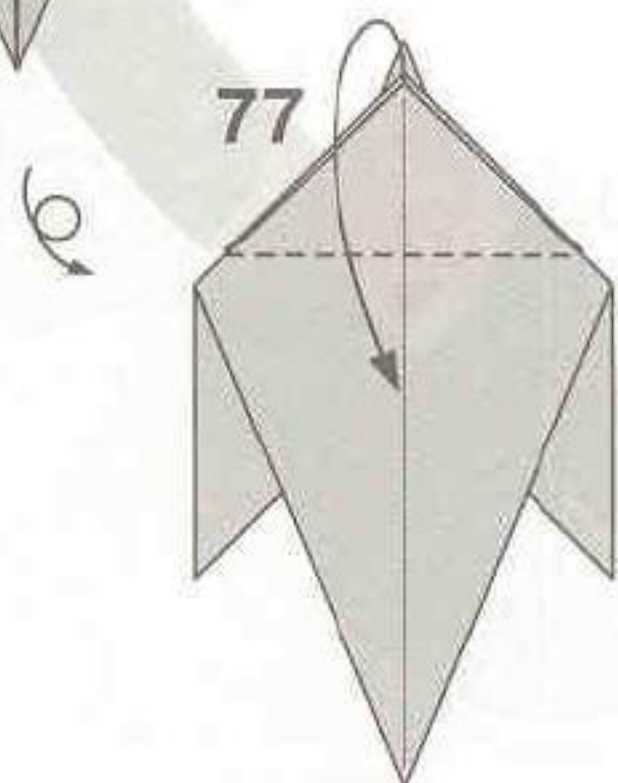
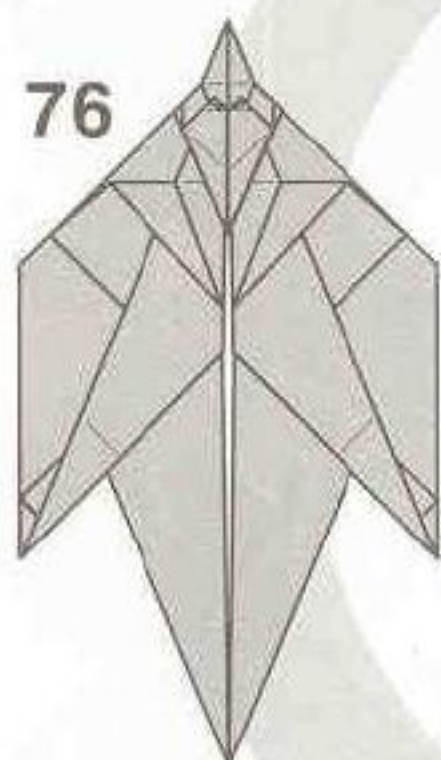
フチを中心に
合わせて折りながら
○と○を結ぶ線で
カドを内側に折る



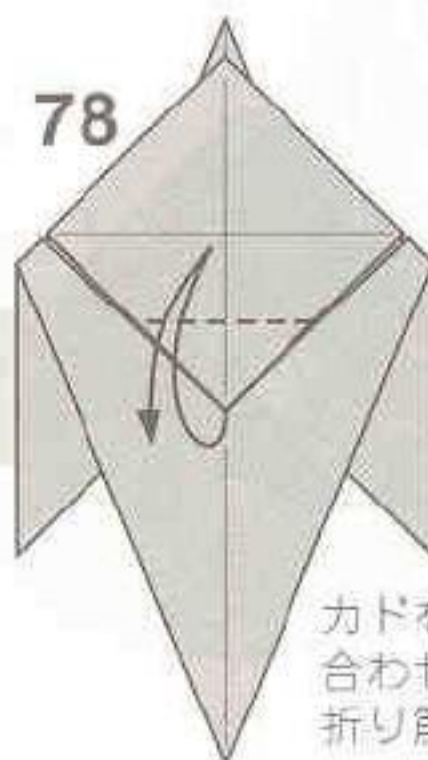
反対側も同じ
ように折る



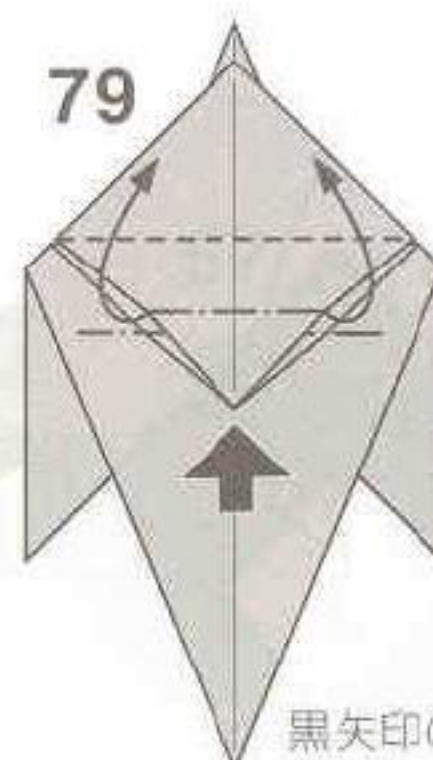
フチとフチを
合わせてカドを
すき間に差し込む



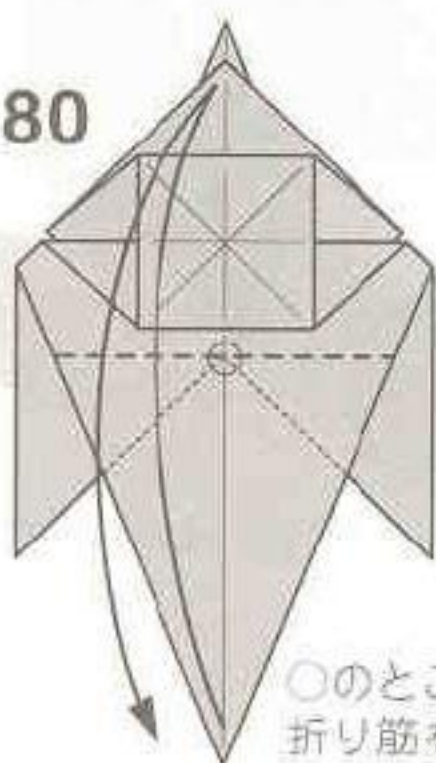
開くところで
カドを下に折る



カドを折り筋に
合わせて
折り筋をつける

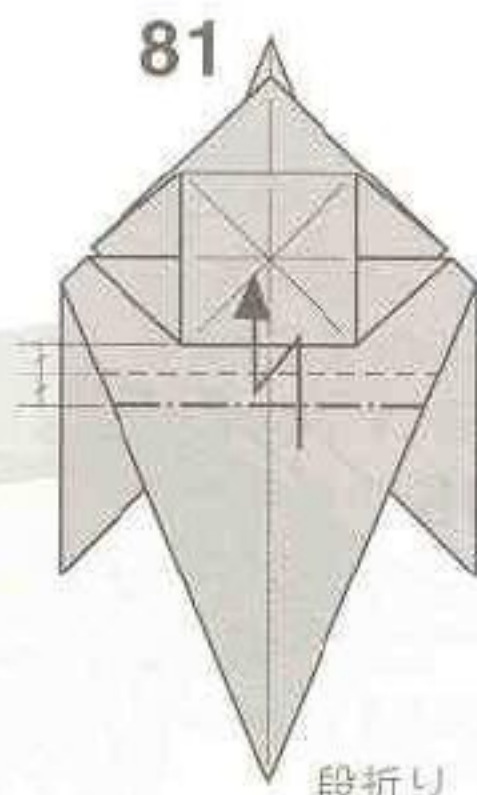


黒矢印のカドを
広げてつぶす
ように折る



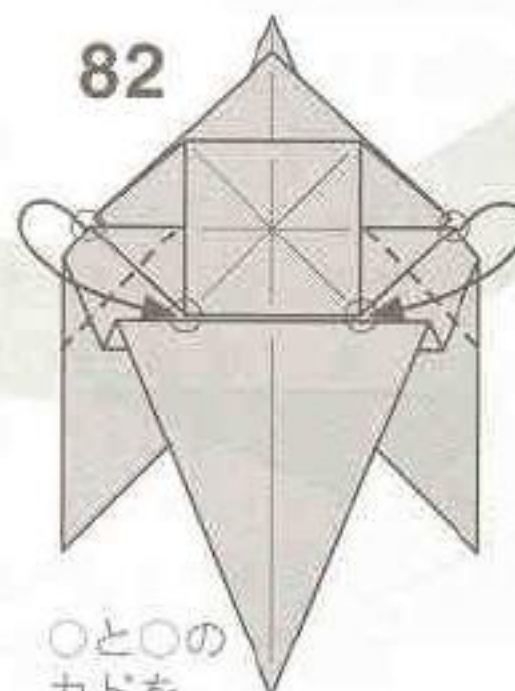
80

○のところで
折り筋をつける



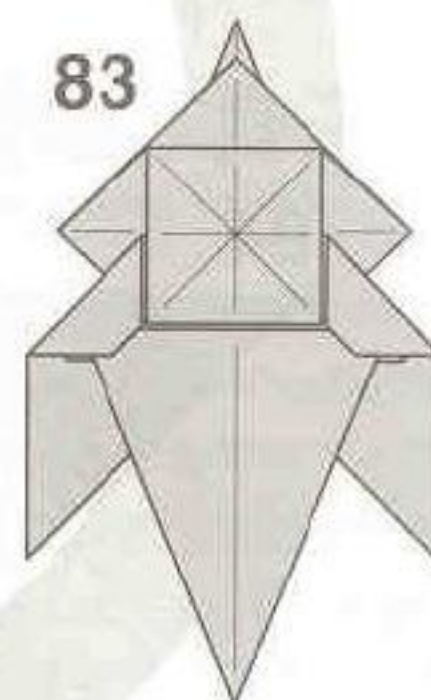
81

段折り

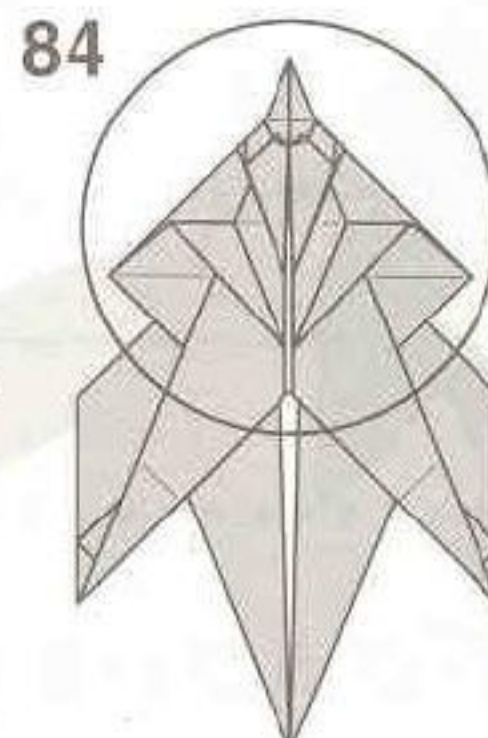


82

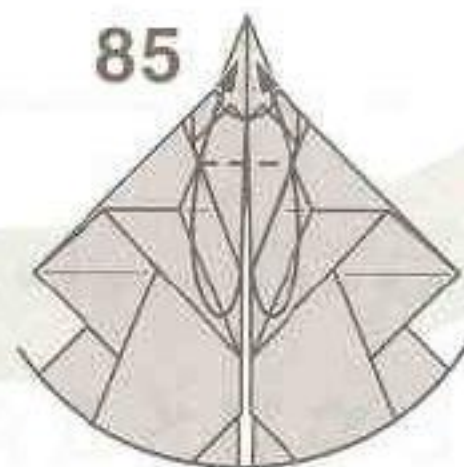
○と○の
カドを
合わせて折る



83

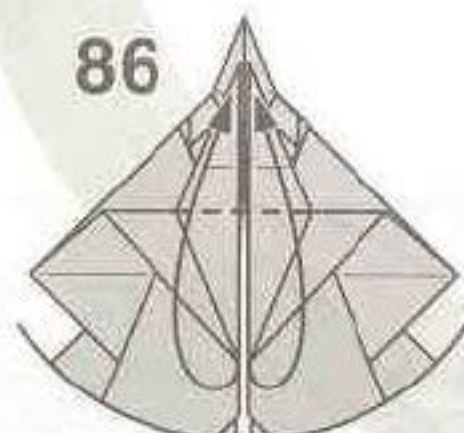


84



85

カドを
上に折る



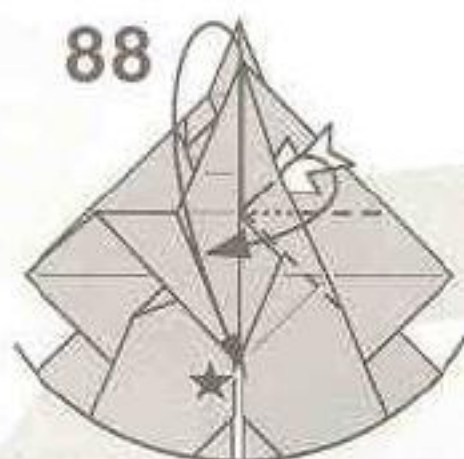
86

カドを
上に折る



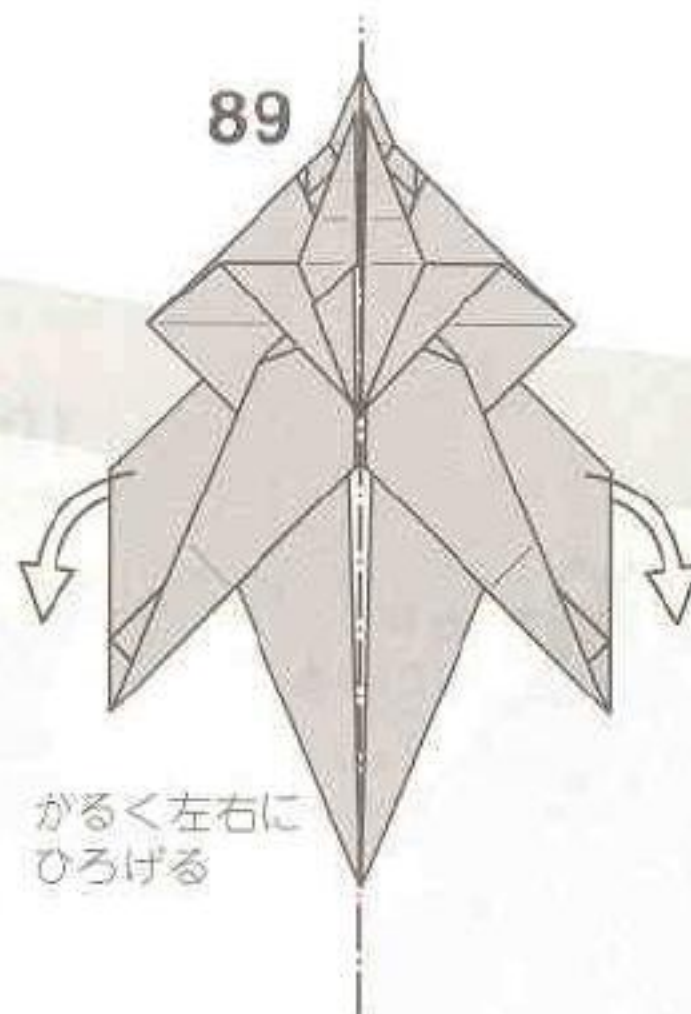
87★

内側をひろげて
引き寄せながら
つぶすように折る



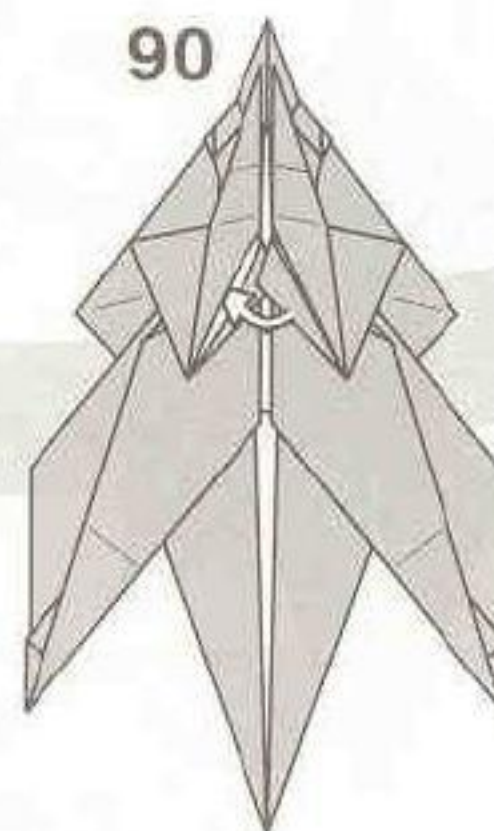
88

反対側も
同じ



89

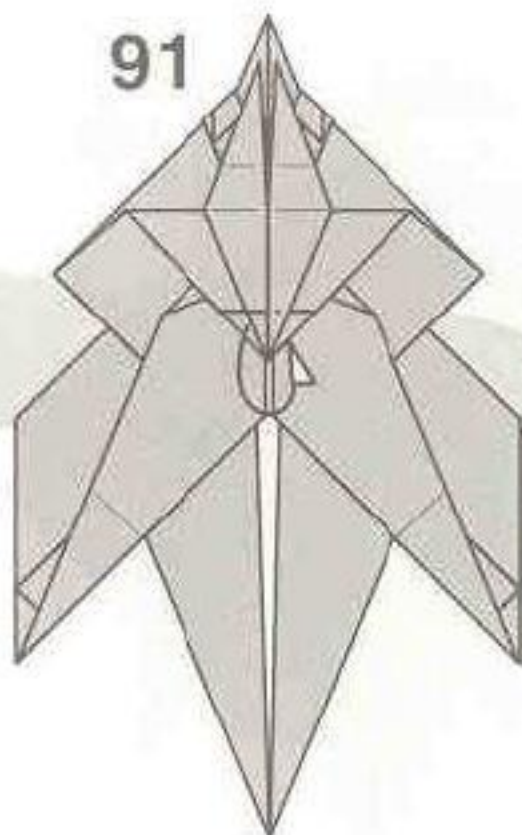
がるく左右に
ひろげる



90

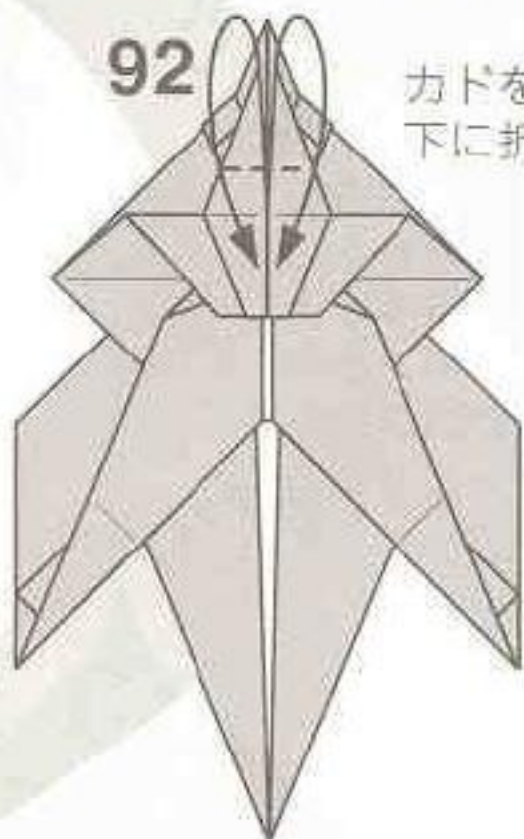
片側のカドを
反対側のカドの
上から2つ目の
すき間に差し込む

91



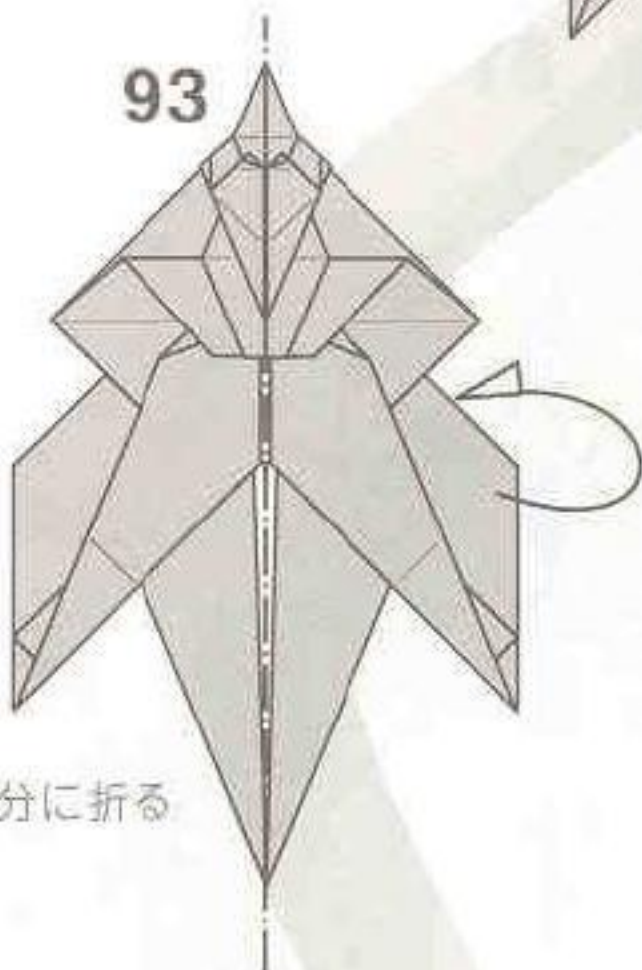
重ねたまま
カドを後ろへ
折る

92



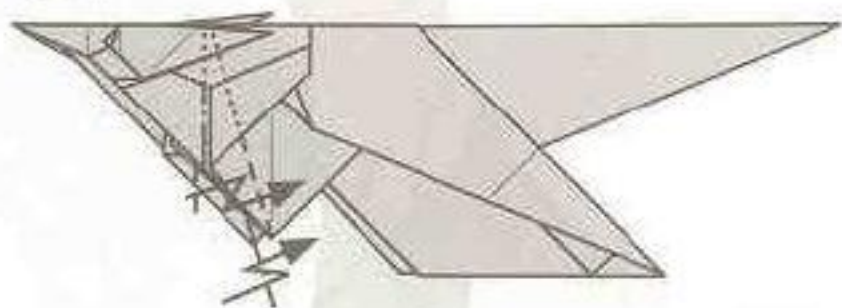
カドを
下に折る

93



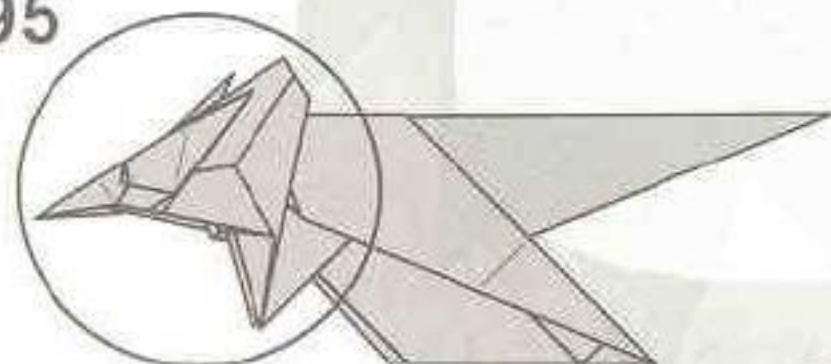
半分に折る

94

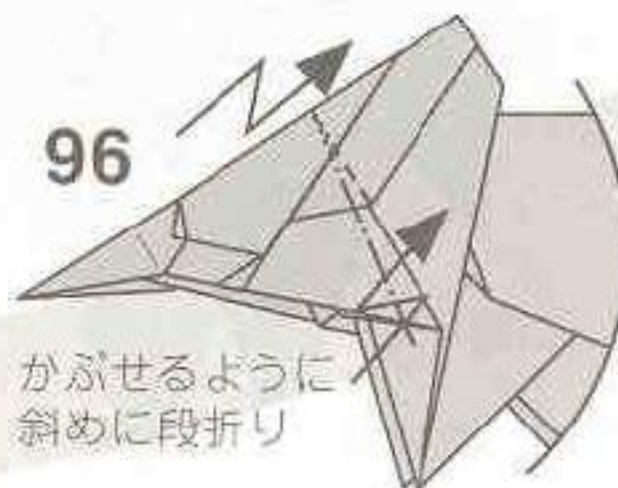


かぶせるように
斜めに段折り

95

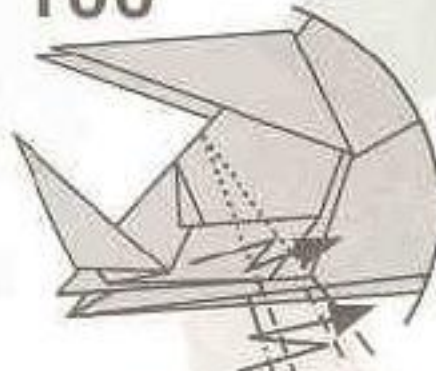


96



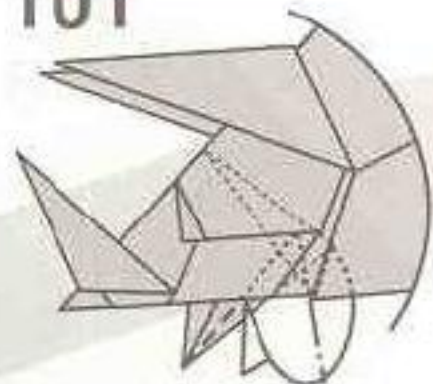
かぶせるように
斜めに段折り

100



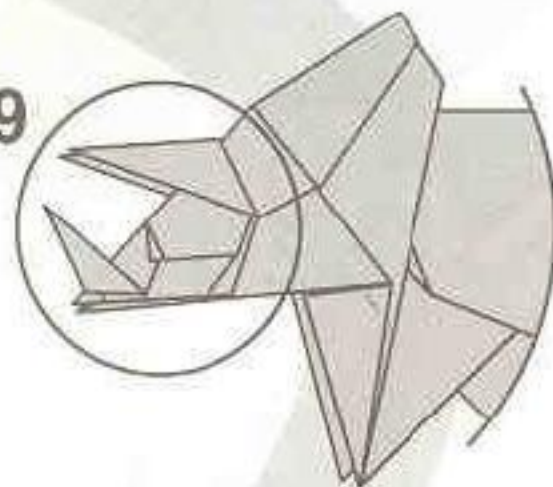
内側のカドを
斜めに段折り

101



フチとフチを合わせて
カドを内側に折る
反対側も同じ

99

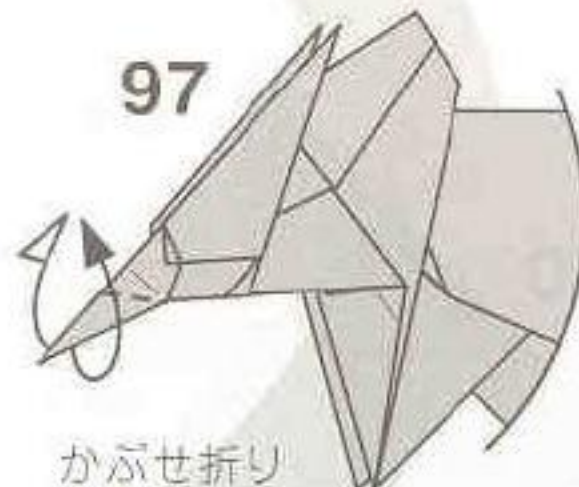


98

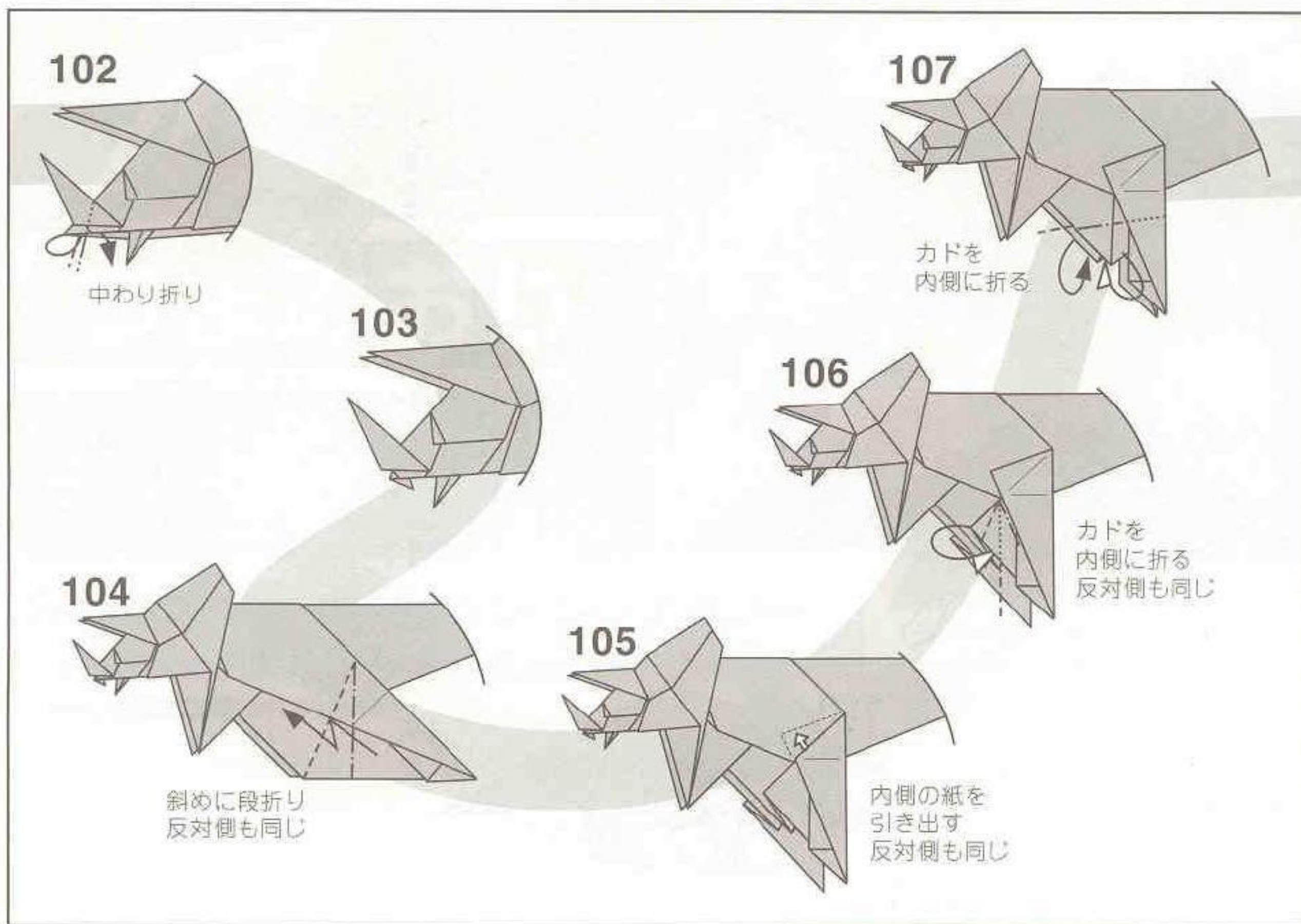


カドを
斜めに折る

97



かぶせ折り



おり すじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

なんでこんなことになってしまったんだろ？

Have I Done Anything Wrong?

菅原 良子

Sugahara Yoshiko

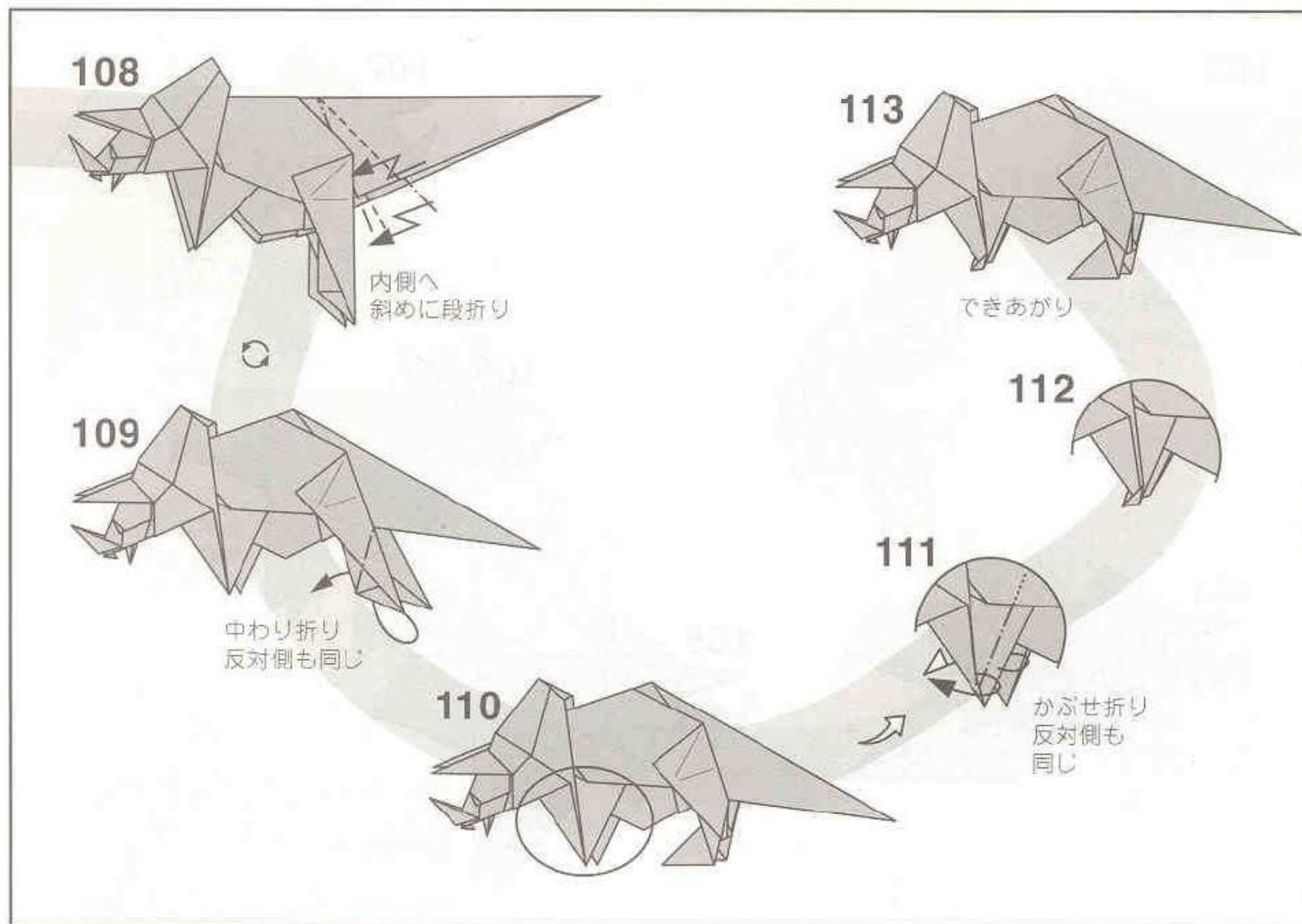
ほんの数年前までの私にとって「折り紙」は、好きでもなければ嫌いでもないといった感じの存在でした(TVチャンピオンは見たことがあって、すごい人たちがいるんだな~と思ってはいたけれど)。そんな私が、なぜ今、この文章を書いているのかと思うと人生ってほんと不思議って思います。

きっかけは、当時ちょっと体調をくずしてしまって、リハビリに何か始めようと住んでいる市の広報紙を見ていると、牛乳パックなどを使った工作の講座があるのを見つけて、ちょっと面白

そうだから参加してみようと思ったことから始まります。その後、講座を卒業したメンバーでサークルを作ろうってことになりまして、同じ頃やっぱり講座があった折り紙のメンバーと一緒にやろうということになりました。ところが、工作組がどんどん辞めてしまってついに私一人になってしまったのです。当然ながらサークルの活動も折り紙中心になってしまいました。折り紙組のみんなは、ひとり残されてしまった私に、一から教えてくれまして、いろいろな作品を折っていると楽しくて、すっかり夢中になってしまいました。そのサークルのメンバーにいつも「最初は工作組

だったのね~」と言われます(いつの間にか一番夢中になっているもので)。

こうしていったん夢中になってしまうと、もともとがお調子者なので、いろいろとやってみたいし、行ってみたいという訳で、現在はすっかり折り紙中心の毎日です。毎日バタバタしているついでに「なんでこんなことになってしまったんだろ？」って思うこともあるけど、いろいろな方々にも出会えたし(これが一番よかったなって思う)いろいろな体験もできたし、折り紙に出会えて本当によかったって思います。これからもずっと続けていきたいです。



折紙三昧 ㊥

Origami-Zanmai (This Origami and That)

追悼

Memories

吉澤章先生が亡くなりました。現在の創作折り紙の世界的な発展の基礎をなし、お亡くなりになる直前まで常に後進の目標で有り続けた折り紙界にとって不世出の巨人です。

その影響力は本誌に寄せられた世界中からの追悼の言葉からも改めて痛感します。私自身は、作品に出会った当初から吉澤先生を折り紙の空気のようなものと感じていたのだと、今さらのように思い知らされます。その作品の芸術性は技法の解析が進んだ現代にあってなお更に際立っていると思えます。また吉澤先生の活動の記録となる「折り紙通信」を読み返す時、半世紀もの時を越え現代の折り紙の

多様な広がりを見通していたのだと尊敬を超え畏怖の念さえ感じます。私も折り紙に魅力を感じて活動する過程で幾度か直接お会いする経験ができ、とりわけ日本折紙学会としては昨年の第10回折紙探偵団コンベンションにお迎えできたことはとても有り難いことだったと思います。

私が、吉澤先生を創作折り紙作家として知ったのは比較的小中に入ってからのことです。完成写真と折り図に従って作った自作とのギャップは認識できたものの、どのようにして近づいていいものかわからないというのが正直な感想でした。しかし、実はそれよりも何年も前に吉澤先生の作品と気づかずに、ひた

すら折りまくっていた作品がありました。それは、「ちょう」です。風船の基本形から一瞬にして姿を現す「ちょう」(小学生用の百科事典のおりがみの項に紹介されていたようなかすかな記憶があります)をいくつもいくつも折っていた時期がありました。小学生に入る前後の私にとって折り紙といえば鶴、奴、そして「ちょう」でした。吉澤先生を空気の様と表現したくなったのは、まさにこのような体験からだと思います。折り紙をここまで導いた吉澤先生に深く感謝いたしますとともにご冥福を心よりお祈りいたします。

西川誠司 Nishikawa Seiji
日本折紙学会 評議員代表

Rabbit Ear つまみおり

Information



▲「うさぎ」の講習にて

◆2005スペイン国際折紙コンベンションレポート

報告:宮島 登

豪華な顔ぶれ

平成17年5月12日(木)から15日(日)にかけてスペイン・バルセロナにて開催された第8回スペイン国際折紙コンベンションに国際交流基金の支援のもと参加してきました。実に14カ国から100名以上の参加者が集まり、海外ゲストも私のほかにロバート・ラングさん(アメリカ)、デビッド・ブリルさん(イギリス)、ニコラス・テリーさん(フランス)、ローマン・ディアスさん(ウルグアイ)ら、それはそれは豪華な顔ぶれ。もちろんスペインからもマヌエル・シルゴさん、フェルナンド・ヒルガドさんらの有名作家も参加し、国際色豊かで賑やかなコンベンションでした。

軟禁状態?

朝の10時から2度の休憩を挟んで夜の12時(!)まで続くという、まさに1日中折り紙漬け(軟禁状態ともいう)。プログラム等は全体にゆるーい感じで、2時間講習が基本でとてもゆったりと進行します。システムティックな部分が少なく、受付もなく自由に好きな教室に行くことができます。また講習以外に

も、新刊本のプレゼンテーションや作品コンテスト、はたまた市内観光まで様々な趣向をこらしたプログラムで楽しませてくれました。それにしても熱心なファンが多いこと多いこと!「『犬』の折図を描いたので見てくれ」だとか「『ユニコーン』のなてがみはどこから出すんだ?」とか「『羊』の目はどうやって折るんだ?」とか、予想を超えた、ハイレベルな(というか“濃い”)質問をたくさんいただきました(どの作品も私のホームページには完成写真と展開図しか載っていないんですけど)。マニアックなのはスペイン人の気質というわけではなく、情報も機会もあまりないので、とにかくみんな必死なんだとか(たしかにここは“情熱の国”だ)。

人の温かさを感じる

自分にとっては初めての海外コンベンションでした。「折り紙に言葉はいらない」

「折り紙は世界共通言語だ」なんて手垢のついたフレーズは使いたくはないですが(実際言葉がまったく要らないかと言えばそんなことはないです)、ただ折り紙を通しての心の通じ合いは、言葉を通してのそれと違かに凌駕する、非常に豊かで内実のあるものであったと思います。今回のコンベンションではみなさんに大変親切にいただきました。即席の講習が始まり遠巻きに眺めていたところ「お前も入れよ」と誘っていただいたり、教室が変更になったときは何人もの方が「変更になったから気をつけろよ」と声をかけてくださいました。多くの方と知り合い、交流することができたことが収穫であることはもちろんですが、同時に人の温かさを感じることもできたコンベンションでした。送迎や通訳など何から何までお世話になったエンリケ・マルティネスさん&宮本幹子さんご夫妻を始め、この旅でお世話になった多くの方に改めて感謝をしたいと思います。皆さんと再会できる日を楽しみにしたいと思います。



▲「星」の講習にて



▲ファンから無理な注文を受けて悶絶(?)する筆者



▲シルゴ氏の作品

◆ヤドカリの攻撃—ヤドカリ戦争顛末記

報告:ロバート・J・ラング

訳:立石浩一

ロバート・J・ラング氏の呼びかけで始まったヤドカリ戦争。そこには若手クリエイターを育てるという大きな意味もある。以前の昆虫戦争を機に、若手作家が続々と登場してきた時のように。

競争心の強い奴ら

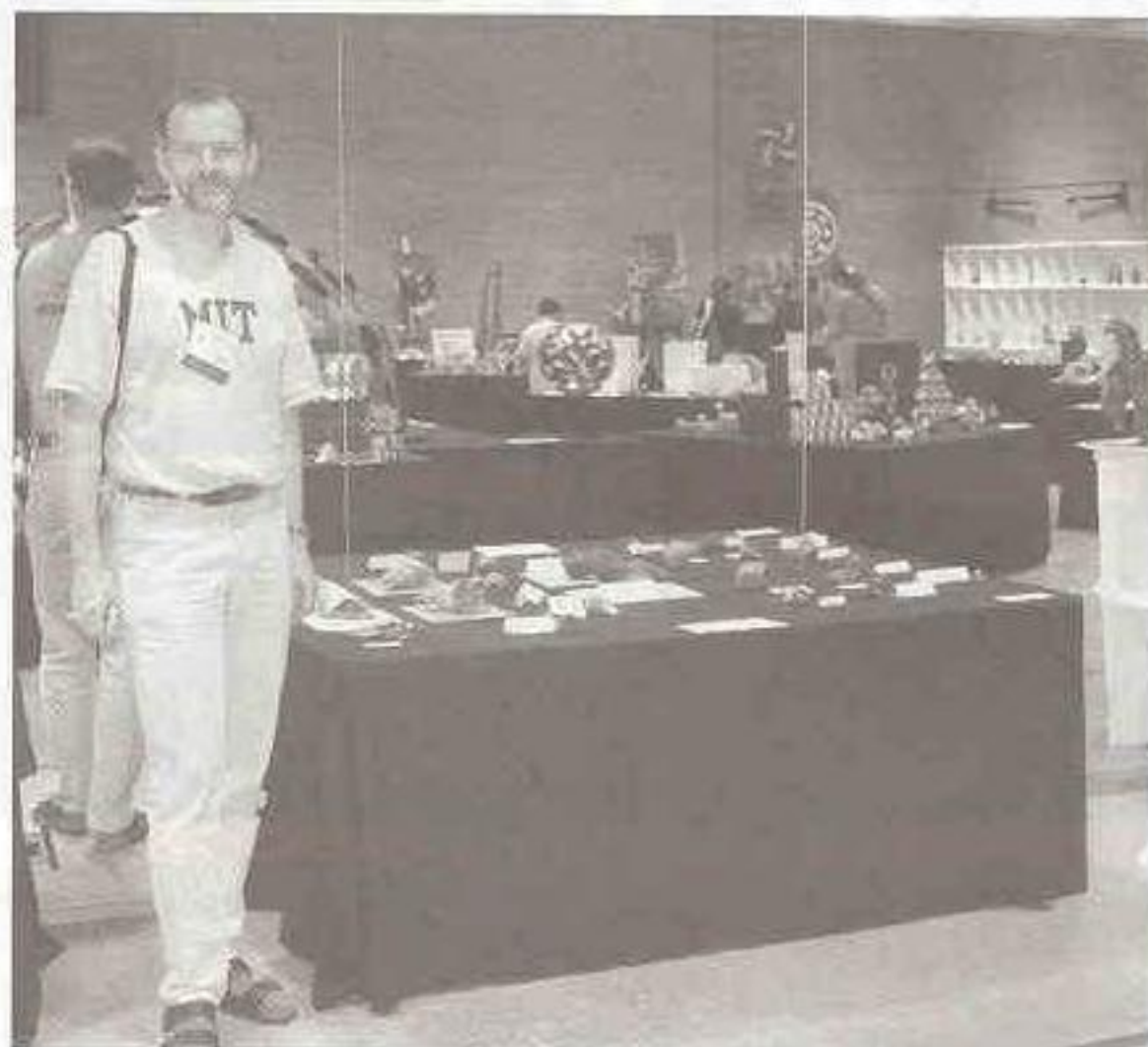
折紙作家というのは、競争心の強い奴らである(絶対、皆認めないけれど)。コンベンションの展示室に自分の作品を展示するときも、それだけでなく、ライバルの作品をチェックすることを忘れない。何か新しいテクニック、表現、使い古された題材の新たな見立て、そして自分の作品が他と比べてどうかをチェックすることを決して忘れない。2003年のOrigamiUSAコンベンションにおいても、神谷哲史、ダニエル・ロビンソン、そして私は、話の成り行きで2004年には新しいゴホンヅノカブトを創作して発表しようということになったのである。そして、2004年、お互いの作品の出来栄を見て、我々は、2005年も同じように作品を作ろうと決めた、ただし、今回はもっと広く我々の努力を知ってもらおうとも決めたのである。そして題材としては、「ヤドカリ」を選ぶことにしたのである。

私は、この種の競争・コンテストにほとんど応募しない。単に負けず嫌いなのである。だから今回も、何か商品や賞が出るわけではなく、ただそこかしこの折紙者があれこれ言うだけである。こうでなくちゃ。

理想的な題材

で、2004年のコンベンション終了後すぐ、2005年ヤドカリ戦争は幕を開けたのである。ヤドカリは、いくつものチャレンジを我々に提起してくれる理想的な題材なのだ。甲殻類ならではの多数の足と触角に加え、左右非対称の上立体的で渦を巻く貝殻まで不切正方形一枚で折り出すこと、そしてさらに胴体と貝殻の色分け、2つのハサミの大

▶ 展示ブースの
前にたつ筆者



きさの非対称性(その人の創作の哲学にもよるが)などを的確に表現し、なおかつこの題材をきちんと捉えることがいかに難しいことか。この作品には、作家のデザイン・紙の選択・折り・仕上げ技術のすべてが込められる事になる。

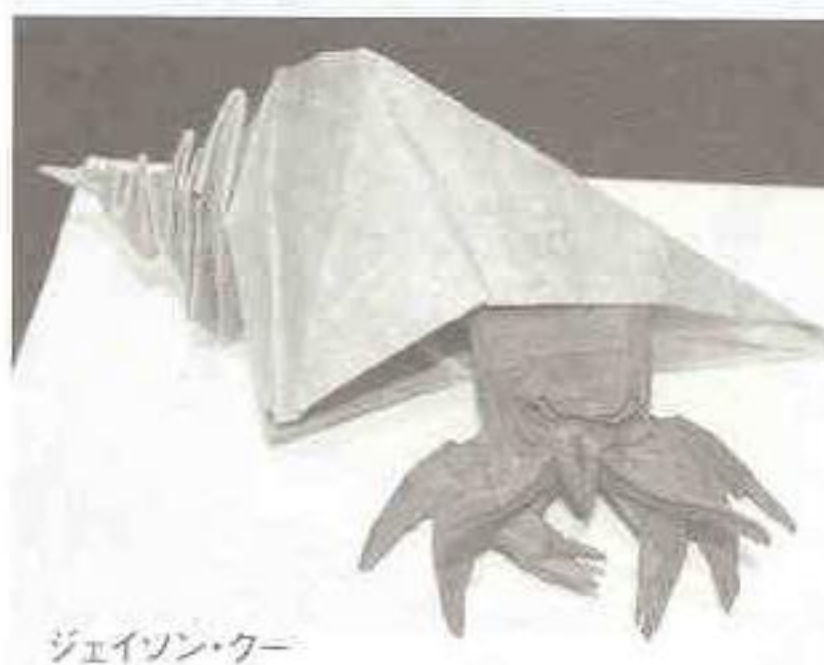
13人の勇者

ヤドカリ戦争は静かにメールで宣戦布告された。誰でも参戦可能である(賞品は何も(尊敬のまなざし以外)は出ません)。2005年のOrigamiUSAコンベンションがその舞台となる。2004年の冬、すでに多くの折紙者が参戦を宣言していた。次回コンベンションの展示担当のバン・コーネリアスさんに、ヤドカリ戦争用のテーブルを用意してくれるよう頼んだせいか、13人の勇者がここに名乗りを上げたのである。ジェイソン・クー、ベン・マラー、ブライアン・チャン、ジム・コウリング、アンドレア・ホークスリー、ジェームス・ルーカス、私ラング、さらに日本から桜井智紀、神谷亮、宮本宙也、中井努、森末圭、そして神谷哲史も参戦した。

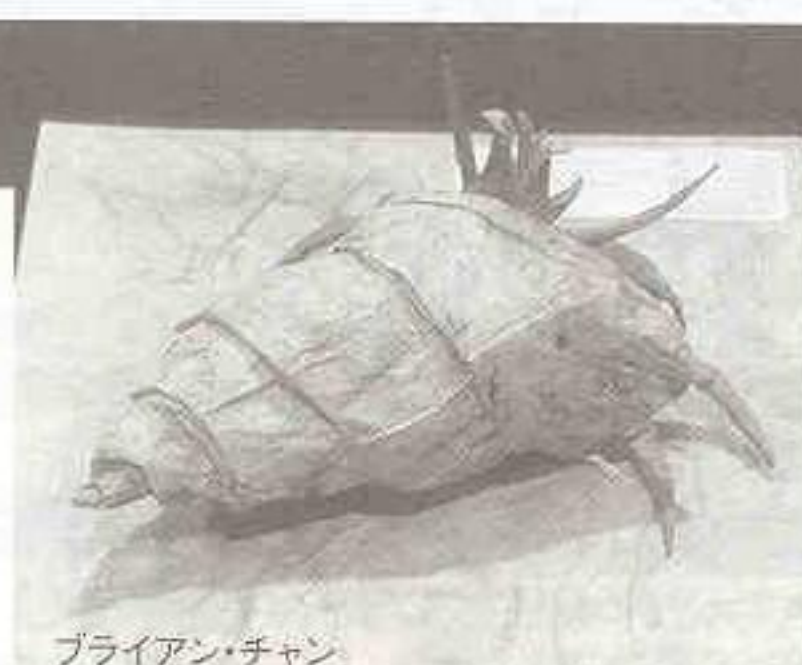
ヤドカリの創作は多少の経験があった。1980年代後半と1990年代初めに2種類のヤドカリを創作している。だからこれを出発点にすることが出来た。が、これは私のOrigami Sea Lifeに出版されているので誰でもこれをヒントにすることが出来る。今回

のような「折紙戦争」では、以前にあった作品を超える何かを作るべく皆腕を磨いているのだ。でもだからこそ私は、自分の作品をベースにしつつ、それをを超えるはるかに良いものを作る義務があるのだ! 貝殻と甲殻類のマッチングは手馴れているが、これは逆にまったく新しいアプローチを遮断するブラインドにもなってしまうものである。

当日、勇者たちの作品が目の前に現れたとき、皆新しい、自分自身のアプローチに成功していることを発見した。誰一人として同じ基本形は使わなかったが、皆正方形の対角線を軸として作品を展開していた。しかし、実際の作品の手法・仕上げは、それぞれ著しく異なっていた。あるものは幾何学的様式美をもち、又あるものは曲線的でより生物らしかった。貝殻も、曲線的なもの、角張ったもの、トゲつきのものなど色々だった。さらに「家型」の貝殻もあった。文字通りの「宿」借りである。写真をご覧いただければ分かるが、折り紙というアートの無限の可能性の証明であることは間違いない。誰が勝者かって? 誰も勝者ではないし、敗者で



ジェイソン・クー



ブライアン・チャン



アンドレア・ホークスリー



ロバート・J・ラング(正面)



宮本宙也



中井 努

もない。これは勝敗を決するための「戦争」ではないのだ。個人的にはブライアン・チャンの貝殻と、神谷哲史の貝殻と本体の調和に感心したが。

折り紙の世界では、折り紙というアートが皆が共有しているという意識が高く、本当の意味での「競争」意識は生まれてこない。だから、「勝つために」自分の手法や折り方を隠す必要は無いのだ。今回の「戦争」でも、皆自分の技術や紙選びのセンスなどを惜しみなく皆の前にさらけ出してい

た。この共有意識こそが、折り紙の世界の発展につながっていくのだ。

2006年は帆船だ

最後に：来年の2006年OrigamiUSAコンベンションでも「開戦」する。今度の題材は「帆船」だ。バット・クロフォードの船(Full-Rigged Ship)以来の傑作を期待したい。申し込み？ただ来年6月に現地に作品を持って来ればいいのだ。諸君の奮戦を期待している。

ジェームズ・ルーガス



編注：ここで紹介されていない作品写真はP.20、21のカラーページで紹介しています。

◆MASTERS OF ORIGAMI展 速報



◀シユテファン・ペーパー氏のレッド・ブル

オーストリア・ザルツブルクにあるHANGAR-7という展示場で、MASTERS OF ORIGAMI展が開催されている。これはRED BULLというスタミナドリンクの会社がスポンサーになって世界中の折紙作家に呼びかけ開催されたもの。一昨年、サンディエゴのミンゲイ・ミュージアムで開かれたORIGAMI MASTERWORKS展に続く、世界規模の展覧会だ。

今回のエキジビションは、スポンサーのおかげで何から何までスケールが違う。作品の出陳を呼びかけられたビッグネームの折紙作家の殆どが会場に招待された。そもそも、今回ほどビッグネームが一堂に会するのは初めてのことでないだろうか。

HANGAR-7という建物にはしゃれたレストラン、バーもあり、全てに於いて盛り上がりを出している。特に7月7日の木曜日の晩にはレセプションがあり、回転寿司のようなカウンター、ウェイターがサービスするア



ジアンテイストの料理など、どれを取っても素晴らしいの一語。レセプションの招待者も300人は超えていた。途中でジェレミー・シェーファー氏のパフォーマンスもあった。

さらに吉澤喜代氏による祝辞と挨拶があり、吉澤氏の影響を受けた人達が緊張の面もちで聞いていたのが印象的であった。

作品の図録も豪華なものである。巻頭から吉澤氏の足跡を紹介するページが続き、海外における絶対的な評価の高さを改めて感じた。この図録には各作家の作品が全てカラーで紹介されている。(Amazon.co.jpでも購入できるようである。)

余談だが、羽田孜元総理がふらりと会場に姿を現した。布施知子氏が空港で出会い、今回のエキジビションを伝えたことによるものである。(やまぐち)



▲祝辞と挨拶を述べる吉澤喜代氏。左は通訳をするジュン・サカモト氏



▲40人ほどの招待者が輪になって順に図録にサインをした。1人50冊がノルマだ。左から加瀬三郎氏、エリック・ジョフゼル氏、デビッド・プリル氏、吉澤喜代氏、筆者



▲プライベートでオーストリアを訪れていた羽田孜元総理も見学に。右から、羽田夫人、布施知子氏、羽田孜元総理、筆者

◆第11回折紙探偵団コンベンション直前情報

◆講演会演者決定

8月19日の特別講演会では、前号でお知らせした三谷純氏に加えて、吉野一生基金招待者のニック・ロビンソン氏、オーストラリアから来日中のマシュー・ガーディナー氏による講演がおこなわれることが決定しました。最先端のサイエンスから芸術論、さらにオーストラリアの折り紙事情まで、さまざまな視点・角度から「折り紙」に迫る興味深い講演会となることが予想されます。

特別講演会は参加費無料です。事前登録も不要ですので、お気軽にお誘い合わせの上ご来場ください。

◆作品展示について

毎年たくさんの力作が持ち込まれる自由展示コーナー。当日の展示場での混乱を避けるために今年からは、出品される際に事前の申込みが必須となります。作品数や展示に必要な面積をあらかじめお知らせいただくことにより、当日のスムーズな設置作業が可能になりますので、ぜひご協力いただきたいと思います。

◆名古屋でコンベンション開催決定

昨年まで静岡で開催されていた「静岡コンベンション」が会場の都合で開催が難しくなり、今年から名古屋に移して開催されることになった。会場も名古屋芸術大学の西春キャンパスを借りることができた。

何かと話題の多い名古屋。万博が終わったあとではあるが観光がてらお出かけになつては如何でしょうか。

会場：名古屋芸術大学西春キャンパス
(愛知県西春日井郡西春町)

名古屋駅から名鉄犬山線で15分、
徳重名古屋芸大駅から徒歩10分

東京友の会 ※折り紙は各自持参

会場=文京シビックセンター／参加費=300円(中学生以下100円)／講習会=14:00～／研究会=16:00～

●8月6日(土)／3階障害者会館・和室／講師：木村良寿／作品：未定

●9月3日(土)／地下1階生涯学習センター・学習室／講師：宮島 登／作品：魔法使いの弟子

作品展示を希望されるかたは、「コンベンション参加受理票」に同封されている「作品展示申込用紙」に必要事項をご記入の上、郵送またはファックスで事務局までご送付下さい。

◆懇親会にも新企画

懇親会会場は、昨年と同じ東洋大学のスカイホール。高層からの眺めを楽しみながら、国内だけでなく海外の折り紙ファンとも交流ができるまたとない機会です。その懇親会の呼び物に、今年は新しい企画が加わりました。

それはなんと、今年の一生基金招待者であるニック・ロビンソン氏と西川慎司氏(西川誠司氏の弟)によるミュージックパフォーマンス。ぶっつけ本番になる模様で、何が飛び出すかは当日参加してみるまでわかりませんが、昨年の懇親会に勝るとも劣らないにぎやかなパーティーとなることは確実です。

さらに、折り紙を使ったゲームは前回お知らせしたとおりの、「ナイフとフォークで折る」折り鶴早折選手権です。非常に過酷(?)なゲームになることが予想されるため

か、依然として参加希望者が少ない状況ですが、これからもひきつづき参加して下さるかたを募集しています。優勝賞品には、幻の絶版本が出る可能性もありますので乞うご期待! 古い絶版本が手に入らないとお嘆きのかた、この機会を逃す手はありません。

事前準備は禁止しておりませんので、参加ご希望のかたはぜひ今から練習を重ねておいてください。出場にあたっては事前登録が必要になりますので、事務局にお問い合わせいただけますようお願いいたします。

◆オークションもお忘れなく!

コンベンション最終日を締めくくるのは、こちらも毎年恒例となっている「折り紙関連グッズオークション」。この瞬間だけのために品物を貯めておられるかたも多い(笑)というほどの、開催前から熱気が充満したイベントとなっています(折り鶴付きの物品には目がない某M氏の動向にも要注目)。参加者のみなさまからご提供いただいた品物が頼りですので、なにとぞご協力をよろしくお願い致します。

前出のゲーム大会と同様、こちらでも貴重なレアグッズが出品される可能性があります。最後の最後まで注目度の高いイベント満載となる予定のコンベンション、参加者のみなさまと共に盛り上げてゆくことができれば幸いです。

編集後記

■ザルツブルクのエキシビションは本当に凄かった。■しかし残念なことに日本からの出陣者がそれ程でもなかったことだ。■それには日本側の案内の悪さにも原因がある。■また、この手のことに積極的になれないのが日本の作家の弱いところか。■これからの作家にはもったいぶらずにもう少し積極的に交流を図ることをお勧めする。■今号の特集。あとに続く人達に歴史があったことを記憶に残して欲しい。■ザルツブルクではその故、吉澤章氏の未亡人とご一緒できた。(や)

ホームページ

折紙探偵団 <http://www.origami.gr.jp/>
団員パスワード/Pyramid(大文字・小文字別)

折紙探偵団

2005年7月25日発行 第16巻2号通巻92号
発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/西川誠司

編集人/山口 真

編集スタッフ/松浦英子、神谷哲史

デザイン/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

発売元/おりがみはうす

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

定価635円(本体605円)

■ORIGAMITANTEIDAN / No.92 / Published on 25, July 2005 by Japan Origami Academic Society, 1-33-8-216
Hakusan Bunkyo-ku 113-0001 Tokyo JAPAN / Cover Photo: Yoshizawa Akira: Photographed by Yurindo Co., LTD. / Publisher: Nishikawa Seiji / Editor in Chief: Yamaguchi Makoto / Editor: Matsuura Eiko, Kamiya Satoshi / Editorial Design: ORIGAMI HOUSE / Translator: Tateishi Koichi

※このページの商品の取扱いはいすべて おりがみはうす です。日本折紙学会とは別になります。

I♥ORIGAMI おりがみはうす商品案内

広告のコーナー

website = <http://www.origamihouse.jp/> E-mail = info@origamihouse.jp

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only. For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.



第10回記念 折紙探偵団 国際コンベンション 折り図集vol.10

日本折紙学会 編/2,000円/送料420円
B5判/全256頁

国内・外から集まった秀作55作品を収録

好評発売中!

王鳥・津田良夫、フレキシブル・ボール・川崎敏和、コスモスフィア・川村みゆき、ガメラ・笹出晋司、猿の面・藤誠志、ネコ・デビッド・ブリル、ラット・エリック・ジョワゼル、ハクトウワシ・ネイサン・ゲラー 他



神谷哲史作品集 神谷哲史 著

山口 真 編 立石浩一 訳

4,000円/送料420円

B5判/全228頁/カラー口絵4頁/19作品収録

超複雑系折り紙を得意とする神谷氏の8年間の集大成。大幅に加筆されて折りやすくなったバハムート、初期バージョンから改良されたエンシェントドラゴンの折り図等19作品の折り方を収録。

大好評発売中!

※第10回折り図集と神谷作品集の2冊同時注文の送料は530円です。

書籍名/著者・編者	価格(税込)	送料	内 容
西川誠司作品集 西川誠司 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,200円	国内一律 1冊 420円 (梱包込)※ 複数冊は 異なります	B5判/全196頁/カラー口絵4頁/32作品収録 シンプルからコンプレックスまで幅広く楽しめる本
折紙図鑑「昆虫1」 川畑文昭・西川誠司 共著 山口 真 編	3,100円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/17作品収録 '93~'94年の「昆虫戦争」で誕生した作品の記録
折紙図鑑「昆虫2」 ロバート・J・ラング 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,500円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/18作品収録 初心者お断り、世界で一番難しい昆虫折り紙の本
折り紙色紙百花 田中具子 著 山口 真 編	2,500円		B5判/全120頁/カラー口絵8頁/31作品収録 色紙に貼り込んで飾る花の折り紙作品集
一生 スーパーコンプレックス おりがみ 吉野一生 著	2,900円		B5判/全200頁/カラー口絵8頁 トリケラトプス全身骨格を含む14作品収録
面~The Mask~ 布施知子 著 山口 真 編	3,300円		B5判/全200頁/全27作品カラー写真紹介 作者がユニットに出会う前の、お面だけの作品集
第9回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.9 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作50作品を収録
第8回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.8 日本折紙学会 編	2,000円	国内一律 1冊 420円 (梱包込)※ 複数冊は 異なります	B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作45作品を収録
第7回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.7 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外の創作家の秀作51作品を収録

※第1回~第6回の折り図集は全て絶版です

※書籍は郵便の「冊子小包」で発送しております。送料には梱包材代が含まれています

書籍複数の 送料ご案内	書籍2冊の送料は530円になります。(同じ書籍2冊でも同様)	例 外 (例:折り図集8、9と色紙百花各1冊)のみ530円です
	書籍3冊の送料は670円になります。(例外を除く・右記参照)	

上記以外の場合はお問い合わせください/書籍と紙製品は別発送となりますのでご了承ください

商品名	価格(税込)	送料	内 容	「折紙探偵団」専用ファイル
洋紙にエンボス加工をしたちよがみ 花だより 30cm判	490円	国内一律 1~3セット 440円※	30×30cm/16枚入(2色×8枚) 桜柄の春らしい色調 ※和紙ではありません	
洋紙にエンボス加工をしたちよがみ 木の葉 30cm判	490円		30×30cm/16枚入(4色×4枚) 葉っぱをモチーフにしたシックな柄 ※和紙ではありません	
恐竜柄おりがみ用紙	1,000円	国内一律 1~2セット 440円 3~5セット 630円※	35×35cm/10枚入/70kgの 洋紙に細かい恐竜模様を印刷	
恐竜柄おりがみ用紙 3種類から 折り図つきセット 選べます	1,200円		1. ドラゴン(北條高史作) 2. ティラノサウルス(神谷哲史作) 3. カルノタウルス(神谷哲史作)	「折紙探偵団」専用ファイル 変形B5判/箔押しロゴ入/雑誌 「折紙探偵団」1年分(6冊)収録用 1冊750円 送料: 1冊250円(合計1,000円) 2冊350円(合計1,850円) 3冊470円(合計2,720円) ※ファイルは定形外郵便で発送しております (書籍・紙とは別発送になります) 送料には梱包材代が含まれています

※紙製品は定形外郵便で発送しております(書籍とは別発送になります)。
送料には梱包材代が含まれています

只今制作中 発行日は未定です。気長に待っていて下さい
折紙図鑑「犬」/佐野康博・著 犬の折り紙第一人者の作品集
北條高史作品集/北條高史・著 あの名作の折り図も掲載予定

本ページに記載していない商品は、現在取り扱っておりません
ご送金頂いてもお送りできませんのでご注意ください



ギャラリー おりがみはうす
〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216
TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080
E-mail: info@origamihouse.jp 10時~18時 日・祝休

商品の申し込み方法

冊数と料金をよくお確かめの上ご注文ください。

先に**郵便振替**か**現金書留**で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を発送させて頂きます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れのない様お願いします。

郵便振替番号 **00120-9-715400**

加入者名 **おりがみはうす**

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。
※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。
※現金書留の場合は左記の住所へお送りください。
※商品のお届けは通常、送金から約1週間~10日です(お盆・年末年始等を除く)。

■商品を複数ご注文の場合は、送料が変わってきます。電話又はメールでお問い合わせください。

広告有効期限:2005年9月25日

夢・創・彩・60色の宝箱

新しく、よりよい内容でおとどけする！

トヨー 創造力, 色彩感覚を養う。

教育おりがみ

折り方の
手本が
大幅に充実

折り図指導
やまぐち 真

2005年 8月20日 発売

お客様の意見を取り入れ

教育おりがみとして内容さらに充実！

- おりがみはベーシックな色を基本にまとめました。
- セットされている色と枚数をパッケージに表示しました。
- 手本にはパッケージの作品と簡単な作品の折り図を入れました。
- 手本に折り図記号を表示し、わかりやすくなりました。
- 手本の作品の写真をパッケージに表示しました。



¥50 (税込価格 ¥52)
教育おりがみ (15.0cm)

折図
5点



¥100 (税込価格 ¥105)
教育おりがみ (10.0cm)

折図
8点



¥100 (税込価格 ¥105)
教育おりがみ (11.8cm)

折図
9点



¥100 (税込価格 ¥105)
教育おりがみ (15.0cm)

折図
10点



¥100 (税込価格 ¥105)
教育おりがみ (17.6cm)

折図
10点



¥150 (税込価格 ¥157)
教育おりがみ (15.0cm)

折図
10点



さまざまな作品に対応出来る

NEW 単色おりがみ

2005年 9月1日 発売



あかぬ	あか	しゅ	たいたい	かき	きだいだい	やまぶき	きすいせん	ページ	き	レモン	クリーム	あさみどり
うすきどり	きみどり	みどり	あみどり	ふかみどり	オリーブ	せいじ	うすみどり	さくら	うすピンク	ピンク	もも	べに
あかむらさき	ぼたん	むらさき	すみれ	ふし	うすふし	あおふし	うすみず	あさぎ	みず	そら	あお	くんじょう
こん	ローズ	うすだいだい	あんず	ペーパージュ	うすおうと	こがね	おうと	こはく	あかちや	ちや	くり	チョコレート
こげちや	くろ	はい	ねずみ									
うすねず	しろ	きん	ぎん									

単色おりがみは色数も増え、発色も良くなりました。
それにもない、品番・呼称・JANが変更になりました。
お気軽にお問合せください。



株式会社トヨー

ホームページ <http://www.kidstoyo.co.jp>

●写真は印刷ですので実際の商品とは色は違う場合があります。※内容・デザインは一部変更になることがあります。
本社 〒120-0044 東京都足立区千住緑町2-12-12 TEL03-3882-8161
大阪支店 / 名古屋営業所 / 福岡営業所 / 札幌出張所 / 松山出張所